岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　76

荒神風呂遺跡
荒神風呂古墳

県営落合工業団地造成
工事に伴う発掘調査

1990年3月

岡山県教育委員会

荒神風呂遺跡
荒神風呂古墳

県営落合工業団地造成
工事に伴う発掘調査

1990年3月

岡山県教育委員会

序

埋蔵文化財のもつ特性の一つとして、地下にあるために人目に触れず、その存在が認められにくいということがあります。岡山県下では今までに14,000か所を超える遺跡が知られていますが、まだまだ確認されていない遺跡も多いものと思われます。

今回報告いたします荒神風呂遺跡・荒神風呂古墳も、県営工業団地造成計画に伴う事前の分布調査によって新たに発見されたものであります。その保存につきまして事業担当部局との協議を重ねましたが、設計の変更が困難であり、発掘調査による記録保存の措置をとったものであります。

調査の結果、荒神風呂遺跡におきましては弥生時代中期にはじまる集落と、その時代の水利施設を明らかにすることができました。また、硯をはじめとする出土須恵器の中には文字を刻んだものも含まれていました。

荒神風呂古墳につきましても、五世紀代の古墳であり、そこに複数の埋葬が行なわれたことを確認するなど、貴重な成果を得ることができました。

これらの成果を収録したこの報告書が、今後の調査研究の資料として、また文化財の保護のために活用されれば幸いであります。

調査にあたっては、岡山県文化財保護審議会委員をはじめ、落合町教育委員会、岡山県土地開発公社、岡山県商工部ならびに関係各位から多大な御指導と御協力を賜りました。報告書刊行にあたり、深甚の謝意を表します。

平成２年３月

岡山県教育委員会
教育長　竹　内　康　夫

例　　言

1．本書は、県営落合工業団地造成工事に伴い、岡山県商工部企業立地対策課の委託を受けて、岡山県古代吉備文化財センター（以下、文化財センター）が実施した、荒神風呂遺跡及び荒神風呂古墳の発掘調査概要である。

2．調査対象地は、岡山県真庭郡落合町西河内字荒神風呂に所在した。

3．調査期間は、確認調査が昭和62年10月５～９日、第１次調査が昭和63年２月８日～３月15日、第２次調査が昭和63年４月11日～７月29日であり、確認調査及び第１次調査を光永真一が担当し、第２次調査を平井泰男が担当した。

4．発掘調査にあたっては、岡山県文化財保護審議会委員鎌木義昌・近藤義郎・水内昌康の各氏から御指導・御教示を得た。

5．遺構の実測については、第１次調査の一部を谷岡孝久（当時奈良大学生）が担当した以外は担当者が行ない、写真撮影については担当者が実施した。

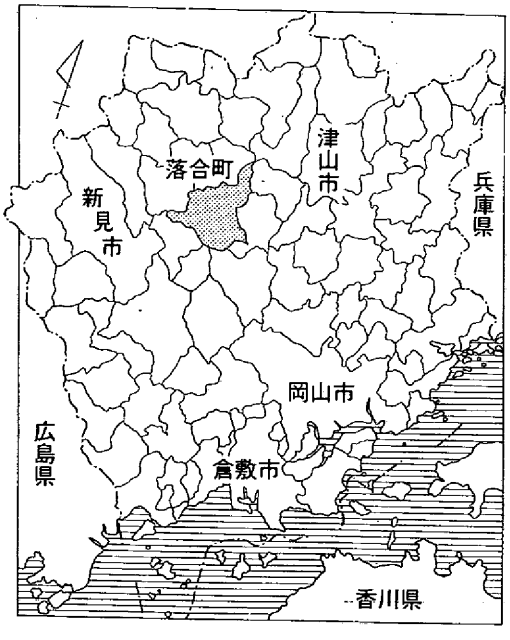
6．本書の執筆は、第１章を光永が、第２・４・５章を平井が担当し、第３章については平井・光永が分担し、文末に示した。編集は平井が担当した。

7．土器観察表における色調は『新版標準土色帖（1988年版）』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修）に基づいて記入している。また、石器一覧表における材質は調査担当者による肉眼観察に基づいて記入している。

8．本書に用いた高度値は海抜高であり、方位は第１～３・５～７・９図を除いて磁北である。

9．第６図は、建設省国土地理院発行の２万５千分の１地形図「勝山」を複製し、加筆したものである。

10．本書に関係する遺物・実測図・写真・フィルム等の資料は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）において保管している。


津山市
落合町
新見市
兵庫県
岡山市
広島県
倉敷市
香川県

本　文　目　次

第１章　調査の経緯 …… 1
　第１節　調査の契機 …… 1
　第２節　調査の方法と体制 …… 3
　　（１）確認調査 …… 3
　　（２）第１次調査 …… 5
　　（３）第２次調査 …… 6
　　（４）調査体制 …… 6
　第３節　調査の経過 …… 8
　　（１）確認調査 …… 8
　　（２）第１次調査 …… 8
　　（３）第２次調査 …… 8
第２章　遺跡の位置と環境 …… 11
第３章　荒神風呂遺跡の調査 …… 14
　第１節　立地と調査区 …… 14
　第２節　遺構・遺物 …… 15
　　Ⅰ　住居跡 …… 15
　　Ⅱ　土壙 …… 26
　　Ⅲ　その他 …… 29
　第３節　小結 …… 48
第４章　荒神風呂古墳の調査 …… 49
　第１節　立地と調査前の状況 …… 49
　第２節　墳丘と葺石 …… 50
　　Ⅰ　墳丘 …… 50
　　Ⅱ　葺石 …… 51
　第３節　埋葬施設 …… 51
　　Ⅰ　墳丘内 …… 51
　　Ⅱ　墳丘外 …… 55
　第４節　集石遺構 …… 61
　第５節　その他の遺構・遺物 …… 63
　　Ⅰ　土壙 …… 63
　　Ⅱ　配石遺構 …… 65
　　Ⅲ　溝状遺構 …… 65
　　Ⅳ　遺物 …… 66
　第６節　小結 …… 70
第５章　まとめ …… 71

挿図目次

第1図　遺跡位置図 …… 1
第2図　造成計画範囲図（太線内）（1/6000） …… 2
第3図　確認調査　トレンチ位置図（1/3000） …… 3
第4図　トレンチ　出土土器（1/4） …… 4
第5図　調査範囲図（1/3000） …… 5
第6図　周辺遺跡分布図（1/25000） …… 12
第7図　遺跡周辺地形図（1/9000） …… 14
第8図　遺跡全体図（1/400） …… 折り込み 1
第9図　発掘調査範囲図（1/3000） …… 15
第10図　竪穴住居1　平・断面図（1/60） … 16
第11図　竪穴住居1　柱穴　断面図（1/60） …… 17
第12図　竪穴住居1　中央穴　平・断面図（1/30） …… 17
第13図　竪穴住居1　炉1・3　平・断面図（1/20） …… 17
第14図　竪穴住居1　出土石器（1/2） …… 18
第15図　竪穴住居1　出土土器（1/4） …… 19
第16図　竪穴住居2　平・断面図（1/60） … 20
第17図　竪穴住居2　柱穴　断面図（1/60） …… 21
第18図　竪穴住居2　中央穴　平・断面図（1/30） …… 21
第19図　竪穴住居2　出土土器（1/4）・石器（1/2） …… 22
第20図　竪穴住居3　平・断面図（1/40） … 23
第21図　竪穴住居3　柱穴　断面図（1/40） …… 24
第22図　竪穴住居3　中央穴　平・断面図（1/30） …… 24
第23図　竪穴住居3　出土土器（1/4） …… 25
第24図　竪穴住居4　平・断面図（1/60）および中央穴　平・断面図（1/30） …… 25
第25図　土壙1　平・断面図（1/50）および出土土器（1/4）・石器（1/2） …… 26
第26図　土壙2　平・断面図（1/40）および出土土器（1/4） …… 27
第27図　土壙3　平・断面図（1/30） …… 28
第28図　土壙4　平・断面図（1/30） …… 29
第29図　土壙5　平・断面図（1/30） …… 29
第30図　柱穴群1　平・断面図（1/250） … 30
第31図　溝状遺構　平面図（1/150）・断面図（1/50） …… 31
第32図　溝状遺構内水利施設（1/50） …… 31
第33図　溝状遺構下層　出土土器（1/4） … 32
第34図　溝状遺構内水利施設　出土石器（1/2） …… 32
第35図　溝状遺構　出土土器(1)（1/4）・石器（1/2） …… 33
第36図　溝状遺構　出土土器(2)（1/4） …… 34
第37図　溝状遺構　出土土器(3)（1/4） …… 35
第38図　溝状遺構　出土土器(4)（1/4） …… 36
第39図　溝状遺構　出土土器(5)（1/4） …… 37
第40図　溝状遺構　出土土器(6)（1/4） …… 38
第41図　溝状遺構　出土土器(7)（1/4） …… 39
第42図　溝状遺構　出土鉄器（1/2）・土錘（1/2） …… 39
第43図　調査区西端部包含層　トレンチ断面図（1/80） …… 40
第44図　調査区西端部包含層　出土土器(1)（1/4） …… 41
第45図　調査区西端部包含層　出土土器(2)（1/4） …… 42
第46図　柱穴群2（14・15）および調査区西端部包含層（16）　出土石器（1/2） …… 43
第47図　調査区西端部包含層　出土土錘（1/2） …… 43
第48図　古墳調査前の地形測量図（1/300） …… 49
第49図　墳丘検出中　出土鉄器（1/2） …… 50
第50図　古墳全体図（1/150） …… 折り込み 2
第51図　墳丘断面図（1/80） …… 折り込み 3
第52図　1号主体部　平・断面図（1/40） … 52
第53図　1号主体部　出土管玉（1/1） …… 52
第54図　2号主体部　平・断面図（1/30） … 53
第55図　3号主体部　平・断面図（1/30） … 54
第56図　1号箱式石棺墓　平・断面図（1/30） …… 56
第57図　2号箱式石棺墓　平・断面図（1/20） …… 58
第58図　石蓋土壙墓　平・断面図（1/20） … 59
第59図　土壙墓　平・断面図（1/30） …… 60
第60図　配石土壙墓　平・断面図（1/30） … 60
第61図　集石遺構　平・断面図（1/40） …… 61
第62図　集石遺構　出土土器（1/4） …… 62
第63図　その他の遺構・遺物全体図（1/300） …… 63
第64図　土壙1　平・断面図（1/30）および出土土器（1/4） …… 64
第65図　土壙2　平・断面図（1/50） …… 64
第66図　配石遺構　平・断面図（1/30） …… 65
第67図　溝状遺構1　断面図（1/20） …… 66
第68図　溝状遺構2　断面図（1/30） …… 66

第69図　土器№1　出土状態（1/10）および実測図（1/4）…… 66
第70図　土器№2～№7　実測図（1/4）… 67
第71図　出土古銭（1/1）…… 68
第72図　荒神風呂遺跡　出土須恵器　ヘラ描き文字（1/1）…… 72
第73図　荒神風呂古墳　2・3号主体部（1/50）…… 73

図　版　目　次

図版1－1　荒神風呂遺跡・荒神風呂古墳　遠景（南東から）
2　荒神風呂遺跡・荒神風呂古墳　遠景（西から）
図版2－1　荒神風呂古墳　近景（確認調査実施中）（南西から）
2　荒神風呂遺跡　近景（荒神風呂古墳から）（北西から）
図版3－1　荒神風呂古墳　確認調査　西トレンチ（西から）
2　同　北トレンチ（北から）
3　同　南トレンチ（南から）
4　同　東トレンチ（南東から）
図版4－1　荒神風呂遺跡　確認調査トレンチ掘開状態全景（西から）
2　荒神風呂遺跡　確認調査トレンチ掘開状態
図版5－1　荒神風呂遺跡　竪穴住居1（南から）
2　荒神風呂遺跡　竪穴住居1　中央穴，炉1・3（南東から）
図版6－1　荒神風呂遺跡　竪穴住居1　中央穴埋土（南から）
2　荒神風呂遺跡　竪穴住居1　炉1（南から）
図版7－1　荒神風呂遺跡　竪穴住居2（南西から）
2　荒神風呂遺跡　竪穴住居2　中央穴（南から）
図版8－1　荒神風呂遺跡　竪穴住居2　中央穴埋土（南東から）
2　荒神風呂遺跡　竪穴住居3（南西から）
図版9－1　荒神風呂遺跡　竪穴住居3（南西から）
2　荒神風呂遺跡　竪穴住居3　遺物出土状態（南西から）
図版10－1　荒神風呂遺跡　竪穴住居3　炭化材
2　荒神風呂遺跡　竪穴住居4（南西から）
図版11－1　荒神風呂遺跡　土壙1（南西から）
2　荒神風呂遺跡　土壙2（南東から）
図版12－1　荒神風呂遺跡　土壙3（南西から）
2　荒神風呂遺跡　土壙4（南東から）
図版13－1　荒神風呂遺跡　柱穴群1（南から）
2　荒神風呂遺跡　柱穴群2（南西から）
図版14－1　荒神風呂遺跡　溝状遺構（南東から）
2　荒神風呂遺跡　溝状遺構内水利施設（南東から）
図版15－1　荒神風呂遺跡　溝状遺構内水利施設（南西から）
2　荒神風呂遺跡　溝状遺構内水利施設（南東から）
図版16－1　荒神風呂遺跡　溝状遺構内水利施設掘上げ状態（南東から）
2　荒神風呂遺跡　溝状遺構内水利施設石包丁出土状態（南東から）
図版17－1　荒神風呂遺跡　溝状遺構断面（北から）
2　荒神風呂遺跡　南西端部（北西から）
図版18－1　荒神風呂古墳　全面調査前の状態（北から）
2　荒神風呂古墳　表土除去作業（南西から）
図版19－1　荒神風呂古墳　全景（南から）
2　荒神風呂古墳　全景（北西から）
図版20－1　荒神風呂古墳　葺石検出状態（南から）
2　荒神風呂古墳　葺石検出状態（南から）
図版21－1　荒神風呂古墳　葺石検出状態（南から）
2　荒神風呂古墳　墳丘断面（西から）
図版22－1　荒神風呂古墳　1号主体部（南東から）
2　荒神風呂古墳　1号主体部　管玉出土状態（南東から）
図版23－1　荒神風呂古墳　2号・3号主体部（北西から）
2　荒神風呂古墳　2号・3号主体部（北から）
図版24－1　荒神風呂古墳　2号・3号主体部（南西から）
2　荒神風呂古墳　2号・3号主体部（蓋石除去後）（北西から）

図版25—1　荒神風呂古墳　2号・3号主体部（蓋石除去後）（北から）
2　荒神風呂古墳　2号・3号主体部（蓋石除去後）（南西から）
図版26—1　荒神風呂古墳　2号・3号主体部枕石検出状態（南西から）
2　荒神風呂古墳　2号・3号主体部石材除去後の状態（北西から）
図版27—1　荒神風呂古墳　1号箱式石棺墓（南東から）
2　荒神風呂古墳　1号箱式石棺墓（蓋石除去後）（南東から）
図版28—1　荒神風呂古墳　1号箱式石棺墓　枕石検出状態（南東から）
2　荒神風呂古墳　1号箱式石棺墓　調査風景（南から）
図版29—1　荒神風呂古墳　2号箱式石棺墓（北から）
2　荒神風呂古墳　2号箱式石棺墓（蓋石除去後）（北から）
図版30—1　荒神風呂古墳　2号箱式石棺墓　石材除去後の状態（北から）
2　荒神風呂古墳　石蓋土壙墓（南から）
図版31—1　荒神風呂古墳　石蓋土壙墓（蓋石除去後）（南から）
2　荒神風呂古墳　石蓋土壙墓　石材除去後の状態　（南から）
図版32—1　荒神風呂古墳　土壙墓（南西から）
2　荒神風呂古墳　土壙墓　枕石検出状態（南東から）
図版33—1　荒神風呂古墳　配石土壙墓（南から）
2　荒神風呂古墳　集石遺構（南東から）
図版34—1　荒神風呂古墳　集石遺構（北から）
2　荒神風呂古墳　集石遺構（南西から）
図版35—1　荒神風呂古墳　集石遺構（南東から）
2　荒神風呂古墳　集石遺構　遺物出土状態（南東から）
図版36—1　荒神風呂古墳　集石遺構　遺物出土状態（南西から）
2　荒神風呂古墳　集石遺構　遺物出土状態（北東から）
図版37—1　荒神風呂古墳　集石遺構　集石除去後の状態（北から）
2　荒神風呂古墳　土器No.1（南東から）
図版38—1　荒神風呂遺跡　竪穴住居3　調査風景（東から）
2　荒神風呂古墳　2号・3号主体部調査風景（西から）
図版39　荒神風呂遺跡　出土土器
図版40　荒神風呂遺跡　出土土器
図版41　荒神風呂遺跡　出土土器
図版42　荒神風呂遺跡　出土ヘラ描き須恵器
図版43—1　荒神風呂遺跡　出土土器
2　荒神風呂遺跡　溝状遺構　出土石器
図版44—1　荒神風呂遺跡　竪穴住居1　出土石器
2　荒神風呂遺跡　柱穴群2周辺　出土石器
図版45—1　荒神風呂遺跡　出土石器
2　荒神風呂遺跡　竪穴住居1　出土石片
図版46—1　荒神風呂古墳　集石遺構　出土土器
2　荒神風呂古墳　墳丘検出中　出土鉄器
図版47—1　荒神風呂遺跡　出土鉄器・土錘，荒神風呂古墳　第1主体部　出土管玉
2　荒神風呂遺跡　溝状遺構　出土鉄滓
図版48—1　荒神風呂遺跡　溝状遺構　出土羽口
2　荒神風呂古墳　出土古銭（寛永通宝）

表　目　次

第1表　荒神風呂遺跡　出土土器観察表 …… 44
第2表　荒神風呂遺跡　出土土製品一覧表 … 47
第3表　荒神風呂遺跡　出土石器一覧表 …… 47
第4表　荒神風呂遺跡　出土鉄器一覧表 …… 47
第5表　荒神風呂古墳　出土土器観察表 …… 69
第6表　荒神風呂古墳　出土鉄器一覧表 …… 69
第7表　荒神風呂古墳　出土古銭一覧表 …… 69

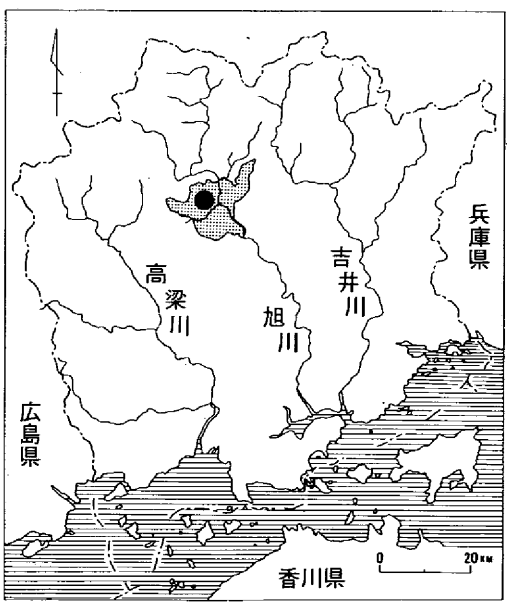
第１章　調査の経緯

第１節　調査の契機

昭和60年度、岡山県商工部企業立地対策課（以下、企業立地対策課）は、真庭郡落合町西河内地内における県営工業団地造成を計画し、事業範囲の決定に先立って、岡山県教育委員会文化課（以下、文化課）に当該地域内の遺跡の有無を照会した（第２図）。当該地域は、遺跡地図の上では空白地帯であったが、慎重を期すために文化課から落合町教育委員会へ計画地域内の分布調査を依頼した。町教育委員会専門職員による分布調査の結果、立木等が未伐開であるという前提条件のもとで、計画地域の中央部に位置する尾根上に古墳らしきもの１か所があることが指摘された。

これを受けて、企業立地対策課と文化課でその取り扱いを協議した結果、当該地点が造成計画の中央部に位置すること、この時点では遺跡内容について不確定要素も残ることなどにより、造成範囲の設定は計画どおりに進行することとなった。ついては、用地買収終了後、計画地内の伐開が終了した時点で文化課が再度現地踏査を行ない、必要箇所について確認調査を実施することを確認した。

伐開後の現地踏査は、企業立地対策課職員同行で文化課職員及び岡山県古代吉備文化財センター（以下、文化財センター）職員が昭和62年９月17日に実施し、古墳らしきもの１か所の位置を確認するとともに、古墳の立地する尾根を降った丘陵の南斜面下方において、既に掘削されていた沈砂池法面で須恵器の散布を確認した（第２図）。この現地踏査結果に基づき、尾根から丘陵南斜面にかけてを対象として、文化財センターが確認調査を実施することとなった。



第１図　遺跡位置図

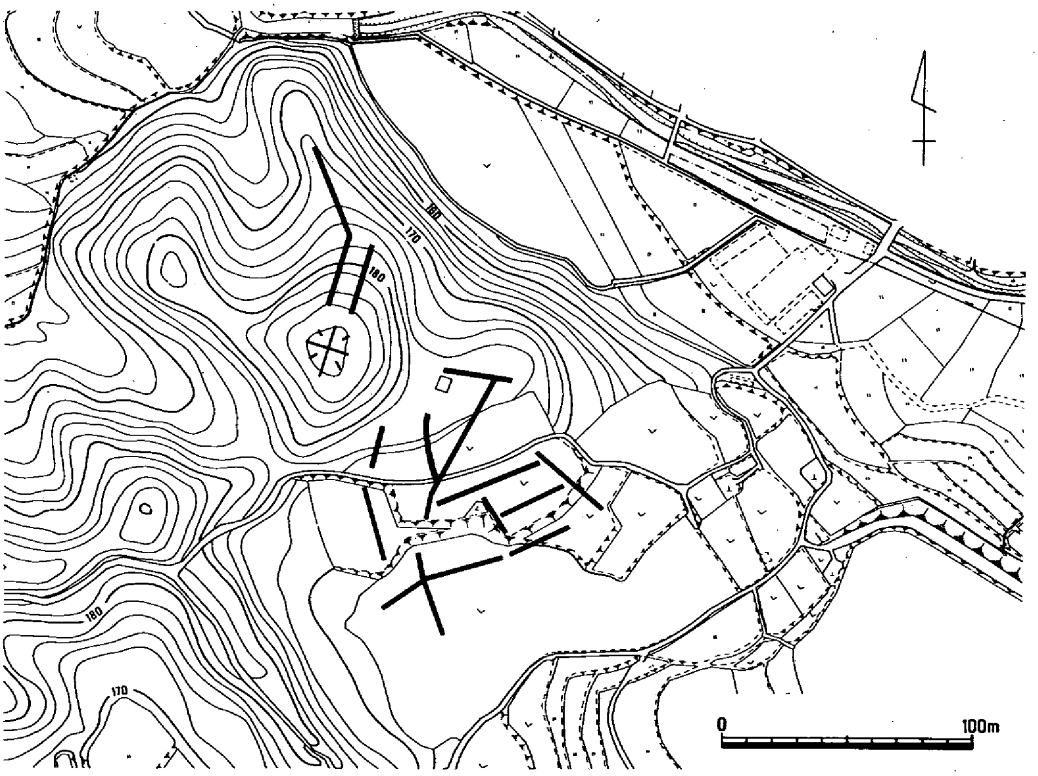
第２図　造成計画範囲図（太線内）（1/6000）

第２節　調査の方法と体制

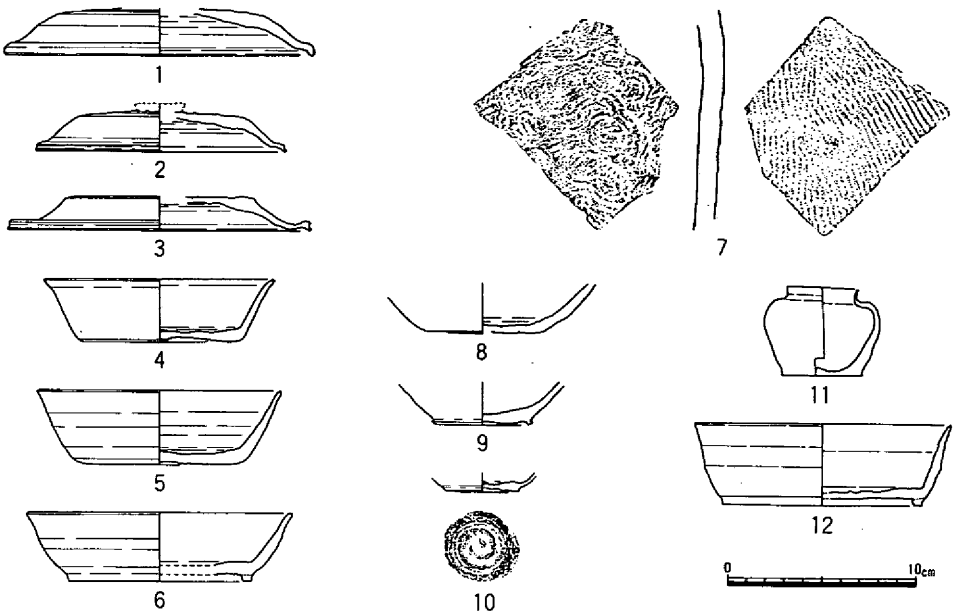
（1）確認調査

確認調査は、昭和62年10月５～９日に実施した。調査目的は２点あり、第一に尾根上の古墳らしきものが古墳であるかどうかを判断し、古墳である場合にはその規模・形状・時期等の把握に努めること、第二に須恵器出土地点について周辺における遺構の有無を確認し、その範囲・時期・性格等の把握に努める。特に第二点については、須恵器窯跡の可能性を含みつつも集落遺跡を念頭において、その立地する可能性の高い丘陵南斜面を中心対象とした。

尾根上の古墳らしき地点については、まず人力によって十文字のトレンチを掘り下げた（第３図）。その結果、表土を除去した時点で各トレンチとも墳端と想定される傾斜変換点付近で葺石と考えられる拳大の河原石を検出した。葺石の確認によって古墳と断定した後、墳形を把握するため４本のトレンチを増設したところ、葺石は検出されたものの明瞭なコーナーは確認されなかった。また、墳頂部のトレンチを拡幅して石室構造等の痕跡を求めたが、確認されなかった。いずれのトレンチからも遺物は出土しなかった。以上の内容から、この地点は径約15ｍ、高さ２ｍの葺石を伴う円墳で、石室構造をもたない前半期の古墳と判断された。



第３図　確認調査　トレンチ位置図(1/3000)



第４図　トレンチ出土土器(1/4)

南丘陵斜面については、重機を使用してトレンチ調査を実施した（第３図）。須恵器散布地点は、畑地として開墾された丘陵斜面から埋積した谷部への傾斜変換点にあたる。この丘陵の北東側斜面は傾斜がきつく、集落立地は困難と判断して対象から外した。また、谷部の北西に位置する尾根についても同様の理由で対象から外した。トレンチ幅は約２ｍとし、総延長約340ｍについて調査した。その結果、丘陵上では畑地への開墾もあり、各トレンチとも表土直下で第三紀層となり、これを掘り込む径20～30cm、深さ５～30cmの柱穴12本を検出したが、これについては底面までの掘り下げを行なわなかった。丘陵斜面においても第三紀層上面まで掘り下げたが、遺構は検出されなかった。これらの遺構周辺及びその他のトレンチにおいても遺物はほとんど出土していない。須恵器散布地点周辺においては、谷あるいは大溝状の落ち込みが確認された。その幅は約17ｍを超え、人力で掘り下げたが明確な底を見いだせなかった。この埋土からは、整理箱約１箱分の須恵器が出土し、その器種も杯・高台付杯・蓋・甕・平瓶等がある（第４図１～10）。このうち平瓶底部外面に「中」の刻字をもつもの（第39図120）があり、注目された。

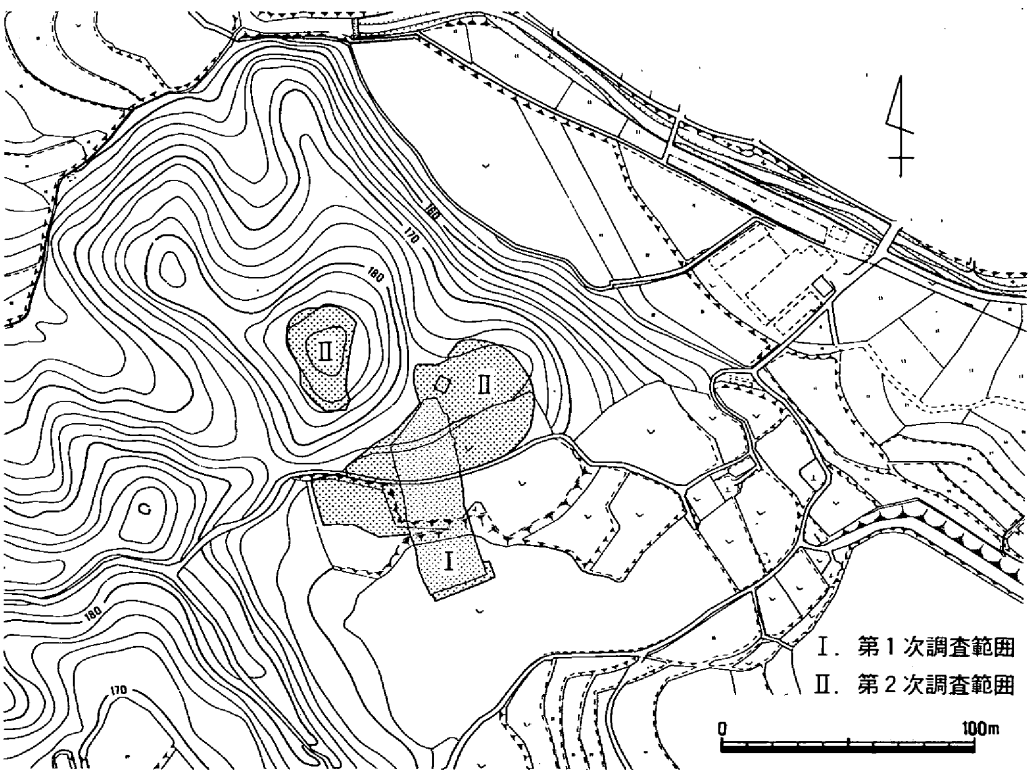
以上の確認調査結果に基づき、古墳及び丘陵で検出された遺跡について、企業立地対策課から岡山県知事名で文化財保護法第57条の５第１項による遺跡発見の通知がなされた。これに対し文化課では企業立地対策課と協議のうえ、昭和62年11月17日付けで、発掘調査が必要な旨を通知した。また、遺跡名を字名から「荒神風呂遺跡」及び「荒神風呂古墳」とした。

（２）第１次調査

第１次調査は、荒神風呂遺跡について、昭和63年２月８日から３月15日まで実施した。調査面積は約2,400㎡である（第５図）。

確認調査において柱穴群及び溝状遺構が検出された丘陵南西斜面から谷部にかけてを調査対象とし、重機により表土を除去した。丘陵上及び斜面部は表土除去面で第三紀層となり、柱穴群については建物にまとまらないものの列をなすことを確認したが、溝状の落ち込みと考えたものは個別の遺構であることが確認された。後者については期間内に調査を完了しえなかったが、竪穴住居の可能性が残された。今次の調査の主体は谷部に置き、弥生時代中期に始まる水源地とこれから続く溝状遺構を検出し、その後の埋没の状況を明らかにした。その結果、確認調査において出土した須恵器はこの溝状遺構が埋没する過程で堆積したものと判断された。

また、この調査期間中、確認調査の及んでいなかった丘陵南東端部において工事による表土掘削が実施され、これに立ち会ったが、表土中に遺物は含まれず、除去面においても遺構と考えらるものは認められなかった。



第５図　調査範囲図(1/3000)

（3）第2次調査

第2次調査は、荒神風呂遺跡及び荒神風呂古墳を対象として、昭和63年4月11日から7月29日まで実施した。調査面積は、荒神風呂遺跡約2,800㎡、荒神風呂古墳が約750㎡である。

荒神風呂遺跡の調査範囲（第5図）については、第1次調査において竪穴住居の可能性が残された丘陵上を東へ拡張するとともに、西側斜面及び谷部南側へも拡張した。西側斜面においては、新たにトレンチを設定し（第3図）、柱穴群を検出したため、これを拡張して調査した。谷部においては第1次調査において検出された溝状遺構を確認した。丘陵上では、第1次調査で未掘に終わった遺構が弥生時代の竪穴住居であることを確認し、新たに2軒を検出した。また、柱穴群についても北へ続く状況を確認した。

荒神風呂古墳については、人力によって全面調査を実施し（第5図）、径12～13m、高さ約1.2mの円墳であることを確認した。主体部は3基あり、墳丘外にも4基の埋葬施設と集石遺構が検出された。時期については、古墳からの遺物出土はなかったが、集石遺構から出土した須恵器・土師器から、4世紀中頃～5世紀後半と考えられた。

また、墳丘外の埋葬が確認されたことから、古墳の立地する地点から北へ延びる尾根上での墳丘を伴わない埋葬の有無を確認するため2本のトレンチを設定し、総延長約100mにわたって人力で掘り下げた（第3図）。その結果、2点の須恵器（第4図11・12）は出土したが、遺構は検出されなかった。

（4）調査体制

確認調査

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　　橋本泰夫

総　務　課

課　　長　　佐々木清

総　務　主　幹　　藤本信康

主　　任　　花本静夫（庶務担当）

調査第1課

課　　長　　河本　清

文化財保護主査（第1係長）　　井上　弘

文化財保護主事　　光永真一（調査担当）

発掘調査作業員

井手　定、山本光一

池田政江、井手節子、木下艶子、杉　静子、硯　栄、前田千代野、矢吹雪子、山田すみ

第１次調査

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　　橋本泰夫

総　務　課

課　　長　　佐々木清

総　務　主　幹　　藤本信康

主　　任　　花本静夫（庶務担当）

調査第１課

課　　長　　河本　清

文化財保護主査（第１係長）　　井上　弘

文化財保護主事　　光永真一（調査担当）

発掘調査作業員

井手　定、谷岡孝久、矢吹五郎助、山本光一

池田政江、井手節子、国年千代子、杉　静子、硯　きく代、硯　栄、藤田恭子、

矢吹雪子、山田すみ

第２次調査

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　　水田　稔

総　務　課

課　　長　　佐々木清

総　務　主　幹　　藤本信康

主　　任　　花本静夫（庶務担当）

調査第１課

課　　長　　河本　清

課　長　補　佐（第１係長）　　井上　弘

文化財保護主幹　　下澤公明

文化財保護主事　　平井泰男（調査担当）

発掘調査作業員

井手　定、矢吹五郎助、山本光一

池田政江、井手節子、杉　静子、硯　きく代、硯　栄、藤田恭子、矢吹雪子、山田すみ

第３節　調査の経過

（１）確認調査

調査対象＝荒神風呂遺跡（以下、この節内は遺跡と略す。）・荒神風呂古墳（以下、この節内は古墳と略す。）

昭和62年10月　５日・器材搬入。
・遺跡：重機によるトレンチ調査。
・古墳：トレンチ表土除去。
６・７日・古墳：トレンチ掘り下げ、写真撮影、実測。
８日・遺跡：重機によるトレンチを拡張し、溝状部分を掘り下げ。
９日・器材撤収。

（２）第１次調査

調査対象＝遺跡

昭和63年２月　８日・器材搬入。調査準備。
９～12日・重機による表土除去作業。
・表土除去面清掃作業。
15～19日・谷部、溝状遺構掘り下げ。
22日・　〃　。
24～26日・　〃　。
・谷部、土壙２掘り下げ、写真撮影、実測。
・丘陵部、遺構検出作業、柱穴群１掘り下げ。
３月２～４日・丘陵部、柱穴群１・土壙１・竪穴住居１掘り下げ、写真撮影。
・谷部、柱穴・溝状遺構掘り下げ、写真撮影。
７～11日・谷部、溝状遺構内水利施設掘り下げ、写真撮影、実測。
・測量基準杭打設。
・丘陵部・谷部、平板測量。
８日・丘陵東端部、重機による表土掘削に立ち会い。
15日・土壙１・２補測。
・遺物及び器材の一部を撤収。

（３）第２次調査

調査対象＝遺跡・古墳

昭和63年４月11～13日・遺跡：重機による表土除去作業。

・遺跡：竪穴住居１掘り下げ。

14～25日・遺跡：重機による表土除去作業及び遺構検出作業。

・遺跡：竪穴住居２掘り下げ。

・遺跡・古墳：基準杭打設。

26～28日・遺跡：竪穴住居３掘り下げ。

・古墳：地形測量

・古墳北尾根上トレンチ掘り下げ。

５月２～25日・古墳：墳丘及び周辺表土除去作業。

・古墳：葺石検出作業。

・古墳：集石遺構・２号箱式石棺墓・石蓋土壙墓検出、掘り下げ、実測、写真撮影。

26～30日・古墳：全景写真撮影。墳丘測量。

・古墳：２号主体部・土壙墓検出、掘り下げ。

・古墳：葺石実測。

６月１～６日・古墳：１・３号主体部検出、一部実測。

７～10日・遺跡：重機による表土除去作業。

・遺跡：遺構検出作業。

・遺跡：竪穴住居２・土壙５掘り下げ、実測。

・古墳：葺石実測。

11～29日・古墳：　〃　　。

・古墳：１～３号主体部・土壙墓・１号箱式石棺墓・配石土壙墓検出、掘り下げ、実測、写真撮影。

・古墳：葺石除去作業。

・古墳：墳丘断面実測。

・古墳：墳丘下の遺壙検出、実測、写真撮影。

７月１日～７日・古墳：集石遺構の周溝検出、掘り下げ、実測、写真撮影。

・遺跡：西端部掘り下げ、遺構検出作業。

・遺跡：柱穴群３・竪穴住居４掘り下げ、実測、写真撮影。

８～28日・遺跡：竪穴住居１～３　　〃　　。

・遺跡：土壙３・４　　〃　　。

・遺跡：柱穴群２　　〃　　。

・遺跡：溝状遺構掘り下げ、実測、写真撮影。

・遺跡：西部トレンチ　　〃　　。

・遺跡：地形測量。

・落合町文化財保護委員会見学。

29日・器材撤収。

荒神風呂遺跡 竪穴住居２ 調査風景

荒神風呂古墳 葺石 検出風景

第２章　遺跡の位置と環境

荒神風呂遺跡および荒神風呂古墳は、岡山県真庭郡落合町西河内字荒神風呂に所在した。

真庭郡落合町は岡山県の中北部の旧美作国の南端に位置し、岡山県のほぼ中央部を南北に流れる旭川の中流域に開けた町である。

町の中心部は、旭川がゆるやかに蛇行しながら南流する地点にあたり、旭川中流域では最も広い沖積平野を形成している。

一方、町の周囲には標高400～600ｍの山々が連なり、それらの山々を刻むように中央に旭川、東に河内川、西に備中川が流れ、町の中央部で合流している。

遺跡は、町の中央部から北西に約2.5km離れた丘陵上に所在した。遺跡の所在した丘陵は第三紀丘陵で、標高200ｍ前後の低丘陵の一つである。また、遺跡東丘陵下には、備中川の支流である西河内川が南北に流れ、周囲には小規模な平野を形成している。

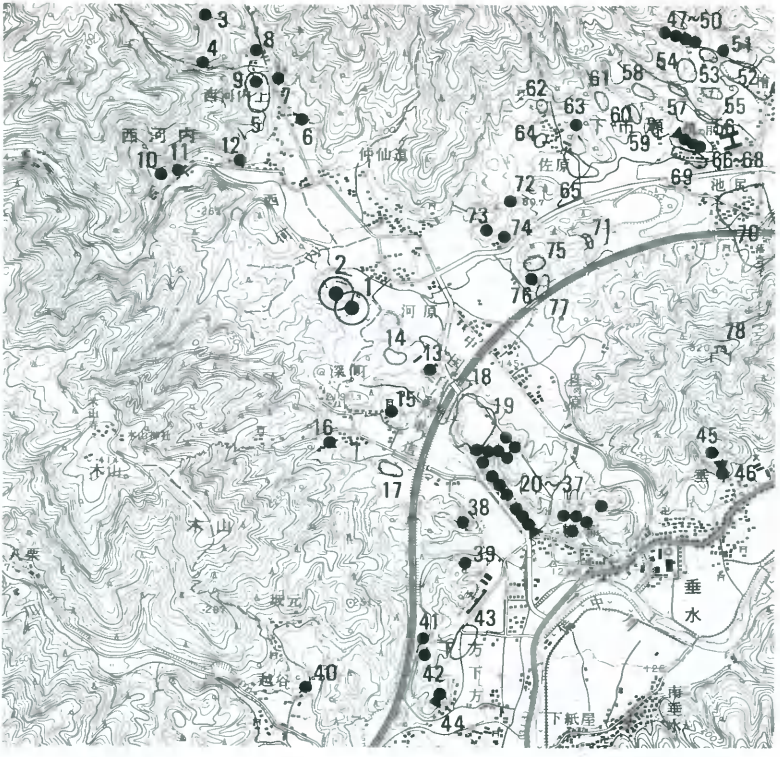
荒神風呂遺跡・荒神風呂古墳は弥生時代、古墳時代および奈良時代末から平安時代初めを中心とする遺跡である。当遺跡の近くでは縄文時代の遺跡は知られていない。落合町内で最も古い遺物は縄文時代早期の土器で、赤野遺跡（註１）や、西原遺跡（註２）などで出土している。また、縄文時代後・晩期の土器はこれらの他に須内遺跡（註３）や宮の前遺跡（註４）からも出土しており、宮の前遺跡では、県下でも調査例の少ない晩期の貯蔵穴が40基あまり発掘調査され注目されている。

弥生時代前期～中期前半の遺跡は少ない。これは県の中・北部の全般的な傾向である。そして弥生時代中期後半から後期になると遺跡数は急激に増加する。

当遺跡の周辺にもこの時期になるといくつかの遺跡が形成されてくる。南東に約500ｍ離れた丘陵上に所在した旦原遺跡では、弥生時代中期後半から後期の住居跡７軒や袋状土壙などが発掘調査されている（註５）。また旦原遺跡の南東の同一丘陵上に所在した中山遺跡でも、弥生時代中期後半の住居跡が５軒調査された（註６）。また東約２kmに所在する下市瀬遺跡では、弥生時代中期末から後期の住居跡や井戸などが調査されている（註７）。この他須内遺跡や宮の前遺跡、西原遺跡でもこの時期の集落跡が調査され、弥生時代中～後期における集落の実態が明らかになりつつある。また中山遺跡では、弥生時代終末の墳墓群も調査されている。

古墳時代の集落跡については赤野遺跡で方形の竪穴住居跡が調査されているが、これ以外に調査例は少なく実態は明らかでない。

一方、町内には数多くの古墳の存在が知られている。当遺跡の南東の中山遺跡の所在する中山丘陵上には、初期の前方後円墳と考えられる横部１号墳を含む横部古墳群が所在する。この



1．荒神風呂遺跡
2．荒神風呂古墳
3．スリ窯跡
4．橋谷窯跡
5．西河内上遺跡
6．摺鉢1号墳
7．摺鉢2号墳
8．摺鉢3号墳
9．摺鉢4号墳
10．三谷古墳群1号
11．三谷古墳群2号
12．三谷古墳群3号
13．古　墳
14．散布地
15．古　墳
16．深町古墳
17．深町散布地
18．旦原遺跡
19．中山遺跡
20-37
横部古墳群(18基)
38．古　墳
39．古墳群3号
40．越谷古墳
41．古墳群2号
42．古墳群1号
43．下方遺跡
44．井手伊倉古墳
45．古　墳
46．垂水古墳
47．塚の本古墳1号
48．塚の本古墳2号
49．塚の本古墳3号
50．塚の本古墳4号
51．風呂古墳
52．桧B地点
53．桧散布地
54．平林遺跡A地点
55．平林遺跡B地点
56．冬内地A地点
57．冬内地B地点
58．冬内地C地点
59．横の前遺跡
60．包含層
61．塚の松遺跡
62．佐原裏遺跡
63．古　墳
64．佐原宮前遺跡
65．佐原前遺跡
66-68．横の前古墳群(3基)
69．横の前遺跡
70．下市瀬遺跡
71．窯　址
72．佐原古墳
73．西河内古墳
74．停示帆古墳
75．旦の原東遺跡B地点
76．旦の原古墳
77．旦の原東遺跡A地点
78．注連山城跡

第６図　周辺遺跡分布図（1/25000）

他、旦原遺跡や中山遺跡でも古墳の存在が明らかとなっており、この丘陵には全体で30基をこえる古墳が存在している。これらの多くは、６世紀初めから後半の円墳で、調査された古墳では、木棺直葬が多かった。

ところで、町内全域を対象として考えてみると、前半期の首長墓と考えられる前方後円墳は、先述の横部１号墳の他に、川東車塚古墳、井手井倉古墳、垂水古墳、槙の前古墳、天王塚古塚などが知られている。これらのうち、川東車塚古墳を除く古墳は30ｍ前後の小型の前方後円墳であり、それぞれが小規模な平野単位に所在しているといえよう。一方、川東車塚古墳は全長61ｍで前方部が低く、撥形に開く古式の前方後円墳で、眺望の良い山頂に単独で築かれている。他の前方後円墳とは趣を異にしており注目されている。

後半期の古墳では、当遺跡から山を隔てて北約３㎞に所在する37基からなる日名古墳群が注目される。古墳群中には、横穴式石室をもつ小型の前方後円墳である神ノ毛１号墳と、むすび山古墳が含まれている。この古墳群の多くは６世紀中葉から７世紀前半に営まれている。

古代に目を転じると、先の日名古墳群の所在する当摩川の下流右岸には、真嶋郡衙の推定地とされている福田遺跡、高屋遺跡がある（註８）。

また、当遺跡でみられるような奈良時代末から平安時代初めの遺構・遺物は、周辺の遺跡でも知られており興味深い。旦原遺跡では、丘陵斜面から骨蔵器が、また下市瀬遺跡では多首壺や蓮弁付高杯、墨書土器、緑釉など特殊な遺物が多く出土しており注目される。

なお、当遺跡を含むこれらの遺跡出土の須恵器と同時期の窯跡が西河内の谷部に２基所在している（「ズリ窯跡」と「橋谷窯跡」）。近年その採集遺物が公表され、当遺跡の須恵器などはこの窯跡で生産された可能性が高いと考えられる（註９）。

（註１）「赤野遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(3)』　岡山県教育委員会　1974年
（註２）「西原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(6)』　岡山県教育委員会　1974年
（註３）「須内遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(10)』　岡山県教育委員会　1976年
（註４）「宮の前遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(12)』　岡山県教育委員会　1976年
（註５）「旦原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(14)』　岡山県教育委員会　1977年
（註６）『中山遺跡』　落合町教育委員会　1978年
（註７）「下市瀬遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(3)』　岡山県教育委員会　1974年
（註８）『福田Ａ遺跡、高屋Ｂ遺跡』　落合町教育委員会　1983年
（註９）「付載　ズリ窯跡」『西河内上遺跡』　落合町教育委員会　1986年

第３章　荒神風呂遺跡の調査

第１節　立地と調査区

立地

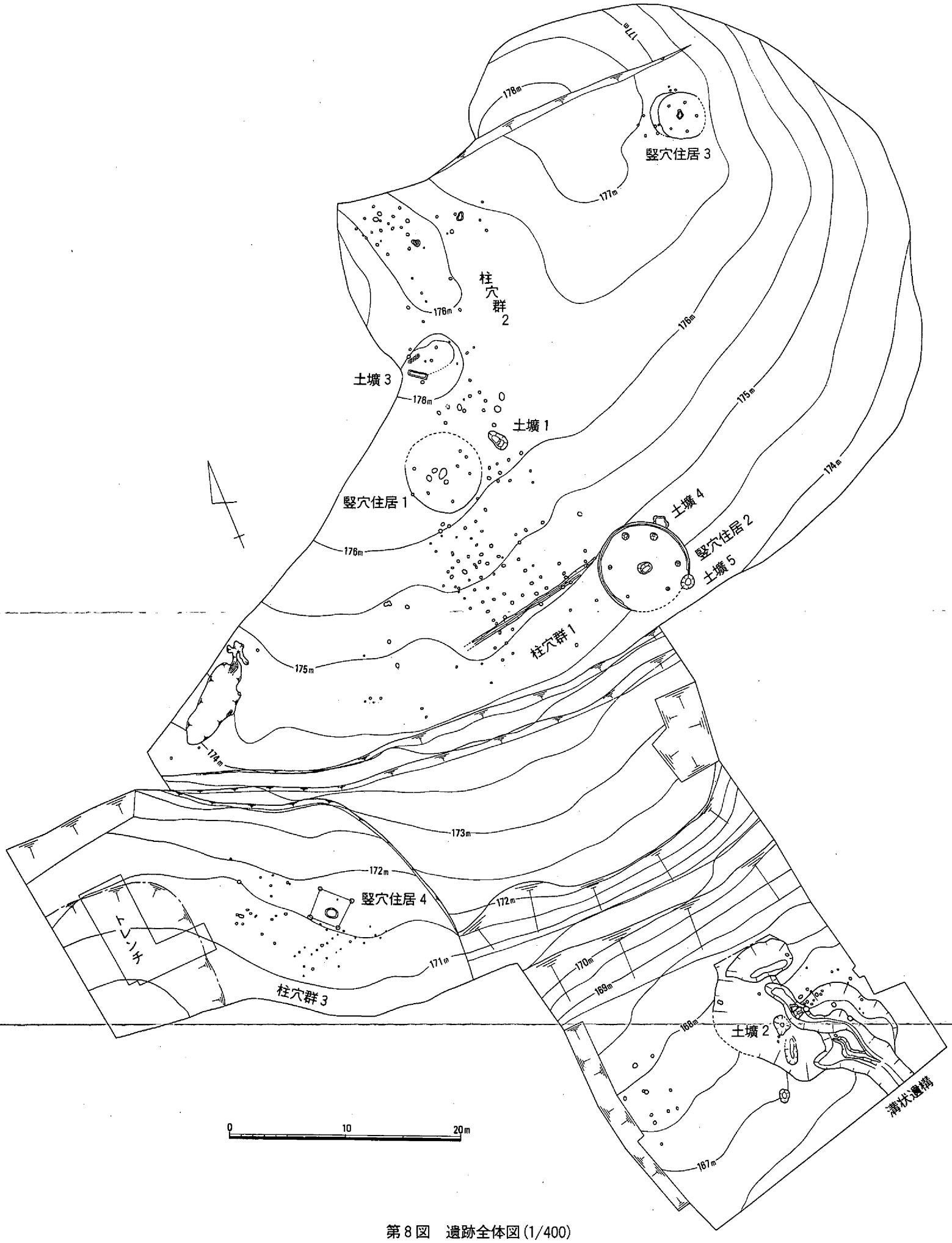
荒神風呂遺跡は岡山県の中北部に位置する落合町の中西部に所在する。遺跡は南東にのびる丘陵緩斜面上に位置し、眼下には現在、備中川の支流である西河内川が北西から南東に流れ、その周囲には水田が営まれている。平野部との比高差は約40ｍを測る。遺跡の立地する丘陵からは北・東・南方向の眺望が開け、第２章で述べた「旦原遺跡」や「中山遺跡」をはっきりと見通すことができる。

調査区

全面調査にあたっては、第１章で述べた確認調査の結果に基づき、第９図の範囲を調査区として設定して実施した。調査前の状況は北東部の最も高い部分が森林で、そこから南、および西にかけては畑地が階段状につくられており、旧地形はかなり改変されていた。

（１）荒神風呂遺跡　（２）荒神風呂古墳

第７図　遺跡周辺地形図（1/9000）



第 8 図　遺跡全体図 (1/400)

折り込み 1

第２節　遺構・遺物

Ⅰ　住　居　跡

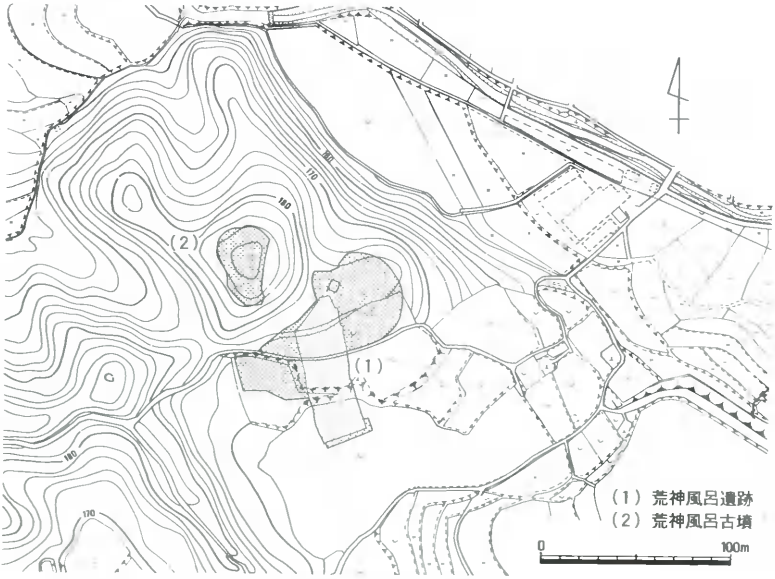
竪穴住居１

調査区の中北部の標高約176m付近において検出された竪穴住居である。全体的に削平が著しく、検出面からの深さは約25cmが残存していたにすぎない。

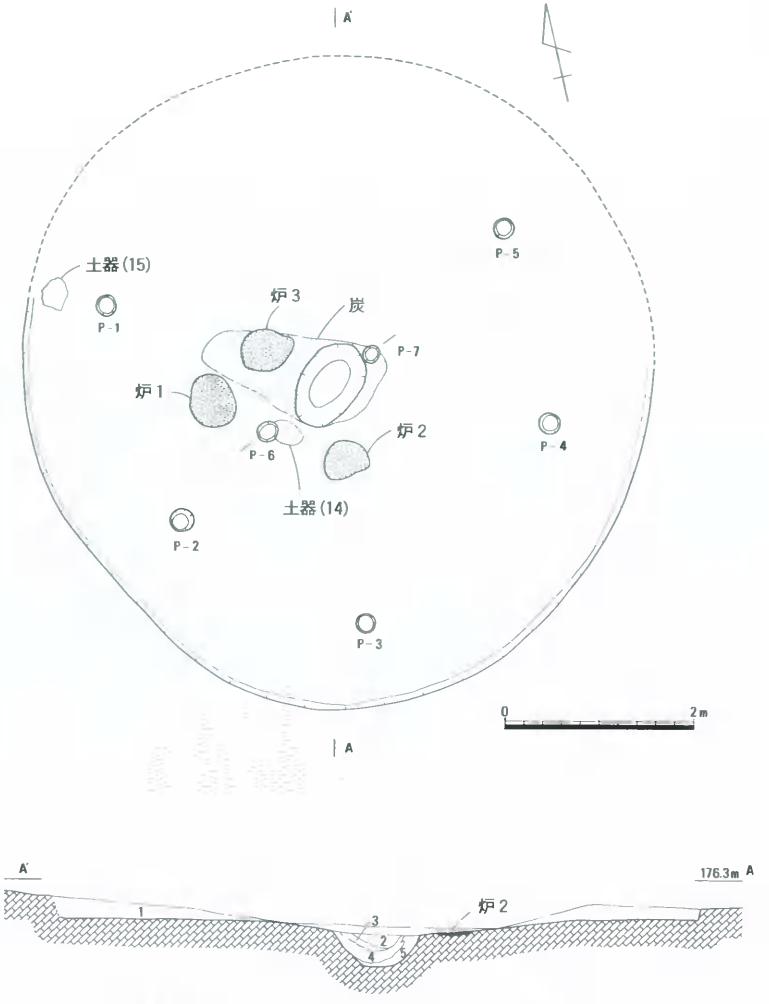
平面形は土層の違いが微妙で検出が困難であったが、第10図に示したように690×660cmのややいびつな円形を呈するものと考えられる。ただし、北側約３分の１については推定ラインで、土層からは明確にすることはできなかった。壁体溝は検出できなかった。

柱穴は５本（Ｐ－１～５）が確認できたが、第10図に示したように、Ｐ－１とＰ－５の間にもう１本柱穴が存在し、本来６本柱で建てられていたと考えるべきであろう。しかしながら、精査したものの柱穴を検出することはできなかった。またＰ－６と７については支柱穴の可能性も考えられるが、はっきりしない。

なお、各柱穴については、その深さに対して径が小さく、今回掘り下げた部分が柱根跡で、より大きな掘り方が存在する可能性もあるが明確にすることはできなかった。

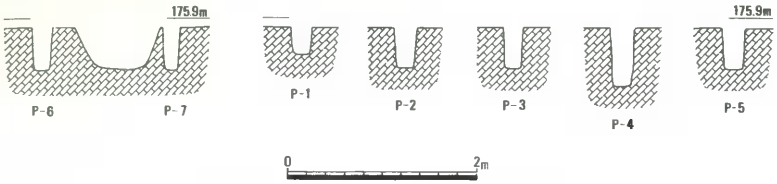


第９図　発掘調査範囲図(1/3000)

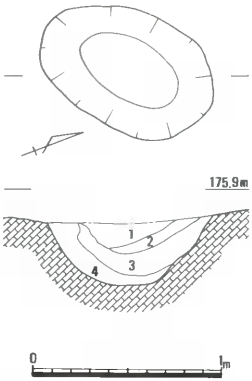


1．黄褐灰色土
2．淡褐灰色土(炭粒・焼土粒含)
3．淡灰黄色土
4．炭・灰
5．灰黄色土(炭・灰少量含)

第10図　竪穴住居１　平・断面図(1/60)

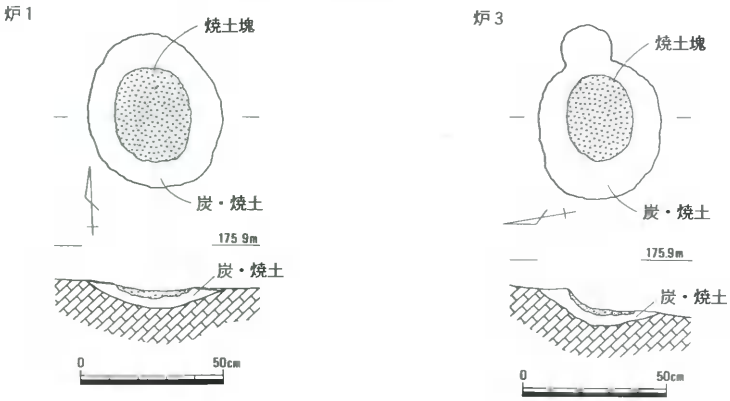


第11図　竪穴住居１　柱穴　断面図(1/60)

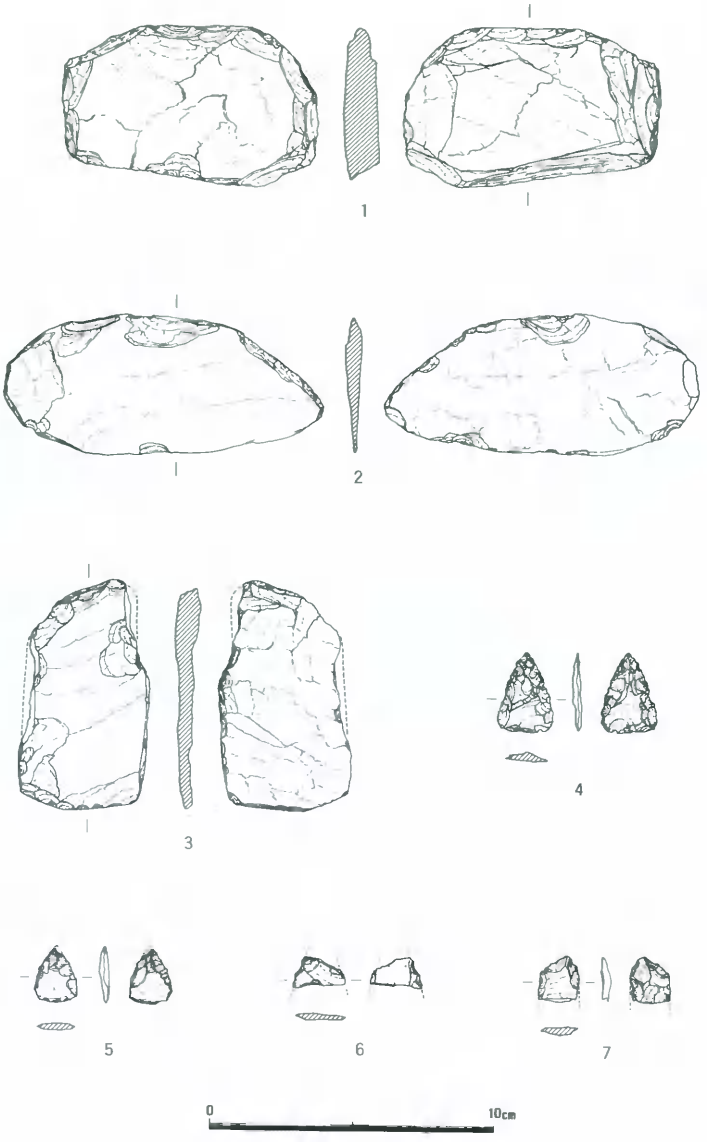


１．淡褐灰色土
　（炭粒・焼土粒含む）
２．淡灰黄色土
３．炭・灰
４．灰黄色土
　（炭・灰少量含む）

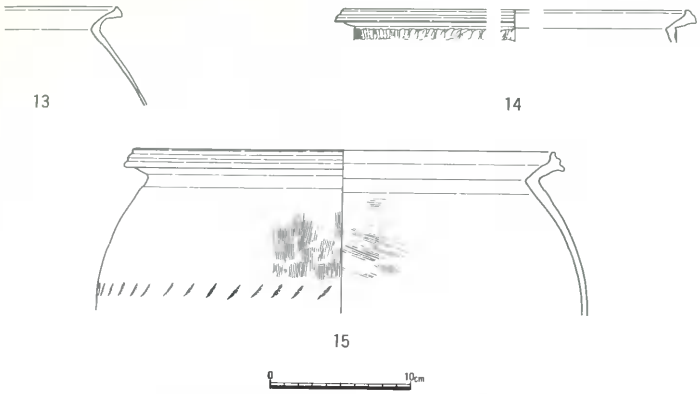
第12図　竪穴住居１　中央穴　平・断面図(1/30)



第13図　竪穴住居１　炉１・３　平・断面図(1/20)



第14図　竪穴住居１　出土石器(1/2)



第15図　竪穴住居１　出土土器(1/4)

中央穴は、平面形が95×64cmの長楕円形を呈し、深さは床面から34cmを測る。断面形は椀状を呈する。埋土は４層認められ、炭層が存在するが、壁が焼けた痕跡は認められなかった。また、中央穴の周辺には炭が第10図に示した範囲に散布していた。

この住居跡の床面には炉と考えられる３か所の焼土面が中央穴の囲りに確認された。これらは、いずれも橙色の強い火を受けたと考えられる焼土面と、その周囲に炭の散布が認められた。焼土面は楕円形を呈し、炉１が27×36cm、炉２が20×30cm、炉３が23×30cmを測る。

この住居跡内からは、土器、石器などが少量出土した。図示した土器のうち14・15は床面から、13はＰ－２から出土した。また、図示した石器のうち１～３は緑色片岩、４～７はサヌカイトである。２は磨製石包丁の未製品と考えられ、また、住居跡内からは緑色片岩の剥片などが出土しており、住居内で緑色片岩製の石器製作が行なわれていた可能性が考えられる。

この住居跡の時期は、出土土器から弥生時代中期後半と考えられる。　（平井）

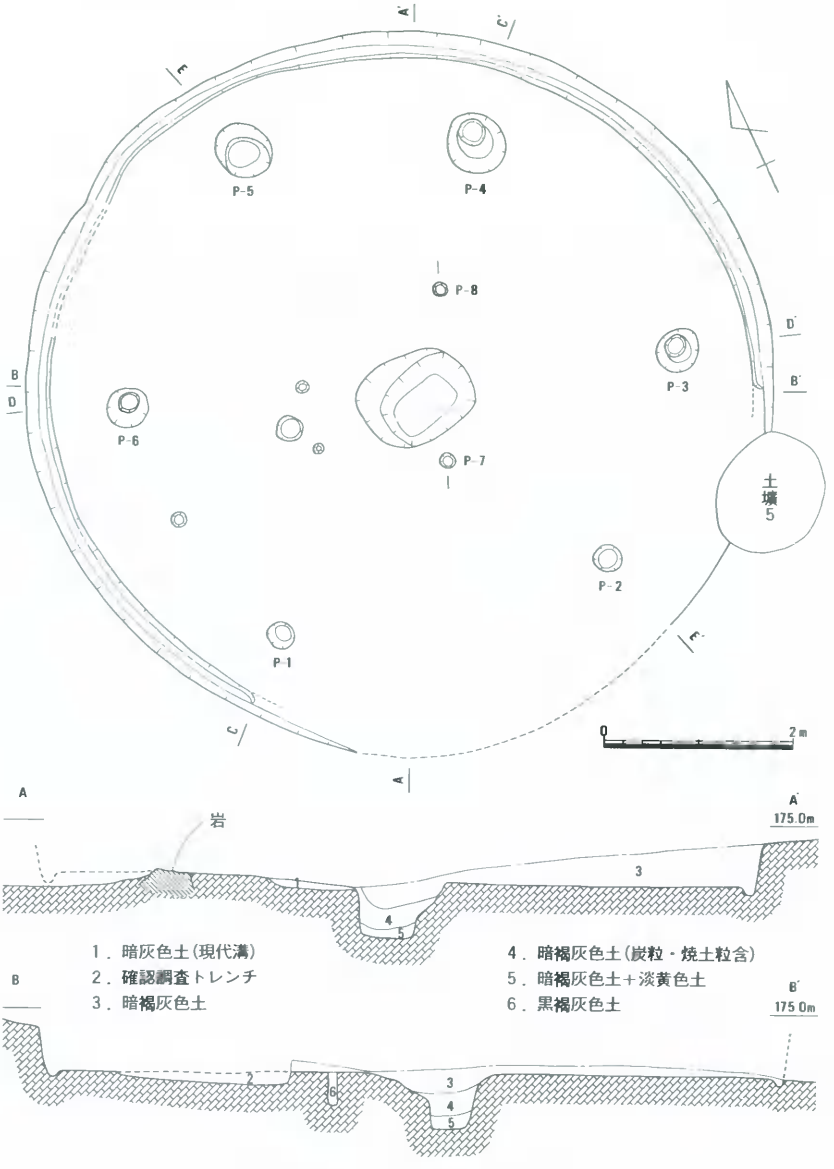
竪穴住居２

調査区のほぼ中央部、標高174～175ｍ付近で検出された竪穴住居である。地形は北から南へ傾斜している。

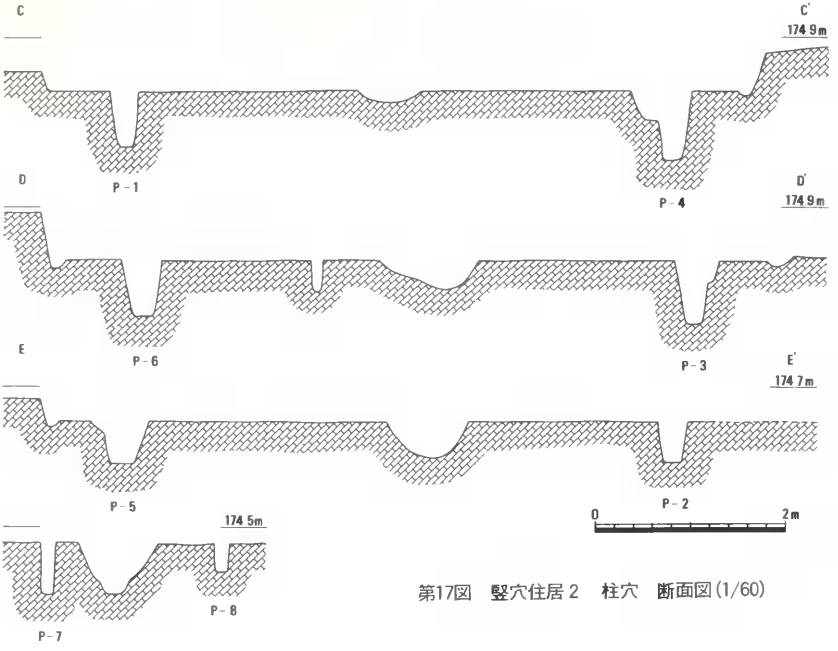
平面形は800×760cmのほぼ円形を呈すると考えられるが、南側の一部は後の削平によって検出することができなかった。また、東南部の一部は土壙５によって切られている。

深さは、最大が北側で約51cm残存していた。また、この竪穴住居には、壁に沿って幅15cm前後、床面からの深さ５cm前後の壁体溝が確認できた。ただし、南側は後の削平によって検出することができなかったが、本来は全周していたものと考えられる。

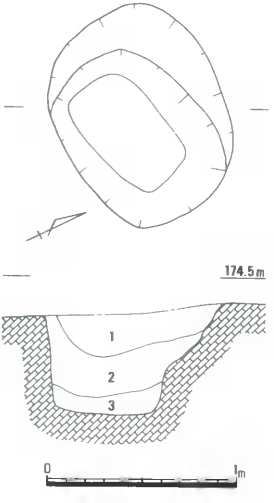
柱穴は６本（Ｐ－１～６）検出できた。中央穴を中心として放射状に壁に沿って設定されて



第16図　竪穴住居２　平・断面図(1/60)

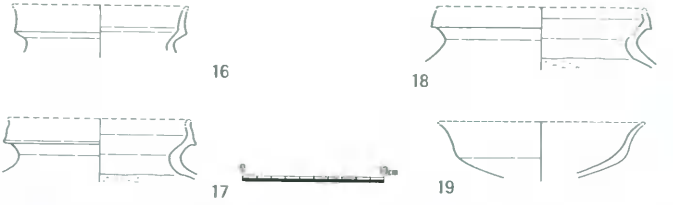


第17図　竪穴住居２　柱穴　断面図(1/60)

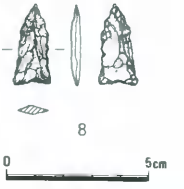


１．暗褐灰色土
　（住居跡埋土）
２．暗褐灰色土
　（炭粒・焼土粒含む）
３．暗褐灰色土・淡黄色土

第18図　竪穴住居２　中央穴　平・断面図(1/30)



第19図　竪穴住居２　出土土器(1/4)・石器(1/2)



いる。なおＰ－７と８については、支柱穴の可能性も考えられるが明確ではない。

中央穴は、平面形が約120×100cmの不整長方形を呈する。北西部では深さ約20cmの段が認められた。それより下層は100×80cmの長方形に掘られている。深さは床面から50cmを測り、断面形は逆台形になっている。埋土中には、炭・焼土粒を含む層が認められた。

この竪穴住居内からの出土遺物としては、土器・石器がある。

図示した土器（第19図）のうち、18は床面上から、16・17は壁体溝中から、19は中央穴埋土中から出土したものである。いずれも小片で、磨滅が著しい。石鏃（８）は、埋土中から出土したものである。

これらの出土遺物から竪穴住居の時期は、弥生時代後期後半と考えたい。　（平井）

竪穴住居３

調査区の北東端部の標高176.5m付近において検出された竪穴住居である。所在地の地形は東にむかって少し傾斜している。

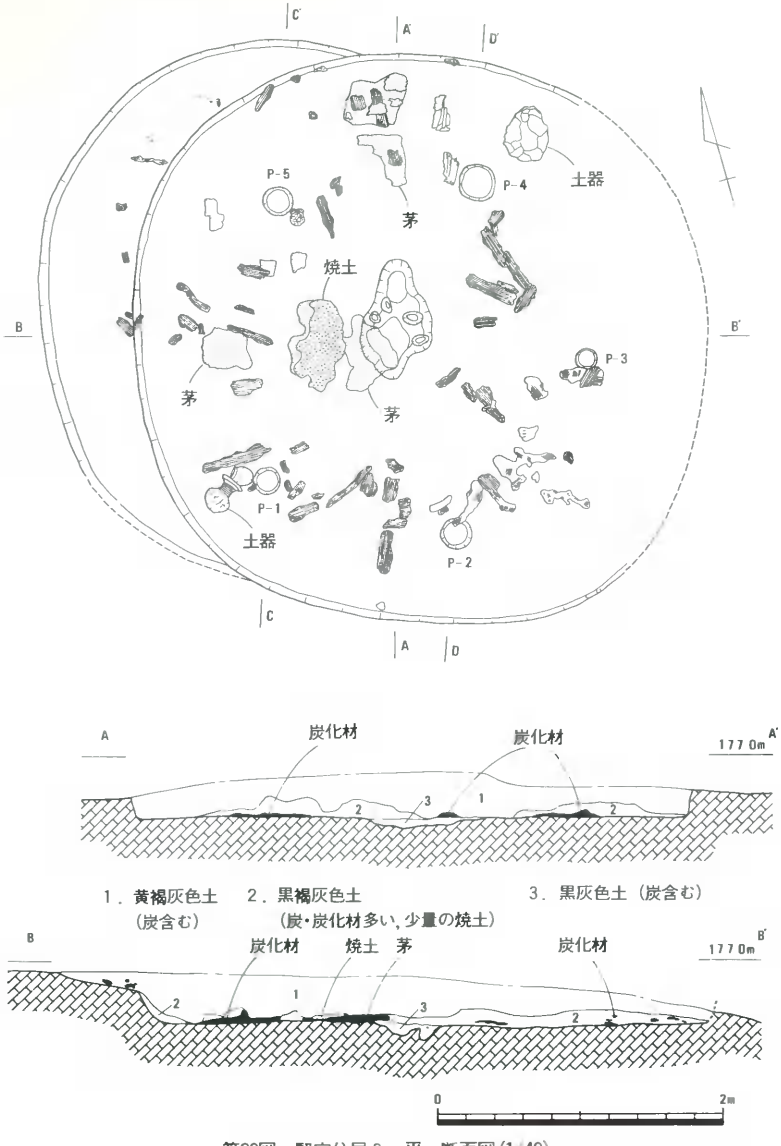
平面形は、南東部分が削平されており検出できなかったが、約400×380cmのほぼ円形を呈する部分とその西側に一段高い三ケ月状の遺構が認められた。

この三ケ月状の遺構については、竪穴住居３に切られた竪穴住居か、竪穴住居３に伴う「段状施設」の可能性が考えられる。このどちらか明確でないが、ここでは第20図に示したように、炭化材がこの両遺構に共通して検出されることから後者の可能性を考えておきたい。

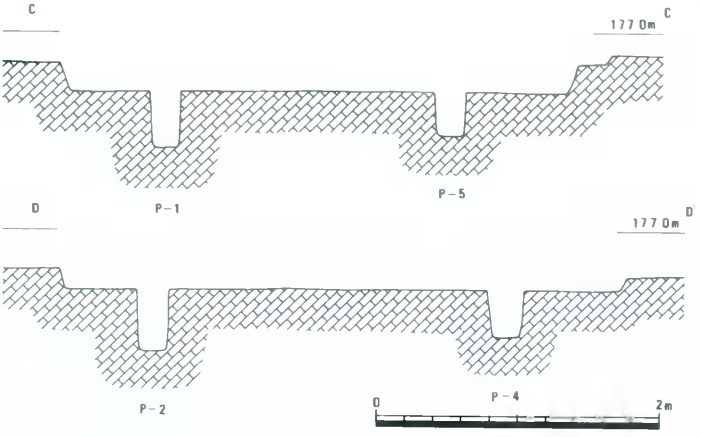
柱穴は５本が確認できた。中央穴を中心に、壁に沿って設定されている。

中央穴は、約90×50cmの不定形で、深さは最大で６cmを測るにすぎない。断面は皿状を呈し、埋土中には少量の炭が認められた。

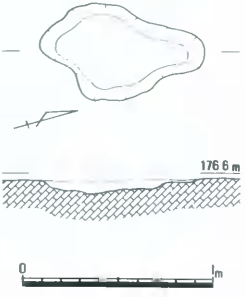
この竪穴住居は火災を被っており、建築材の一部が炭化した状態で残存していた。これらの炭化材のうち垂木と考えられる炭化材は少ないが、中央から放射状に残存していた。また、茅



第20図　竪穴住居３　平・断面図（1/40）



第21図　竪穴住居３　柱穴　断面図(1/40)



第22図　竪穴住居３　中央穴
平・断面図(1/30)

ではないかと考えられる炭化物が第20図のように残存していた。さらに一か所ではあるが中央穴の西で焼土が茅の上に認められた。

この竪穴住居には床面上に３点の土器が残存していた（第20図）。このうち、第23図20・22の土器は割れてはいたものの、ほぼ完形の状態で検出することができた（図版９－２）。これら以外には、埋土中から少量の土器片が出土したのみである。

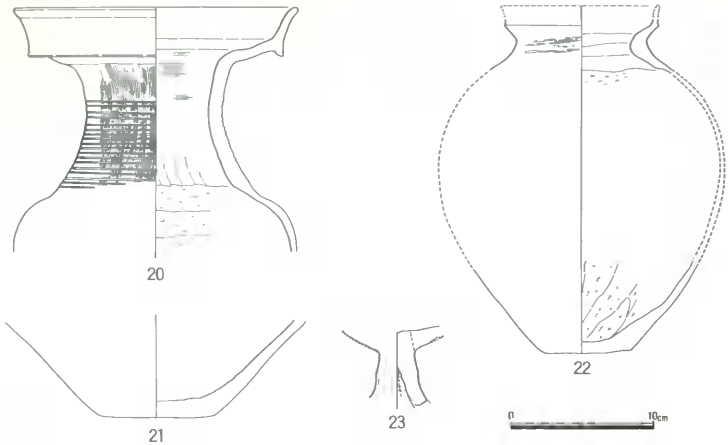
この竪穴住居の時期は、出土した土器から弥生時代後期後半と考えておきたい。　（平井）

竪穴住居４

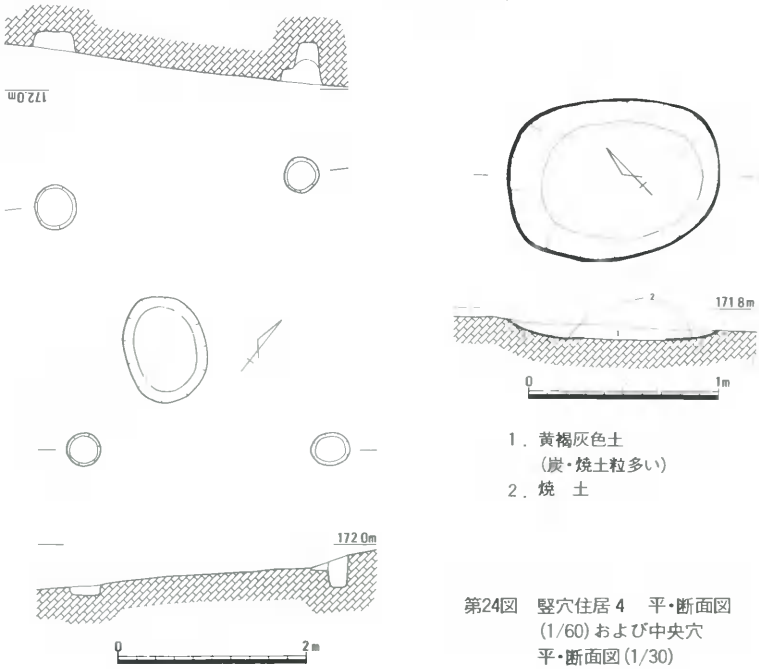
調査区の南西部、標高約172m付近で柱穴４本とその間に炭、焼土を伴う楕円形の土壙を検出した。これらの遺構の検出された地区は、畑地の開墾により削平が著しい場所で、これらの遺構は竪穴住居の上部が削平されたものと考えておきたい。

中央穴と考えられる土壙は、約112×82cmの楕円形を呈し、深さは８cmを測る。断面形は皿状で、埋土中には炭、焼土粒を多く含んでいた。

出土遺物は無く、時期については明らかではないが、弥生時代の住居跡である可能性が高いと考えられる。　（平井）



第23図　竪穴住居３　出土土器(1/4)



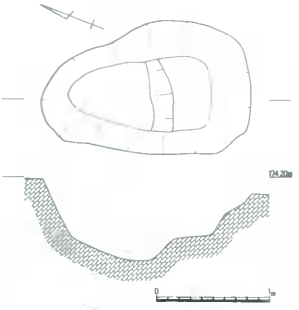
１．黄褐灰色土
　　(炭・焼土粒多い)
２．焼　土

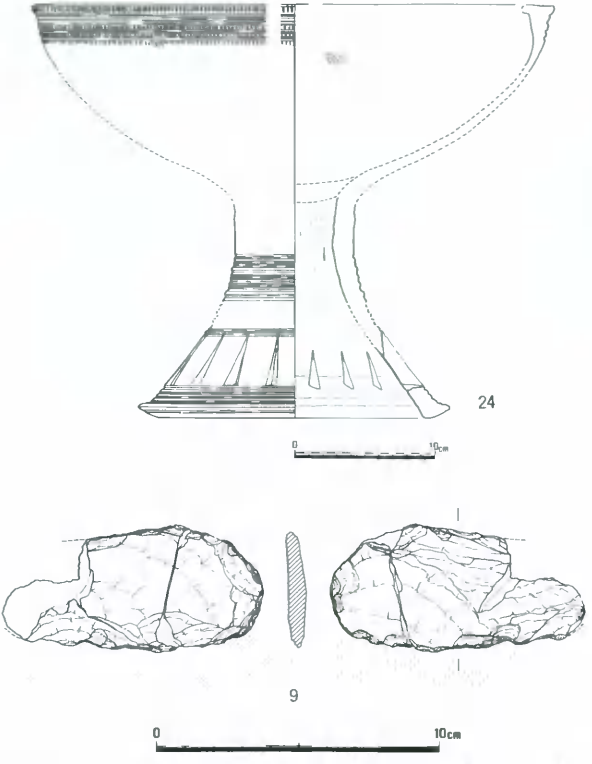
第24図　竪穴住居４　平・断面図
(1/60)および中央穴
平・断面図(1/30)

Ⅱ　土　　壙

土壙１

丘陵上で竪穴住居１の東約1.5ｍに所在する。平面形は不整楕円形を呈し、長径185cm、短径117cmを測る。底部は二段で、各々深さ65cmと40cmを測る。埋積土は茶褐色砂質土のほぼ単一層で、下段の底面から人頭大の石３個が出土している。





第25図　土壙１　平・断面図(1/50)および出土土器(1/4)・石器(1/2)

遺物は、高杯24他の弥生土器片と石包丁９が出土しており、時期は弥生時代中期後半に位置づけられる。（光永）

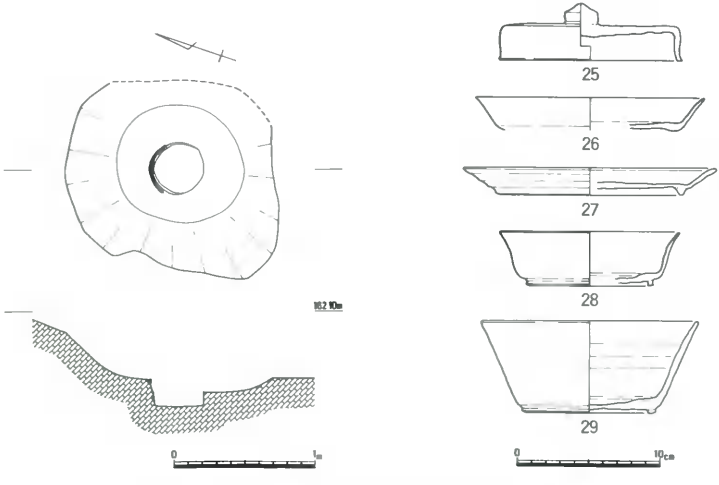
土壙２

谷部の溝状遺構に西接して検出された。溝状遺構埋積土上層（第31図１層）を除去した後に検出されたもので、掘り方は不整隅丸方形を呈し、１辺約140cmを測る。深さ約30cmで摺鉢状の底部は平面形円形を呈し、その中央部に径35cm、深さ18cmの規模で円形の掘り込みがなされ、その壁面に木製の曲げ物があてられている。曲げ物は掘り込み底面から高さ８cmまでは全周し、北側においてのみもう一段が遺存した。厚さは２mm前後である。埋積土は暗灰褐色粘土で、曲げ物の上層には１辺10～20cmの各礫が集中していたが、各礫による構築物としての形状は認められなかった。

これらの遺構の形状は、井戸と考えられるものであるが、後述する溝状遺構における湧水状況を考えると本遺構底部での湧水あるいは保水は考えにくく、また調査中の状況からも井戸としての機能には疑問が残るため、土壙と考えておく。

遺物は、須恵器蓋25、皿26・27、杯28、椀29の他に土師器片が出土しており、桃の種子も１点出土している（第26図）。

出土遺物及び溝状遺構埋積土との関係から、時期は奈良時代に求められ、廃絶は13世紀代と考えられる。（光永）



第26図　土壙２　平・断面図(1/40)および出土土器(1/4)

土壙３

調査区中北部、竪穴住居１の北方約５ｍの標高176ｍ付近で検出された土壙である。

平面形は約190×70㎝の長方形である。深さは最大で40㎝を測る。断面形は箱形で、底面はほぼ平らである。

埋土は黄褐灰色土が一層のみで、埋土中には炭・焼土粒を少量含んでいた。

こうした形状からこの土壙は土壙墓である可能性が考えられるが、木棺痕跡等は確認できず明確ではない。

時期についても、出土遺物が無く明らかにできない。（平井）

土壙４

調査区の中南部、標高175ｍ付近で検出された土壙で、竪穴住居２によって切られている。

平面形は方形状を呈するが、いびつである。深さは12～40㎝を測る。底面は平らではなく、何か所もの凹みが認められた。

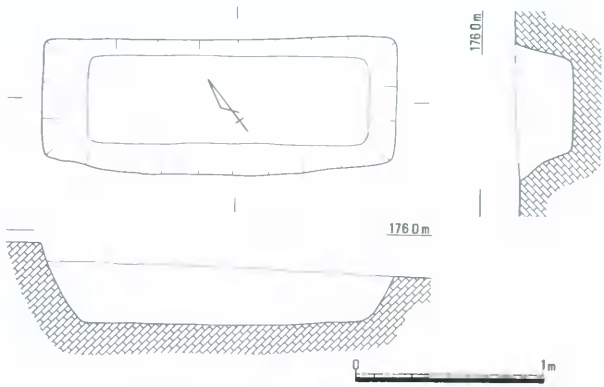
埋土中には焼土を多く含んでいた。

時期は、竪穴住居２に切られていることから弥生時代後期後半以前ではあるが、それ以上のことは明らかにできない。性格も不明である。（平井）

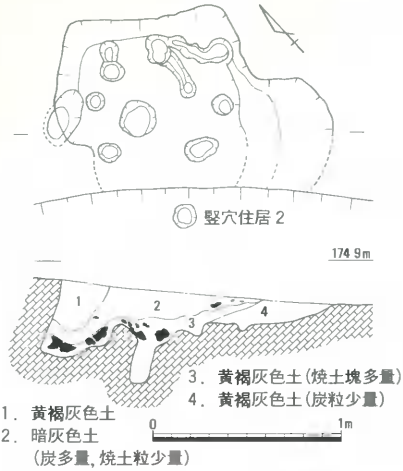
土壙５

調査区の中南部の標高174ｍ付近で検出された土壙である。竪穴住居２の一部を切ってつくられている。

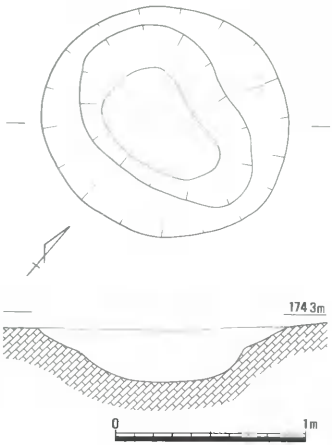
平面形は径130㎝前後の円形を呈する土壙で、深さは最大で約28㎝を測る。断面形は皿状を



第27図　土壙３　平・断面図(1/30)



第28図　土壙4　平・断面図(1/30)



第29図　土壙5　平・断面図(1/30)

呈するが、途中に段が認められた。

埋土は淡灰褐色土が1層のみで、埋土中には少量の炭粒が含まれていた。

埋土中からの出土遺物はなく、時期は明確ではないが、土層および検出時の状況からかなり新しい遺構なのではないかと考えておきたい。　(平井)

Ⅲ　そ　の　他

柱穴群1

丘陵上の北西部、尾根への傾斜変換点に近い地点で検出された。第30図に示した59本の他に19本が周辺に点在するが、ここでは図示した59本について群として扱う。群内の柱穴は建物にはまとまらないが、南北方向の列をなし、8列が設定できる。個別の柱穴についてみると、径は15～30cmで深さは20cmを超えるものは少なく、大半が5～10cm程度の浅いものである。また、列を構成する柱穴についてその深さをみても、地形にそって変化し、底面をそろえる意識は認められない。　(光永)

柱穴群2

調査区の北東部、標高176m付近で検出された柱穴群である。柱穴の数は約50である。規模は径30cm前後の円形のものが多く、深さは10～30cmを測るものが多い。建物としてまとまるものはなかった。

この地点は凹み状の地形を呈しており、この凹みの堆積層中からは少量の土器、石器が出土

した。なお、柱穴の多くは、包含層を除去したのち地山面で検出した。

出土土器は弥生時代中期から後期のものであった。また、第46図14・15の石器はこの包含層中から出土したものである。

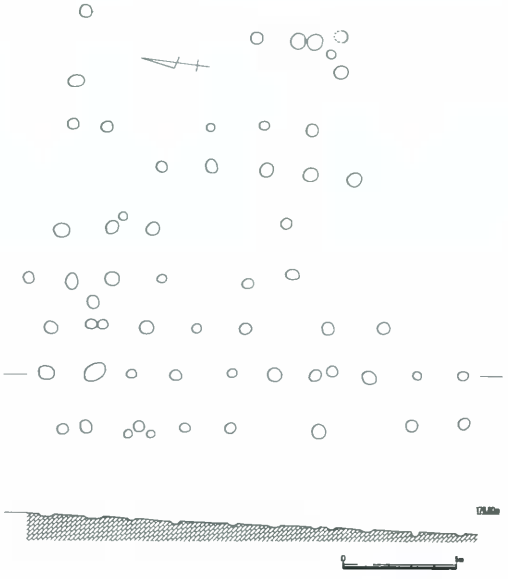
柱穴の時期については、包含層中から出土した土器、石器の時期のものがあると考えられるが、全ての柱穴がその時期とは考えられない。後に述べる溝状遺構からは奈良時代～平安時代初めや中世の遺物も出土しており、その時期の柱穴も存在している可能性もある。　（平井）

柱穴群3

調査区の南西部、標高171～172mで検出された柱穴群である。竪穴住居4の周辺部に位置し、検出総数は約50である。規模は径15～30cmが多く、円形で深さは20cm前後のものが多い。全体的にも小型のものが多い。建物としてまとまるものはなかった。

柱穴の時期については明らかにすることはできなかった。竪穴住居との関連および、この柱穴群の西には後で述べる包含層が確認され、奈良時代末～平安時代初め頃の土器が多く出土したが、これらとの関連も不明である。

以上の柱穴群1・2・3以外にも竪穴住居3の周辺や、溝状遺構の西側に数個の柱穴が検



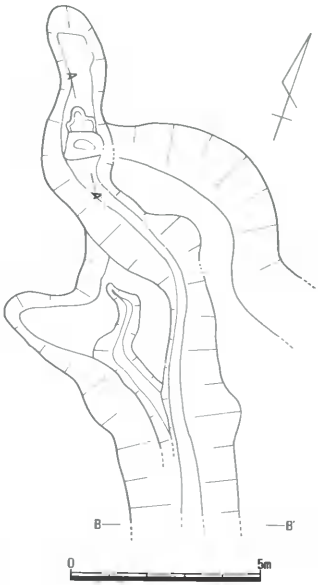
第30図　柱穴群1　平・断面図(1/250)

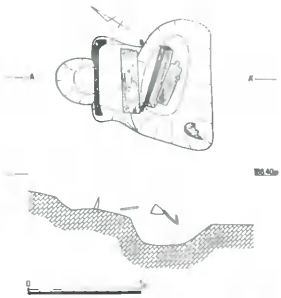
出されたが、時期等は不明である。　（平井）

溝状遺構

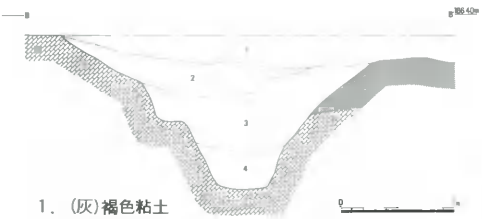
丘陵南斜面から傾斜変換して谷部にうつる地点において、これを起点として断面Ｖ字形の溝状遺構が南東方面にのびている（第８・31図）。調査範囲内においては延べ15ｍにわたって検出され、さらに南東方向に続いている。

検出された範囲での状況をみると（第31図）、幅125cm、長さ300cmの大きさで深さ30～60cmに掘り込まれた部分を起点とし、これに続いて70×40×15cmと110×70×20cmを測る二段の掘り込みがなされている。下段北側壁沿いに53cm間隔で径４cmの２本の竪杭が打たれ、上段北側壁に１枚、上段南肩口から下段にかけて３枚の板材が出土した（第32図）。この地点から左岸側が約２ｍ広がり、途中に幅約50cmの平坦面が設けられている。右岸側肩口は西方へ約３ｍ抉り込むが、これは自然作用によるものの可能性が高い。これらの構造について考えると、起点から二段の掘り込みについては、起点における湧水を二段の掘り込み内に板材を用いて桝状の構造物を造り、保水した水利施設と考えられる。



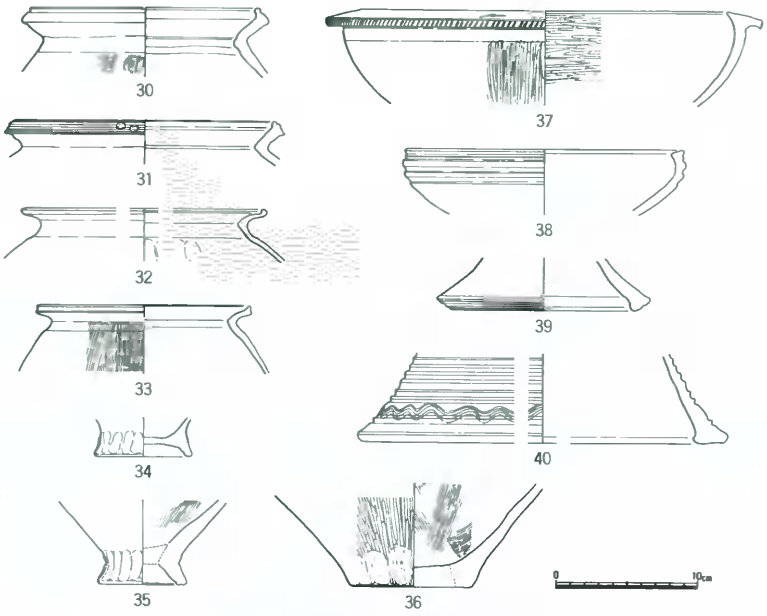


第32図　溝状遺構内水利施設（1/50）

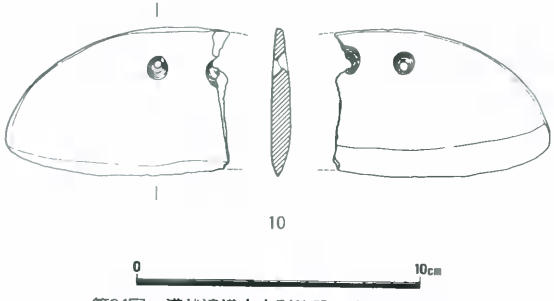


1．（灰）褐色粘土
2．淡黄褐灰色砂質土
3．暗褐色砂質土
4．褐青灰色粘質土

第31図　溝状遺構　平面図（1/150）・断面図（1/50）

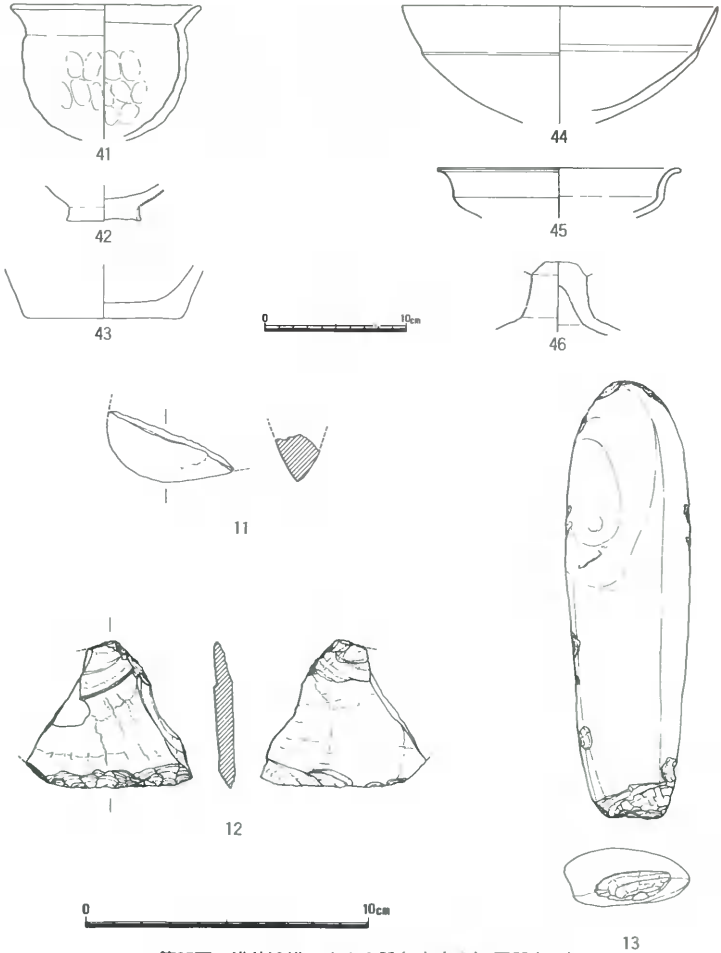


第33図　溝状遺構下層　出土土器(1/4)

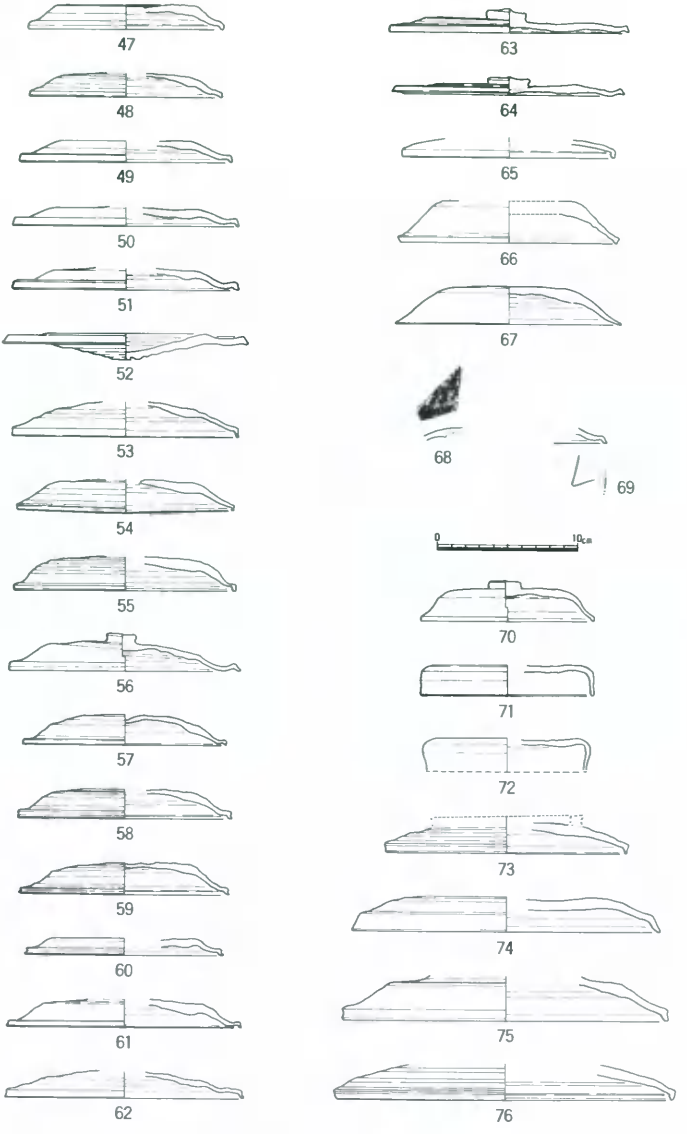


第34図　溝状遺構内水利施設　出土石器(1/2)

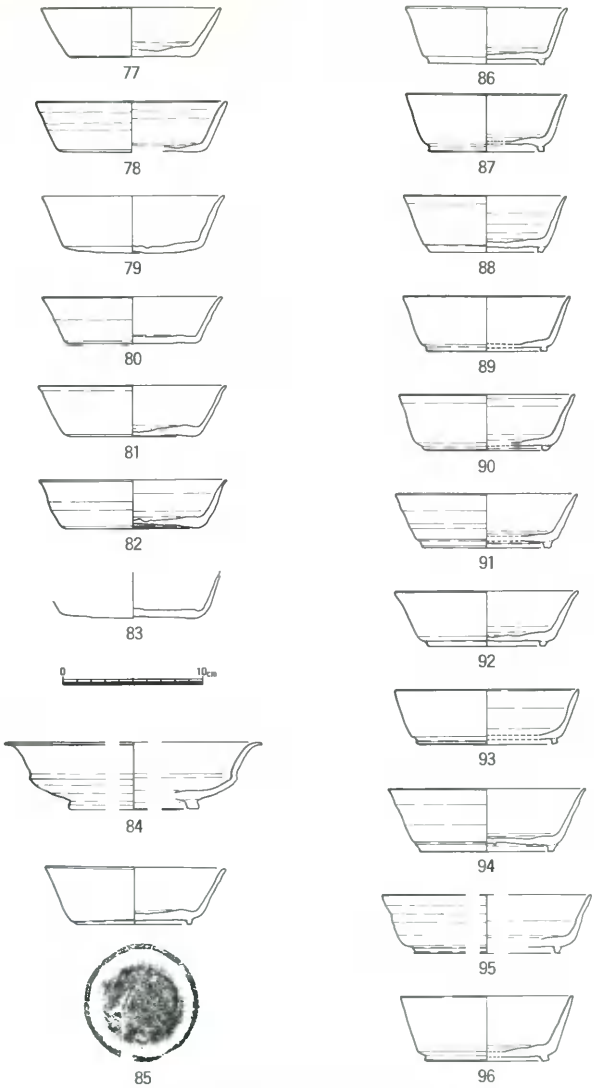
出土遺物には、弥生土器（第33図・第35図41～46）、須恵器（第36～40図）、須恵質土器（第41図150）、土師器（内黒）（第41図149）、青磁（第41図147）、白磁（第41図148）、亀山焼（第41図144・145）、勝間田焼（第41図146）、土錘（第42図１）、石器（第34図・第35図11～13）、鉄器（第42図１～５）、鉄滓（図版47―２）、羽口（図版48―１）等が出土している。このうち、須



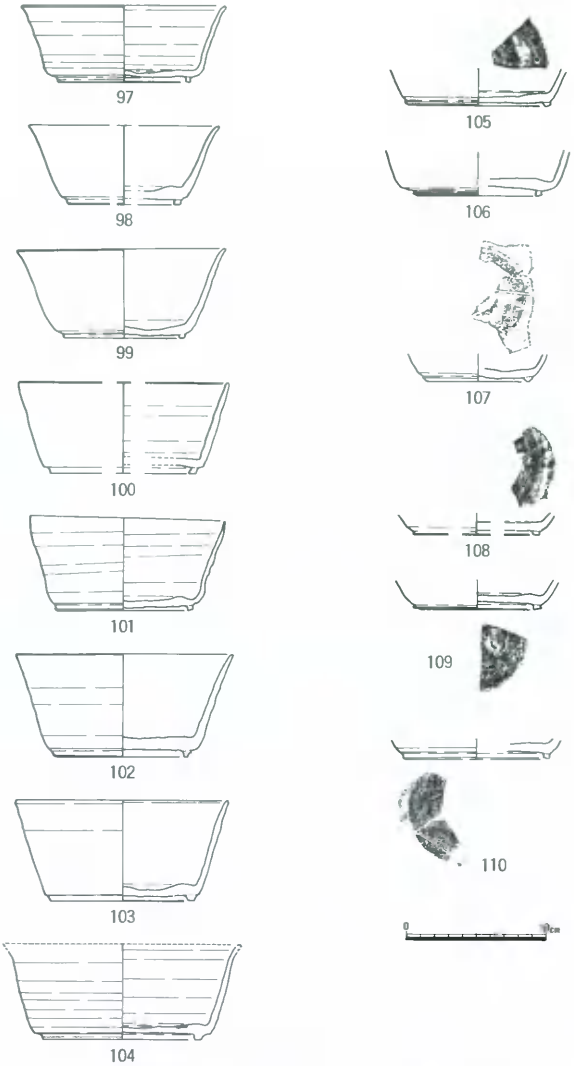
第35図　溝状遺構　出土土器（１）（1/4）・石器（1/2）



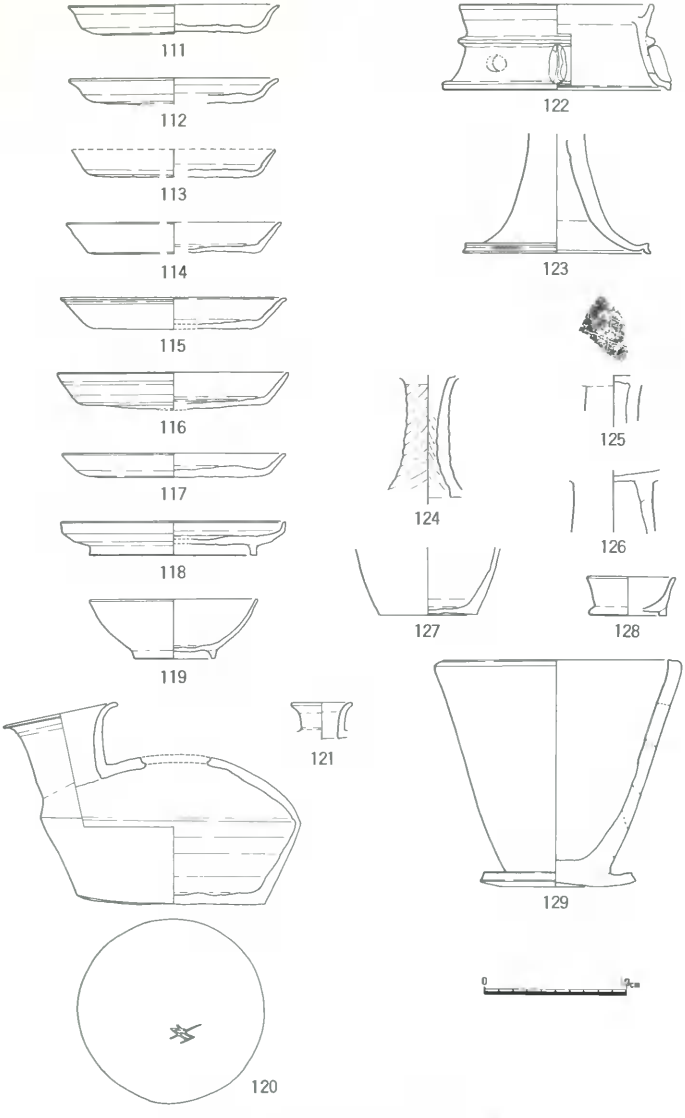
第36図　溝状遺構　出土土器（２）（1/4）



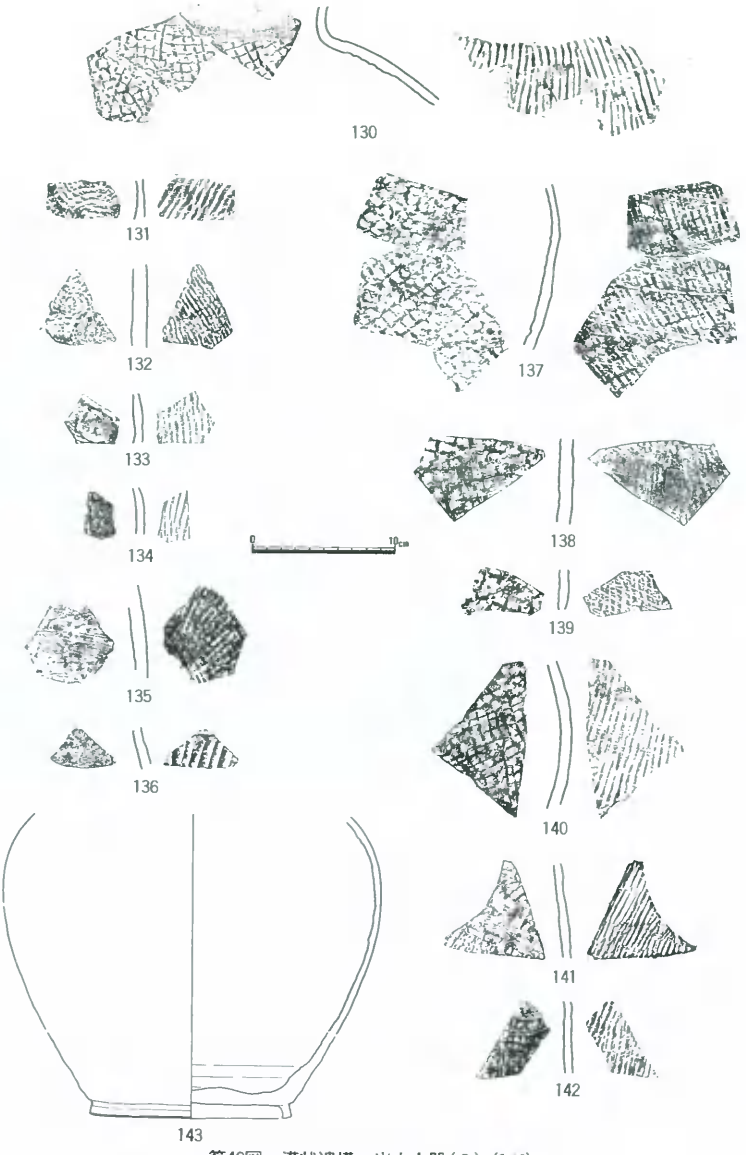
第37図　溝状遺構　出土土器（３）（1/4）



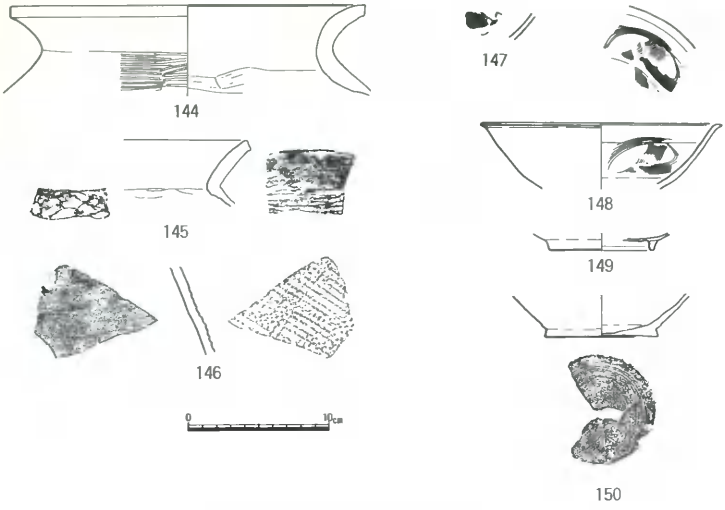
第38図　溝状遺構　出土土器（４）（1/4）



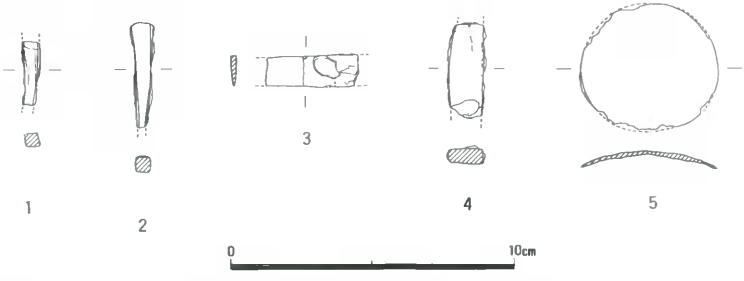
第39図　溝状遺構　出土土器（５）（1/4）



第40図　溝状遺構　出土土器（６）（1/4）



第41図　溝状遺構　出土土器（７）（1/4）



第42図　溝状遺構　出土鉄器（1/2）・土錘（1/2）

恵器では刻字・ヘラ記号をもつもの（68・69・85・107～110・120・125）、硯122、墨痕の残るもの等があり、甕においては内面の調整に格子目工具痕の残るもの（130・137～142）がみられる。器種としては稜椀84、土師器を模倣したと考えられる椀119もある。

これらの出土遺物のうち、30～36の弥生土器及び石包丁10は水利施設周辺の埋積土最下層から出土しており、この水利施設が弥生時代中期後半に設置されたことを示している。丘陵上において同時期の竪穴住居も

検出されており、これとの関連が考えられる。その後、弥生時代後期においても使用が続けられるが、須恵器・土師器に示される奈良時代末から平安時代初めにかけて埋没し、鎌倉時代後半にはほぼ埋没を完了したものと考えられる。（光永）

調査区西端部包含層

調査区の西端部の標高170.5mから171.5m付近で確認された包含層である。

この地区は、北東から南西にむかって地形が傾斜しており、調査区西端では大きな谷部に至るものと考えられる。包含層はこうした傾斜面に形成されたものである。

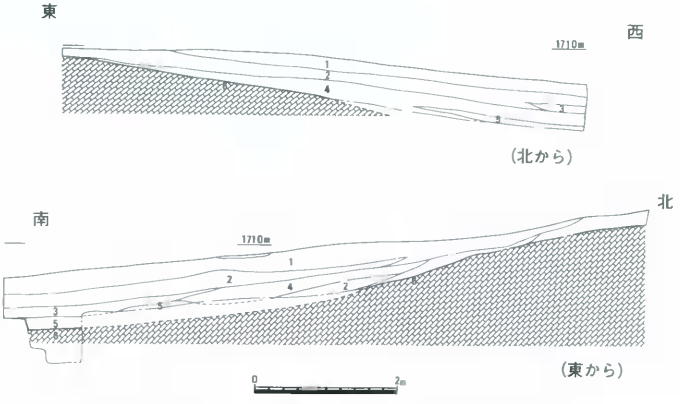
この包含層の西端部に設定したトレンチの観察によれば堆積層は大きく４層あり、全て粘土層である。遺物は各層から出土したが、上層からの出土が多かった（第８・43図）。

出土遺物はコンテナ約３箱分あり、殆んどが須恵器で、それ以外には少量の石器や土製品があった（第44～47図）。

図示した土器のうち151～181は包含層全体の掘り下げ中に、また182～187はトレンチ掘り下げ中に出土した土器である。

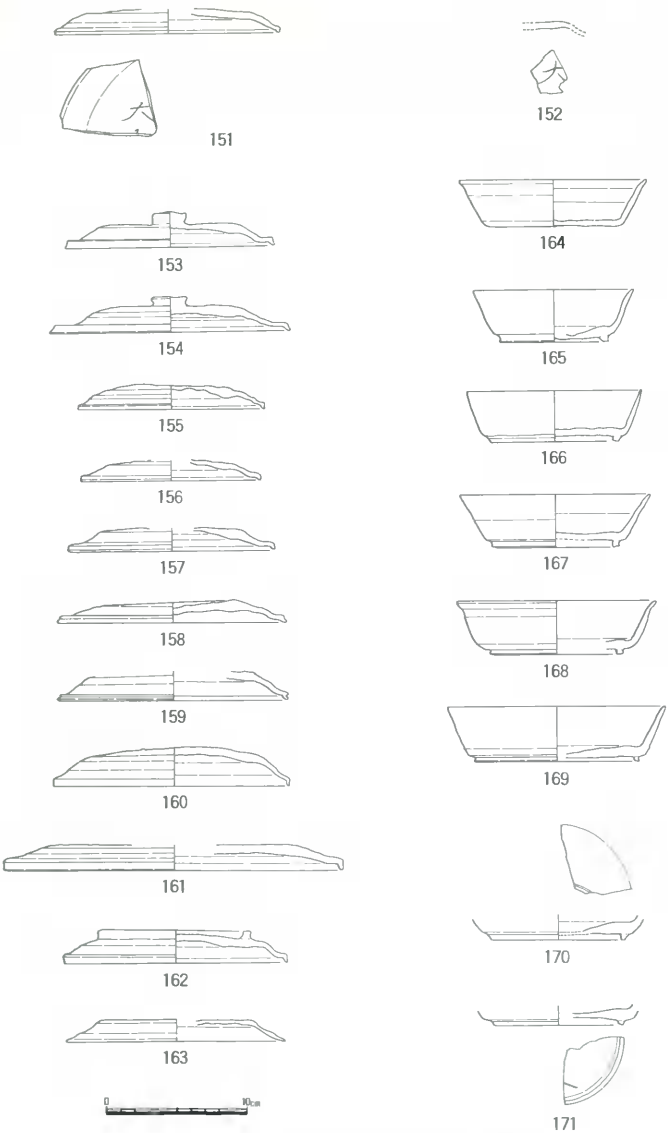
151は杯蓋である。つまみが付くかどうかは不明である。この須恵器には、天井部内面に細く鋭いヘラ描きの文字が２文字施されている。文字の１つは「大」と読め、もう１つは破損部分があり読めない。

152も杯蓋の破片である。やはり天井部内面に鋭いヘラ描きの文字が施されている。文字は１字のみ残在しており、「大」と読むことができる。

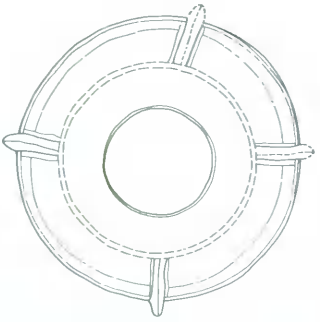


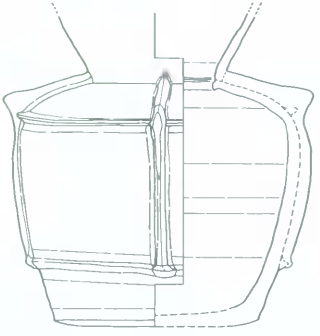
1．淡褐色粘土　3．暗灰褐色粘土　5．暗褐灰色粘土
2．暗褐色粘土　4．淡黄褐色粘土　6．黄色粘土(地山)

第43図　調査区西端部包含層　トレンチ断面図(1/80)

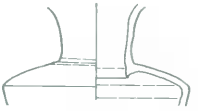


第44図　調査区西端部包含層　出土土器（１）（1/4）





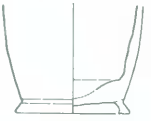
172



173

174

175



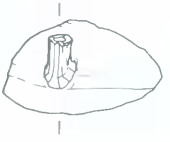
176

177

178

179

180



181

182

183

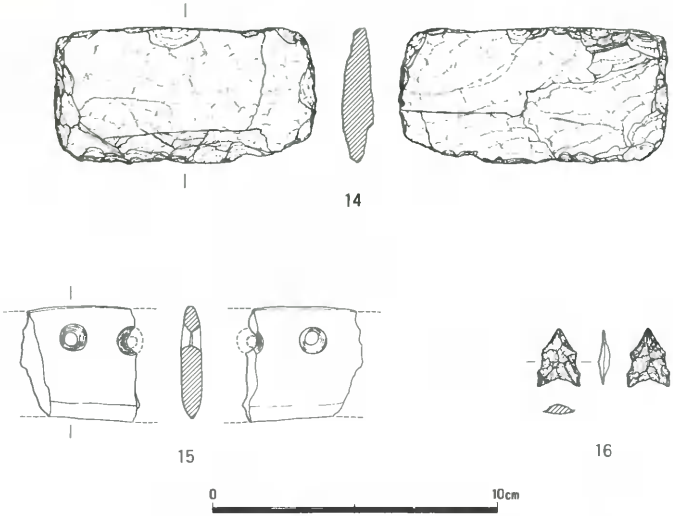
184

185

186

187

第45図　調査区西端部包含層　出土土器（２）（1/4）



第46図　柱穴群２(14･15)および調査区西端部包含層(16)　出土石器(1/2)

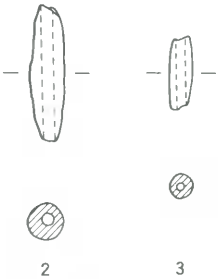
その他、171、174、175にもヘラ描きが確認できた。

172は凸帯を施した装飾的な壺と考えられるが、口縁部と底部の一部以外はほぼ復元することができた。

178は６世紀末から７世紀前半頃の高杯ではなかろうか。

180は鉄鉢の破片と考えておきたい。

181については、中空の注口を持つ土器のように図示しているが明確ではない。注口端部も破損しているように図示しているがはっきりしない。上下逆になって脚になる可能性も考えられる　（平井）



第47図　調査区西端部包含層出土土錘(1/2)

第１表　荒神風呂遺跡　出土土器観察表

番号	器種	調整の特徴	色調	備考
1	杯蓋	天井部外面ヘラ切り後ナデ。	灰白、10Ｙ７/１	
2	〃	〃　。	暗青灰、５Ｂ５/１	つまみ剝離痕。
3	〃	〃　。	灰、Ｎ５/０	
4	杯	底部外面ヘラ切り後ナデ、指頭押え。	灰、Ｎ８/０	
5	〃	底部外面ヘラ切り後ナデ。	青灰、10ＢＧ５/１	
6	〃	〃　。貼付高台。	灰、Ｎ６/０	
7	甕	内外面ともタタキは浅い。	暗青灰、５Ｂ４/１	
8	椀	底部外面ヘラ切り。	灰白、Ｎ８/１	
9	〃	底部外面ヘラ切り後ナデ。貼付高台。	青灰、５Ｂ６/１	
10	〃	底部外面ヘラ切り。	灰、Ｎ４/０	体部外面自然釉。
11	壺	内外面ナデ。	灰、Ｎ５/０	
12	杯	底部内面粘土紐痕。	灰、Ｎ６/０	
13	甕	口縁部ヨコナデ。	褐、7.5ＹＲ４/４	全体に磨滅。
14	〃	口縁端部にわずかに凹線。頸部に刻み目凸帯。	黄橙、7.5ＹＲ７/８	〃　。
15	〃	口縁端部に凹線。体部内外面ハケメ。	にぶい褐、7.5ＹＲ５/４	体部外面刺突文。
16	〃		橙、５ＹＲ６/６	磨滅が著しい。
17	〃	口頸部ヨコナデ。体部内面ヘラ削り。	暗赤褐、2.5ＹＲ２/２	
18	〃	〃　。	にぶい橙、５ＹＲ７/４	
19	高杯		橙、7.5ＹＲ７/６	全体に磨滅。
20	壺	頸部外面ハケメ後螺旋状沈線。体部内面ヘラ削り。	橙、2.5ＹＲ６/６	外面丹塗りか。
21	〃	内面ヘラ削りか。	橙、５ＹＲ６/８	全体に磨滅。
22	甕	頸部外面ヘラミガキ。体部内面ヘラ削り。	橙、５ＹＲ６/６	
23	高杯	穿孔４個。	赤褐、５ＹＲ４/６	
24	〃	杯部内面ハケ後ナデ。	浅黄橙、10ＹＲ８/３	
25	蓋	内外面ヨコナデ。	灰、Ｎ６/０	
26	皿	底部外面ヘラ切り後ナデ。	灰、Ｎ７/０	
27	〃	調整不詳。貼付高台。	灰、Ｎ８/０	
28	杯	底部外面ヘラ切り後ナデ。　〃　。	灰、Ｎ５/０	
29	椀	底部外面ヘラ切り。　〃　。	暗青灰、５Ｂ４/１	
30	甕	体部内面指頭押え。	灰黄、2.5Ｙ６/２	
31	〃	内外面ヨコナデ。	にぶい黄橙、10ＹＲ７/２	円形浮文2個以上。
32	〃	体部内面指頭押え。	にぶい橙、５ＹＲ７/４	
33	〃	体部内面指頭押え後ナデ。	にぶい橙、５ＹＲ６/４	
34		体部～台部外面指頭押え。	黒、５ＹＲ1.7/１	
35	甕	体部内面タテ方向ハケメ。	灰黄、2.5Ｙ７/２	
36	壺	底部外面ヘラミガキ。	灰白、10ＹＲ７/１	
37	高杯	板工具による刻み目。	にぶい黄橙、10ＹＲ７/２	
38	〃	内外面ナデ。	褐灰、7.5ＹＲ４/１	
39	〃	内外面ヨコナデ。	にぶい黄橙、10ＹＲ７/２	
40	器台	凸帯状凹線。	黒、５ＹＲ1.7/１	
41	甕	内外面指頭押え。	赤橙、10Ｒ６/６	
42		調整不詳。	灰白、10ＹＲ８/１	
43		体部外面ヘラミガキか。	灰黄橙、10ＹＲ６/２	
44	高杯	調整不詳。	浅黄橙、7.5ＹＲ８/４	
45	〃	内外面ヨコナデ。	灰、Ｎ６/１	
46	〃	調整不詳。	赤、10Ｒ５/６	
47	杯蓋	天井部外面ヘラ切り後ナデ。	暗青灰、５Ｂ４/１	
48	〃	〃　。	青灰、５Ｂ５/１	
49	〃	〃　。	灰、５Ｙ６/１	
50	〃	〃　。つまみ痕。	灰、Ｎ６/０	
51	〃	〃　。	青灰、５Ｂ５/１	口縁部重焼痕、自然釉。
52	〃	〃　。	灰、Ｎ５/０	焼けひずみ顕著。
53	〃	〃　。	灰、Ｎ６/０	口縁部重焼痕、自然釉。
54	〃	〃　。つまみ不詳。	暗赤灰、５Ｒ３/１	
55	〃	〃　。	暗青灰、５Ｂ４/１	口縁部重焼痕、自然釉。
56	〃	〃　。	灰、Ｎ６/０	
57	〃	〃　。	青灰、５ＰＢ５/１	
58	〃	〃　。	にぶい黄橙、10ＹＲ７/３	口縁部重焼痕。

59	杯蓋	天上部外面ヘラ切り後ナデ。	青灰、５Ｂ５/１	
60	〃	内外面ナデ。	青灰、５ＰＢ５/１	
61	〃	天井部外面ヘラ切り後ナデ。	〃	
62	〃	〃　。つまみ痕。	〃	口縁部重焼痕。
63	〃	〃　。	青灰、５Ｂ５/１	〃　。
64	〃	〃　。	暗青灰、５Ｂ４/１	
65	〃	内面ヨコナデ。	灰、Ｎ５/０	
66	〃	内外面ヨコナデ。	灰、Ｎ６/０	口縁部重焼痕。
67	〃	天井部ヘラ切り後ナデ。	灰、Ｎ５/０	ヘラ記号。口縁部内面自然釉。
68	〃	内外面ヨコナデ。	〃	ヘラ記号。
69	〃	〃　。	〃	ヘラ記号または刻字。
70	蓋	天井部外面ヘラ切り後ナデ。	灰、Ｎ６/０	
71	〃	天井部外面回転ヘラケズリ。	〃	
72	〃	天井部外面ヘラ切り後ナデ。	〃	
73	〃	〃　。つまみ痕。	灰、Ｎ５/０	
74	〃	口縁部内外面ヨコナデ。	灰白、Ｎ７/０	
75	〃	天井部外面ヘラ切り。	灰、Ｎ６/０	
76	〃	〃　。	灰白、Ｎ８/０	
77	杯	底部外面ヘラ切り後ナデ。	青灰、５Ｂ５/１	口縁部内面重焼痕。
78	〃	口縁部内外面ヨコナデ。	灰、7.5Ｙ６/１	
79	〃	底部外面ヘラ切り後丁寧なナデ。	灰、Ｎ６/０	
80	〃	底部外面ヘラ切り後ナデ。	灰、５Ｙ６/１	
81	〃	〃　。	青灰、５ＰＢ６/１	
82	〃	〃　。	灰、Ｎ７/０	
83	〃	調整不詳。	灰白、2.5Ｙ８/１	
84	椀	内外面ヨコナデ。貼付高台。	暗青灰、10ＢＧ４/１	口縁部外面自然釉。
85	杯	杯部内外面ヨコナデ。〃　。	灰、Ｎ６/０	底部外面ヘラ記号。
86	〃	底部外面ヘラ切り後ナデ。〃　。	灰、Ｎ５/０	
87	〃	〃　。〃　。	灰、Ｎ６/０	
88	〃	〃　。〃　。	〃	
89	〃	杯部内外面ヨコナデ。〃　。	〃	
90	〃	底部外面ヘラ切り後ナデ。〃　。	灰白、7.5Ｙ７/１	
91	〃	〃　。〃　。	緑、10Ｇ６/１	
92	〃	〃　。〃　。	灰、Ｎ６/０	口縁部外面重焼痕。
93	〃	杯部内外面ヨコナデ。〃　。	〃	
94	〃	底部外面ヘラ切り。〃　。	〃	
95	〃	杯部内外面ヨコナデ。〃　。	灰、Ｎ６/１	
96	〃	底部外面ヘラ切り後ナデ。〃　。	灰、Ｎ６/０	
97	椀	〃　。〃　。	灰、Ｎ６/１	
98	〃	体部内外面ヨコナデ。〃　。	灰、Ｎ５/０	口縁部外面自然釉。
99	〃	底部外面ヘラ切り後ナデ。〃　。	青灰、５ＰＢ５/１	
100	〃	内外面ナデ。〃　。	灰、Ｎ５/０	体部外面自然釉、墨痕。
101	〃	底部外面ヘラ切り後ナデ。〃　。	灰、Ｎ６/０	
102	〃	〃　。〃　。	〃	
103	〃	〃　。〃　。	暗青灰、５Ｂ４/１	体部外面自然釉。
104	〃	〃　。〃　。	青灰、５Ｂ５/１	底部内面竹管刺突文。
105		底部外面ヘラ切り。貼付高台。	灰、7.5Ｙ６/１	〃　。
106	椀	底部外面ヘラ切り後ナデ。〃　。	暗青灰、５Ｂ４/１	底部外面ヘラ記号。
107		底部外面ヘラ切り。〃　。	青灰、10ＢＧ５/１	底部内面ヘラ記号。
108		内外面ヨコナデ。〃　。	灰白、7.5Ｙ７/１	〃　。
109		底部外面ヘラ切り後ナデ。〃　。	オリーブ灰、2.5ＧＹ6/1	底部外面ヘラ記号。
110		〃　。〃　。	暗青灰、５Ｂ４/１	底部外面ヘラ記号または刻字。
111	皿	〃　。	灰、Ｎ６/０	
112	〃	底部外面ヘラ切り。	〃	
113	〃	〃　。	灰白、7.5Ｙ８/１	
114	〃	底部外面ヘラ切り後ナデ。	暗青灰、５Ｂ４/１	
115	〃	〃　。	灰、Ｎ５/０	
116	〃	〃　。	灰白、Ｎ７/１	
117	〃	〃　。	灰白、7.5Ｙ７/１	

118	皿	底部外面ヘラ切り後指頭押え後ナデ。貼付高台。	灰白、7.5Y７/１	
119	椀	底部外面ヘラ切り。　〃　。	灰、Ｎ５/０	
120	平瓶	〃　。体部外面ヘラ削り。	暗青灰、５Ｂ４/１	底部外面刻字。底部内面・口縁部内外面自然釉。
121	〃	内外面ヨコナデ。	灰白、５Ｙ７/１	
122	硯	貼付突帯。棒状浮文・円形透し孔各１個以上。	灰、Ｎ６/０	残存１/４。
123	高杯	内外面ヨコナデ。	灰、Ｎ８/０	
124	壺	内外面絞り後ヨコナデ。	灰、Ｎ６/０	
125	高杯	内外面ヨコナデ。	灰白、Ｎ７/１	杯部内面ヘラ記号。
126	〃	〃　。	灰白、Ｎ８/０	
127	壺	底部外面ヘラ切り。	灰、Ｎ５/０	
128	杯	内外面ヨコナデ。	灰白、7.5Ｙ７/１	
129		底部外面ヘラ削り、繊維痕。底部貼付。	灰、Ｎ６/０	内外面自然釉。
130	甕	内面格子目タタキ、年輪痕。	灰、7.5Ｙ６/１	
131	〃	外面タテ方向平行タタキ後カキメ。	灰、Ｎ６/０	
132	〃	内面同心円タタキ後ナデ。	灰、Ｎ５/１	
133	〃	内面あて具痕。	〃	
134	〃	内面ヨコナデ。外面平行タタキ。木目痕。	暗青灰、10ＢＧ３/１	
135	〃	〃　。	灰、Ｎ５/０	
136	〃	外面刻み目。	褐、7.5ＹＲ４/３	
137	〃	内面深い格子目タタキ。外面長方形格子目タタキ。	暗青灰、５Ｂ４/１	外面自然釉。
138	〃	内面格子目タタキ後ナデ。	暗青灰、５Ｂ４/１	
139	〃	外面格子目タタキ後カキメ。	青灰、５Ｂ５/１	
140	〃	内外面とも工具に木目痕。	暗青灰、５Ｂ４/１	外面自然釉。
141	〃	外面平行タタキ、木目痕。	暗青灰、５Ｂ３/１	
142	〃	内面格子目タタキ。外面平行タタキ。	青灰、５Ｂ５/１	
143	〃	胴部外面下端ヘラ削り後ナデ。	暗青灰、５Ｂ４/１	内外面自然釉。
144	〃	体部外面ヨコ方向平行タタキ。	灰白、2.5Ｙ７/１	亀山焼。
145	〃	〃　。	灰、Ｎ５/０	〃　。
146	〃	内面ヨコナデ。外面格子目タタキ。	灰、Ｎ６/０	勝間田焼。
147	椀	貫入。	灰オリーブ、7.5Ｙ６/２	青磁。
148	〃	釉薬は薄い。	灰白、５Ｙ７/２	白磁。
149	〃	調整不詳。貼付高台。	橙、2.5ＹＲ６/８	内黒土器。
150	〃	底部外面糸切り。	灰白、Ｎ７/１	須恵質土器。
151	杯蓋	天井部外面ヘラ切り後ナデ。	青灰、５Ｂ５/１	天井部内面文字。
152	〃	〃　。	灰、Ｎ５/０	〃　。
153	〃	〃　。	暗青灰、５Ｂ４/１	
154	〃	〃　。	オリーブ灰、2.5ＧＹ6/１	
155	〃	〃　。	灰、Ｎ５/０	つまみは無い。
156	〃	〃　。	灰、Ｎ４/０	
157	〃	〃　。	淡黄、2.5Ｙ７/３	内外面磨滅。いびつ。
158	〃	〃　。	灰、Ｎ６/０	
159	〃	〃　。	青灰、５ＰＢ５/１	口縁部いびつ。
160	〃	〃　。天井部内面ヨコナデ後ナデ。	暗青灰、５Ｂ４/１	重ね焼き痕有。
161	〃	〃　。　〃　。	灰、５Ｙ５/１	
162	蓋	〃　。　〃　。	暗青灰、５Ｂ４/１	
163	〃	〃　。	暗紫灰、５ＲＰ４/１	重ね焼き痕有。
164	杯身	底部外面ヘラ切り後指頭押え、ナデ。	灰、7.5Ｙ６/１	
165	〃	底部外面ヘラ切り後ナデ。	灰、Ｎ５/０	
166	〃	底部外面ヘラ切り。	灰、Ｎ６/０	
167	〃	底部外面ヘラ切り後ナデか。	灰、５Ｙ６/１	
168	〃	内外面ヨコナデ。	暗青灰、５Ｂ４/１	
169	〃	底部外面ヘラ切り後ナデ。	青灰、５Ｂ５/１	
170	〃	底部外面ヘラ切り。	灰黄、2.5Ｙ６/２	底部内面ヘラ描き。
171	〃	底部外面ヘラ切り後ナデ。	緑灰、10ＧＹ６/１	底部外面ヘラ描き。
172	壺	体部外面ヘラ削り後ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	灰、Ｎ４/０	口縁端部欠損。
173	〃	内外面ヨコナデ。	灰、Ｎ６/０	外面自然釉。
174	〃	〃　。	灰白、５Ｙ７/１	底部外面ヘラ描き。
175	〃		暗青灰、５Ｂ４/１	〃
176	〃	内外面ヨコナデ。	黒、2.5ＧＹ２/１	外面一部自然釉。
177	〃	底部外面凹凸。	青黒、５ＢＧ２/１	

178	高杯	内外面ヨコナデ。	青灰、５Ｂ５/１	
179			灰白、7.5Ｙ７/１	外面自然釉。
180	鉄鉢	体部外面下半ヘラケズリ。	にぶい赤褐、2.5ＹＲ5/4	
181		柱口部は11面に面取り。	暗青灰、５Ｂ４/１	上下不詳。
182	杯蓋	天井部外面ヘラ切り後ナデ。	青灰、５ＢＧ６/１	
183	〃	〃　　。	灰、Ｎ５/０	つまみは無い。
184	〃	内外面ヨコナデ。	〃	
185	〃	天井部外面ヘラ切り後ナデ。	青灰、５ＰＢ５/１	いびつ。
186	〃	〃　　。	灰、Ｎ５/５	
187	杯身	底部外面ヘラ切り後ナデ。	暗灰黄、2.5Ｙ５/２	外面自然釉。

第２表　荒神風呂遺跡　出土土製品一覧表

番号	器種	計測最大値（mm）			重量	出土遺構	備考
		長	幅	厚	（g）		
1	土錘	39	11	11.8	3.82	溝状遺構	一部欠損
2	〃	48	12.5	14.5	7.37	調査区西端部包含層	ほぼ完存
3	〃	26	8	8.5	1.79	〃	一部欠損

第３表　荒神風呂遺跡　出土石器一覧表

番号	器種	材質	計測最大値（mm）			重量	出土遺構	備考
			長	幅	厚	（g）		
1		緑色片岩	91	57	13	116.68	竪穴住居１	石包丁未製品か
2	石包丁	〃	113	50	7	43.77	〃	
3	スクレイパー	〃	81.8	46.8	8.9	35.15	〃	
4	石鏃	サヌカイト	28.3	19.0	3.6	1.62	〃	
5	〃	〃	14	19.5	3.5	0.84	〃	
6	〃	〃	10.0	18.0	2.5	0.55	〃	
7	〃	〃	16.4	13.5	3.5	0.82	〃	
8	〃	〃	27.5	13.5	3	1.14	竪穴住居２	
9	打製石包丁	緑色片岩	91.8	43.5	6.5	31.26	土壙１	未製品か？
10	磨製石包丁	緑色片岩か	78.2	52.6	5.9	42.00	溝状遺構内水利施設	
11	磨製石斧		25	45.2	15.7	12.19	溝状遺構	太型蛤刃石斧
12	スクレイパー	サヌカイト	59	52	7.8	20.99	〃	
13	叩石		156.0	43.6	20.8	177.76	〃	
14	石包丁	緑色片岩	94	48	12.1	83.02	柱穴群２	未製品か？
15	磨製石包丁	緑色片岩か	40	36	7.5	24.83	〃	
16	石鏃	サヌカイト	20.5	14.6	3.9	0.72	調査区西端部包含層	

第４表　荒神風呂遺跡　出土鉄器一覧表

番号	器種	計測最大値（mm）			重量	出土遺構	備考
		長	幅	厚	（g）		
1	釘	22.5	5.5	5	1.59	溝状遺構	断面方形
2	〃	37	4.5	5.5	3.75	〃	〃
3	刀子か	33.5	11.0	2.0	2.27	〃	〃
4		33	13	6.5	8.15	〃	〃
5	？	48.5	44.6	2	7.62	〃	ほぼ完存

第３節　小　　結

荒神風呂遺跡の調査で検出されたおもな遺構は、竪穴住居４軒、土壙５基、柱穴群３、溝状遺構１などである。遺物はコンテナ約35箱分出土しており、多くは奈良時代末～平安時代初の溝状遺構から出土した須恵器で、それ以外には竪穴住居や土壙から出土した弥生土器や中世の土器、および鉄器、石器、土錘、鉄滓、羽口などがある。

これら検出された遺構・遺物から遺跡の時期などのあり方をみると以下のようになる。

この遺跡の最古の遺構は弥生時代中期後半のもので、竪穴住居１軒（竪穴住居１）と土壙１基（土壙１）および溝状遺構とそれに伴う水利施設がある。これらはほぼ同時期に存在していた可能性が高いと考えられる。いずれも土器などの出土遺物は少量ではあったが、竪穴住居１からは緑色片岩と考えられる石器および未製品や剝片が出土しており、石器製作を行なっていた可能性が考えられる。

次の段階の弥生時代後期後半までは空白期間があり、この時期のものとしては、２軒の竪穴住居（竪穴住居２・３）が考えられる。この２軒は30m余り離れており、規模も異っている。また、竪穴住居３は火災を被っていた。これら２軒の竪穴住居が同時に存在していたかどうかは不明である。また、溝状遺構についてはこの時期にも一部機能していたと考えたい。

これらの他に時期を特定できなかった土壙３・４のうち土壙４は、弥生時代後期後半の竪穴住居２によって切られていることから弥生時代のもので、弥生時代中期後半の一連の遺構と共存していた可能性を考えておきたい。

柱穴群については、後に述べる奈良時代末～平安時代および中世のものもあると考えられるが、一部分は弥生時代の柱穴である可能性がある。特に柱穴群２については、周辺から弥生時代と考えられる土器や石器が少量ではあるが出土しており可能性が高いと考えたい。

弥生時代後期後半から次の段階までは長い空白期間があり、奈良時代末～平安時代初の時期になって調査区南端部の溝状遺構や、西端部の包含層中から多くの遺物の出土が認められた。しかも、これらのなかにはヘラ描き文字の書かれた須恵器片が３点（120、151、152）認められた他、円面硯（122）や稜椀（84）、装飾壺（172）など特殊な須恵器が出土している。

しかしながら、この時期の遺構としては溝状遺構以外には性格不明の土壙（土壙２）が１基明らかになったのみである。柱穴群の中にこの時期のものが含まれている可能性はあるが、遺物等から明確にすることはできなかった。

中世と考えられる遺物は溝状遺構の最上層から少量出土している。多くは鎌倉時代前半頃のものと考えられるが、この時期の明確な遺構は確認できなかった。

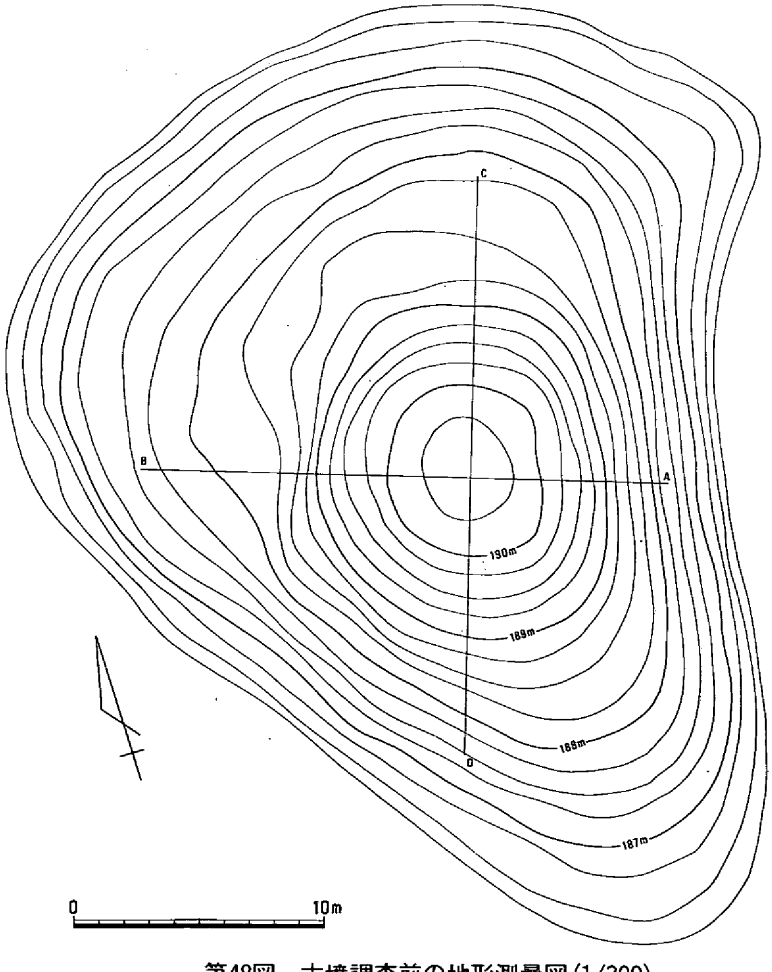
なお、溝状遺構から鉄滓および羽口が少量ではあるが出土している。　　（平井）

第４章　荒神風呂（こうじんぶろ）古墳の調査

第１節　立地と調査前の状況

立地

古墳は標高414ｍを測る「木山」から東へのびる急峻な尾根から続く、標高200ｍ前後の小丘陵の一つの山頂に築かれている。標高は約190ｍを測る。西方は丘陵が連なっているが、北方および東方は急斜面をなして平野部に続いている。また南方は、谷にむかって緩斜面が続いている。したがって、北および東、南の眺望は良く、眼下に西河内川に沿って形成された平野を見



第48図　古墳調査前の地形測量図(1/300)

降すことができる（第７図）。

調査前の状況

この古墳は第１章で述べたようにこれまで周知されておらず、工事に伴う分布調査の結果確認されたものである。

したがって、確認調査時点においても、古墳は丘陵頂部に築かれているためか、明確な墳丘を認定することができなかった。また、石材等の露出も見られず、わずかに地山を整形した円墳らしく見えるという程度であった。

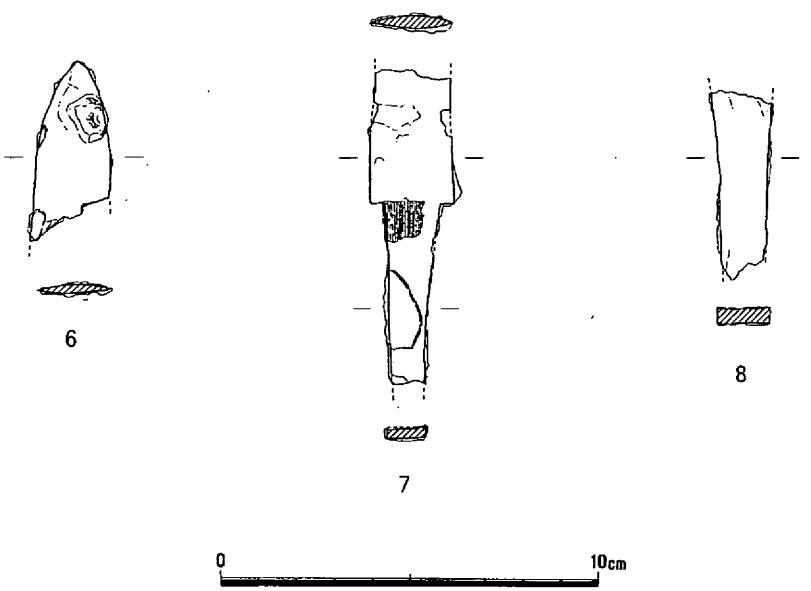
第２節　墳丘と葺石

Ⅰ　墳　　丘

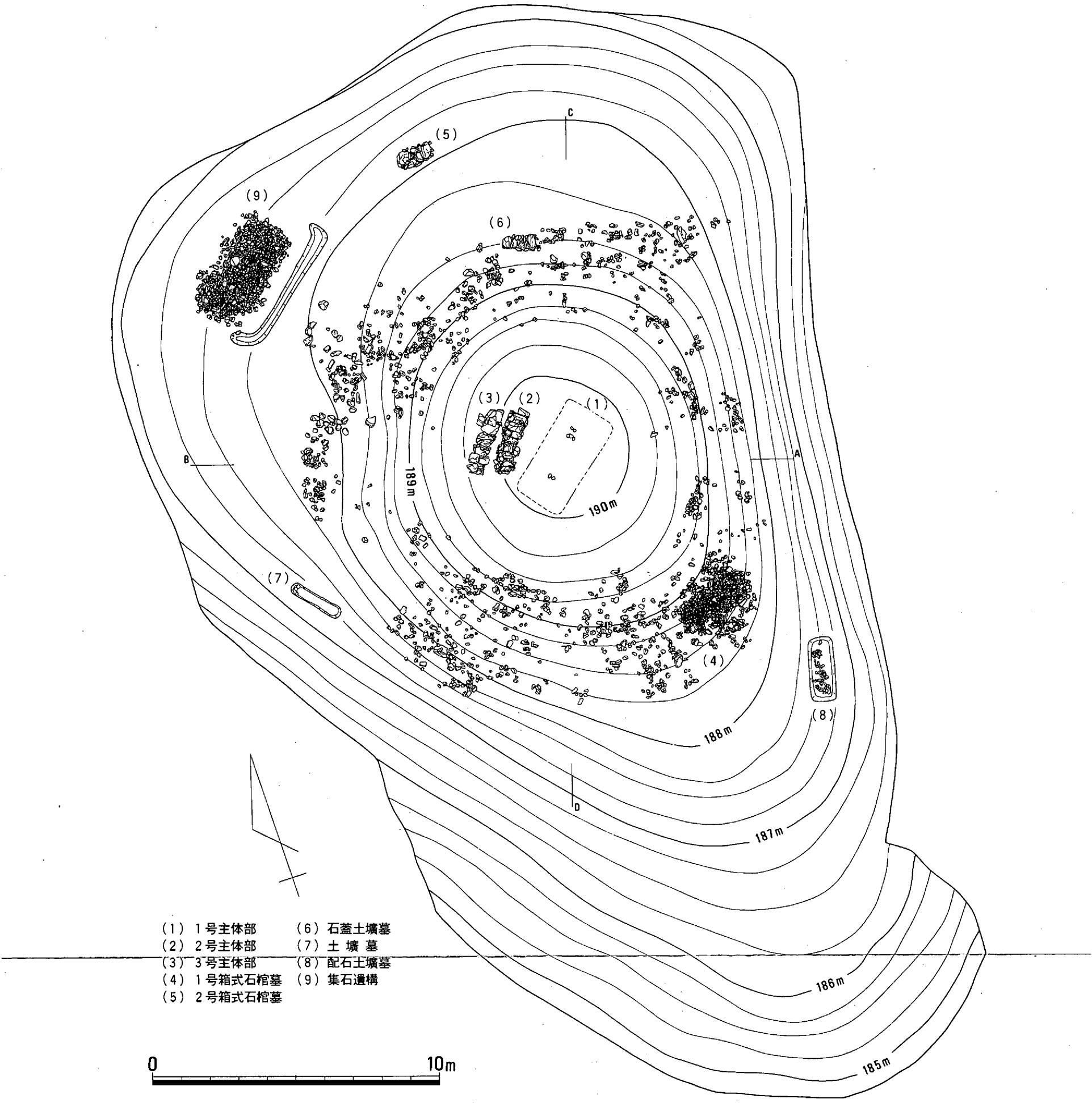
墳丘については地形測量、および墳丘断面観察によって次のような点が明らかになった。

第一に、墳丘盛土はすでに一部は流出していると考えられるが、現状では墳頂部が最も良く残っており、約40cmの厚さを測る。そして、墳端部と考えられる地点から墳頂部の盛土上面までの高さを、古墳の墳丘の高さとすれば、現状では約1.2mということになる。

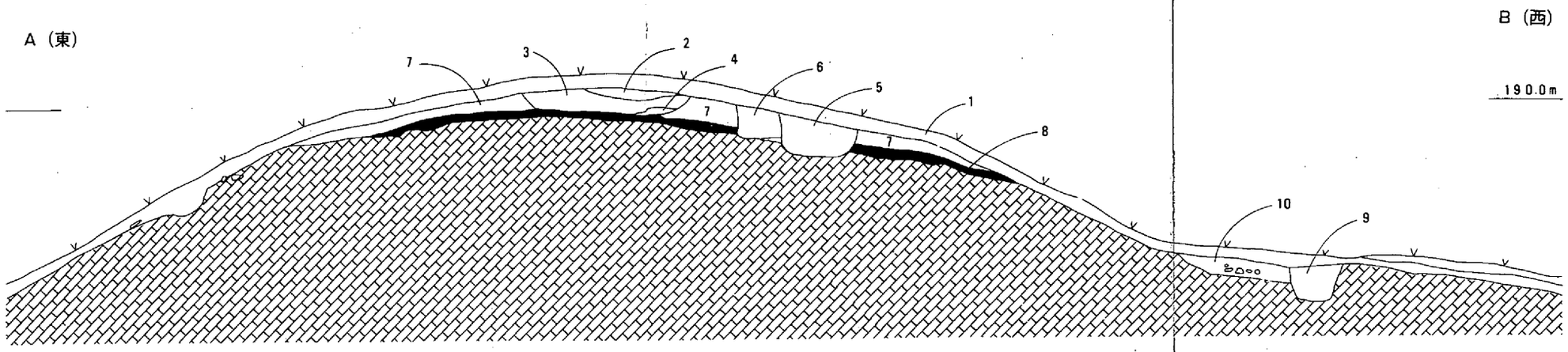
第二に墳形については、不明確な点もあるがややいびつな円形と考えたい。不明確な点の一つは、後に述べる葺石の残存状況がほぼ東西南北に辺をとる方形墳であったかのように残存している点である。しかしこの点については、葺石が流れ落ちる際に地形に影響されるなどして、現状のような状態になったとも考えられる。そして、方形墳だとすれば、主体部が辺と無



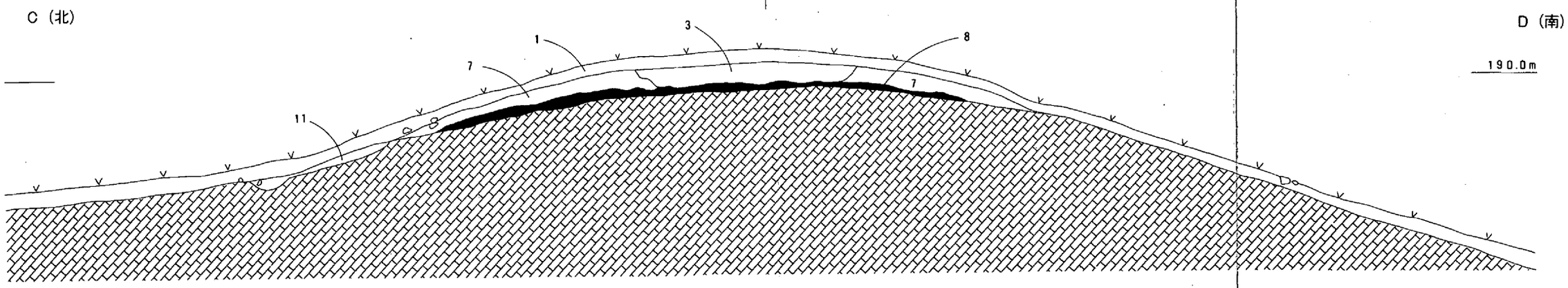
第49図　墳丘検出中　出土鉄器(1/2)

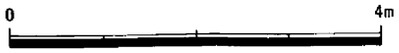


第50図　古墳全体図(1/150)



1．暗褐灰色土（現表土層）
2．暗褐灰黄色土（1号主体部）
3．褐灰黄色土（1号主体部）
4．淡灰黄色土（1号主体部）
5．淡褐灰黄色土（3号主体部）
6．淡褐灰黄色土（2号主体部）
7．淡灰黄色土（墳丘盛土）
8．暗褐灰色土（旧表土層）
9．暗灰褐色土（地山ブロックを含む）
10．灰褐色土（地山ブロック，転落した葺石を含む）
11．暗褐色土





第51図　墳丘断面図（1/80）

折り込み3

関係な方向をとっていること、また墳丘外の埋葬施設も辺の方向を意識していないということになり、現段階では、円墳と考えとおきたい。ただし、東・西部分については直線的に考えざるを得ず、ややいびつな円形と考えたい。

規模は標高189m付近を墳端と考え、径12～13mと考えておきたい。

第三に墳丘の形成のついては、第51図の断面図に示したような旧表土の残存状態から、墳頂部は旧地形をそのまま残し、墳丘裾部付近は旧地形を削ることによって墳丘を形成しているものと考えられる。

なお、第49図に示した鉄器は、表土層を除去し、墳丘および葺石を検出中に出土したものである。６は１号主体部の南西約1.5mから、７は１号主体部の南約4.5mから、また８は墳丘西端部付近の東西墳丘断面のライン付近で出土した。これらは１号主体部に副葬されていたものの可能性もあるがはっきりしない。

Ⅱ　葺　　石

葺石は、おもに10～20cmの河原石を用いている。この河原石については、内眼では古墳のすぐ下を流れる西河内川にみられる河原石に類似している。

原位置を留めているものは少ないと考えられるが、残存状況から、築造時には墳頂部付近（標高189.5m以上）には葺かれておらず、それより下の墳丘裾部にのみ２m前後の幅で葺かれていたと考えられる。また、残存状況からは、あまり密には葺かれていなかったのではなかろうか。なお、墳丘南東部に葺石が密集しているのは、その下に１号箱式石棺墓が築かれているためであろう。

第３節　埋葬施設

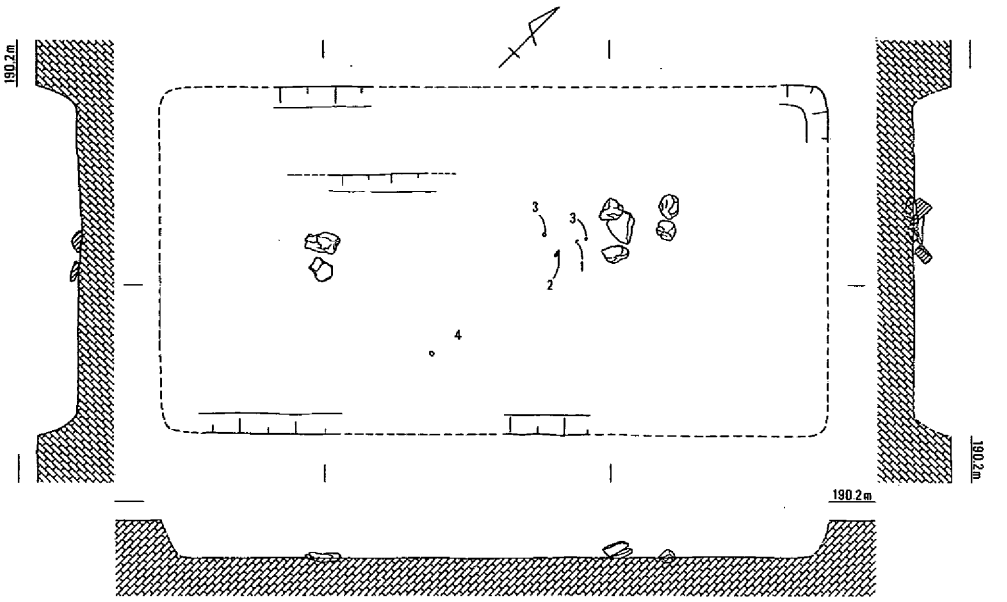
Ⅰ　墳　丘　内

１号主体部

墳丘中央部につくられた土壙である。土壙は墳丘盛土を切ってつくられており、底部は地山面まで達していない。そのため、墳丘盛土上面および盛土除去中に検出することができず、地山面よりわずかに上面で枕石と考えられる石が出土したことによって、その存在を認識し、断面観察用に残していた土手の精査によってその形状を想定した。

平面形は約350×185cmの長方形で、深さは約20cm残存していた。主軸は南西―北東方向である。主軸に沿って東と西の２か所に枕石と考えられる小礫が置かれていた。木棺の痕跡は検出できなかった。西側の枕石の北側にわずかに段が認められたが詳細は不明である。

最も北東寄りの２個の石も枕石の可能性があるが、明確ではない。これら枕石の配置から頭位を異にした２体以上の埋葬が行なわれたのではなかろうか。

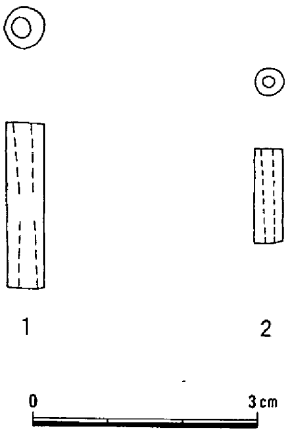


1. 管玉（2）　2. 管玉（1）　3. 青銅銹　4. 土器小片　0　1m

第52図　１号主体部　平・断面図(1/40)

遺物は北東側の枕石の周辺から管玉２個と青銅の銹小片２か所、および土器小片が出土した。

管玉１は長さ2.2cm、径0.5cm、重さ0.73ｇを測る。色調は淡緑色である。石材は緑色凝灰岩で、両面穿孔であろう。管玉２は長さ1.3cm、径0.4cm、重さ0.3ｇを測る。色調は灰うぐいす色で、石材は不明である。片面穿孔であろう。青銅の銹はわずかなもので、銹である以上のことは不明である。土器小片も器種・時期等は不明である。また、第70図204に示した高杯は、墳頂部の墳丘盛土除去中に出土したもので、１号主体部の埋土中出土の可能性がある。



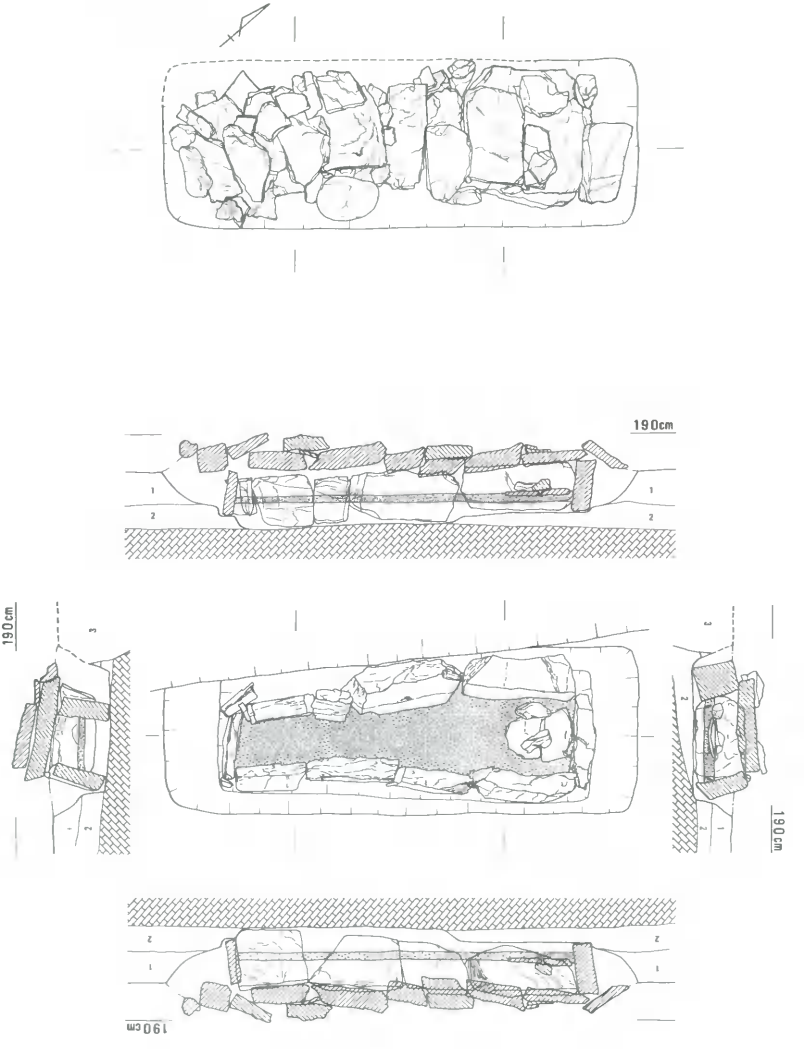
第53図　１号主体部出土管玉(1/1)

２号主体部

墳頂部からやや北西寄りで、１号主体部のわずかに北西部につくられた箱式石棺で、盗掘は受けていないと考えられる。

墳丘盛土および旧表土を切って長さ250cm、幅88cm、深さ27cmの長方形の墓壙を掘り、内部に板石を用いて箱式石棺を築いている。箱式石棺は西南隅が崩れているが、これは３号主体部築造の際に壊されたものと考えられる。

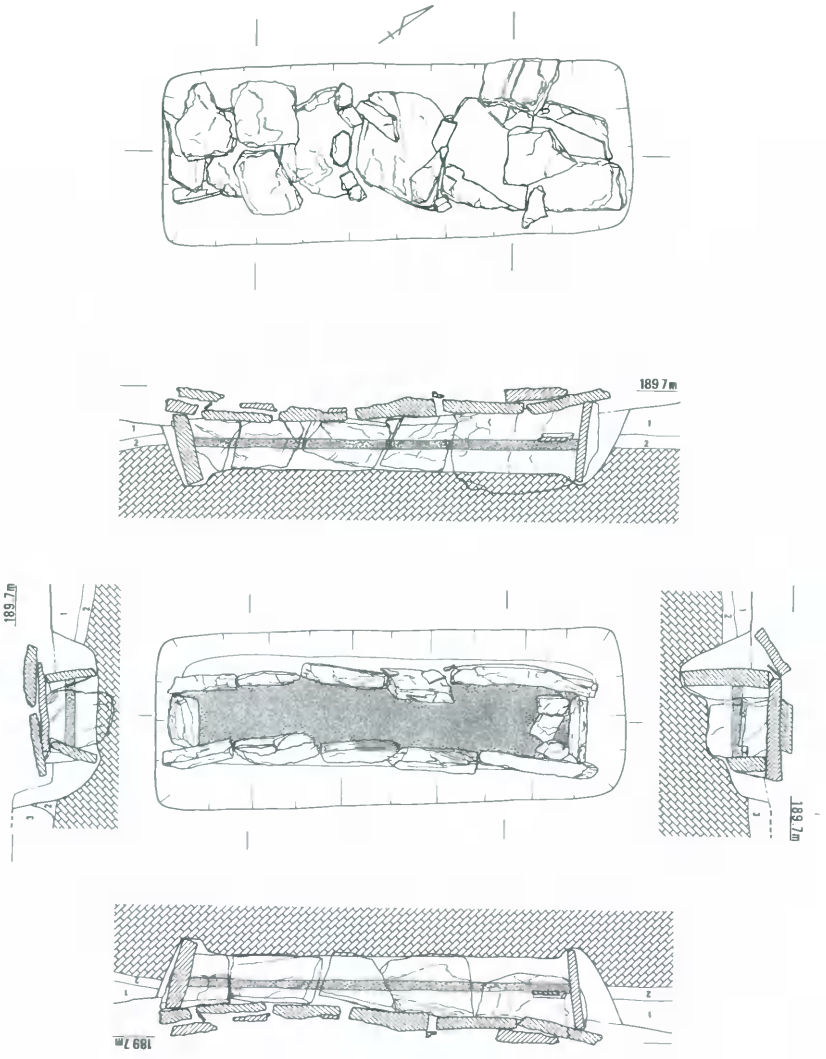
箱式石棺の側壁は厚さ５～15cmの板石を西側壁では３枚（一番南側は本来１枚のものが３号



１．墳丘盛土　　２．旧 表 土　　３．３号主体部

0　1m

第54図　２号主体部　平・断面図(1/30)



１．墳丘盛土　２．旧 表 土　３．２号主体部

0　1m

第55図　３号主体部　平・断面図(1/30)

主体部築造の際二つに割れたものと考えられる)、東側壁では４枚、いずれも横に裾えられていた。また両小口部分は側壁より薄い板石を１枚用いている（南小口は本来１枚のものが３号主体部築造の際に二つに割れたものと考えられる)。

底面には２～３㎝の小礫が約５㎝の厚さに敷きつめられていた。また、北側の隅には板石が２板裾えられ、その上に２個の小礫が置かれており、枕石と考えられる。

蓋石には厚さ10㎝前後で長さ50～70㎝、幅25～40㎝の長方形の板石が用いられている。

箱式石棺の規模は内法で最大長さ178㎝、幅40㎝、深さ13㎝を測る。

内部から遺物は全く出土しなかった。

３号主体部

墳頂部からやや北西に下がった場所につくられている箱式石棺である。２号主体部の北西にほぼ並存しており、２号主体部の南西隅を壊して築かれている。盗掘は受けていない。

墓壙は長方形を呈し、墳丘・旧表土および地山を切っており、最大で長さ247㎝、幅91㎝、深さ41㎝を測る。

この墓壙内に箱式石棺が築かれている。両側壁は、厚さ10㎝前後の板石をいずれも５枚横に並べ裾えている。また、両小口には、厚さ約５㎝の板石を１枚縦に立てて用いている。底には土と２～３㎝の小礫を厚さ約５㎝に敷きつめて底面を形成している。北小口近くには板石と角礫が裾えられており、枕石と考えられる。蓋石は厚さ10㎝前後で、長さ40～60㎝、幅20～50㎝の板石を７枚用いており、一部は二重になっている。

箱式石棺の規模は内法で最大長さ195㎝、幅41㎝、深さ17㎝を測る。

内部から遺物は全く出土しなかった。

Ⅱ　墳　丘　外

この古墳には墳丘外にもいくつか埋葬施設が検出された。

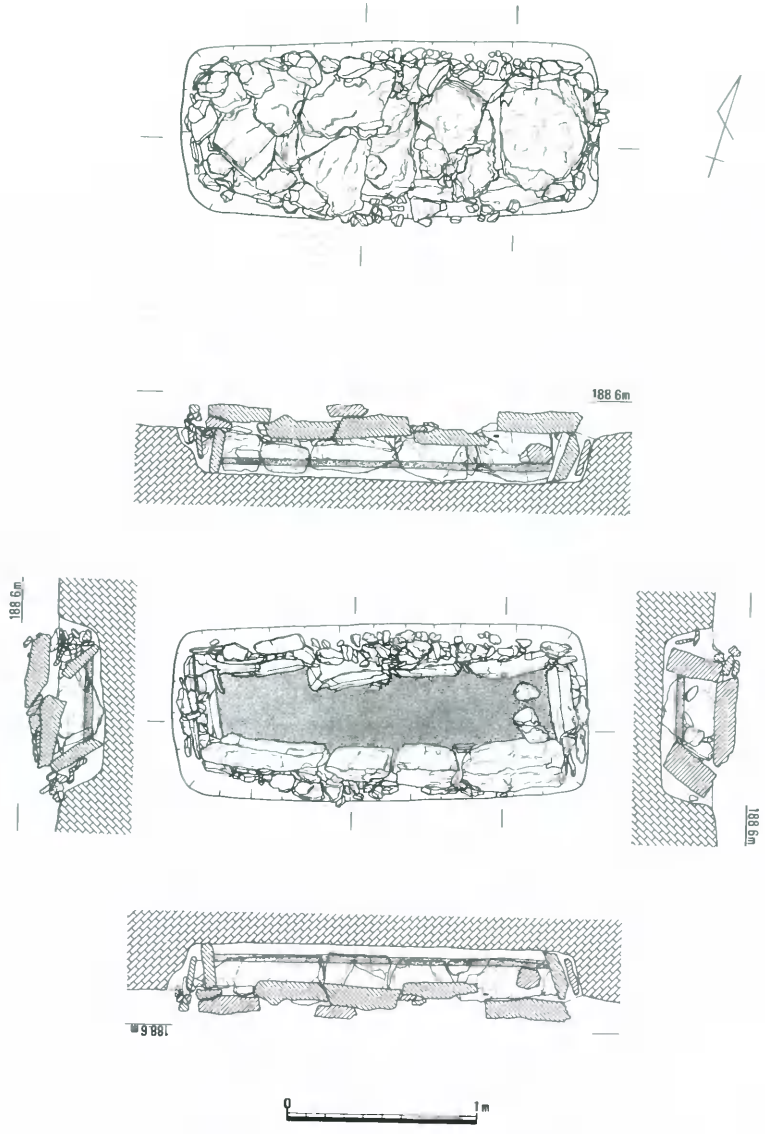
１号箱式石棺墓

墳丘南東端部付近において検出された箱式石棺墓である。検出位置は第50図の葺石が密集している部分で、その葺石の下で検出された。盗掘は受けていない。

墓壙は隅丸の長方形で長さ220㎝、幅94㎝、深さ24㎝を測る。

この墓壙内に箱式石棺が築かれている。箱式石棺の北側壁は厚さ７～12㎝の板石を５枚、南側壁は厚さ７～15㎝の板石を４枚横に裾えている。小口には厚さ５㎝前後の板石を１枚用いている。またこの箱式石棺では、側壁および小口とも墳丘の葺石などを用いて裏込めが行なわれており、墳丘築造後につくられたと考えられる。底面は土と２～３㎝の礫を約４㎝の厚さに敷きつめている。そして、東側小口近くには小礫が３個裾えられており、枕石と考えられる。

蓋石は厚さ10㎝前後の板石を５枚用いており、一部は二重に、また隙間は葺石の石で塞がれ



第56図　１号箱式石棺墓　平・断面図(1/30)

ていた。箱式石棺の規模は、内法で長さ約178㎝、幅40㎝、深さ15㎝を測る。

内部から遺物は全く出土しなかった。

２号箱式石棺墓

古墳の墳丘端から北へ約４ｍの地点で検出された。地形的にはやや平坦になっている。

墓壙は長方形で、長さ112㎝、幅47㎝、深さ27㎝を測る。

この墓壙内に箱式石棺が築かれている。側壁は一部壊れている部分もあるが、厚さ５㎝前後の板石２枚を横に裾えている。東小口は厚さ約６㎝の板石を縦に裾え、西小口は厚さ２㎝と薄い板石を３枚差し込んでいる。

底面には厚さ２㎝で10㎝前後の大きさの板石を全面に敷きつめており、一部では二重、三重になっている。また東側小口近くには、２個の小礫が床面上に裾えられており、枕石であろう。蓋石は一部壊れているが、本来は厚さ５～10㎝の板石を３枚用いていたと考えられる。

箱式石棺の規模は内法で最大長さ88㎝、幅15㎝、深さ25㎝を測る。

内部から遺物は全く出土しなかった。

石蓋土壙墓

墳丘北端部付近で検出された。墓壙は長方形で長さ141㎝、幅52㎝、深さ15㎝を測る。この墓壙の長辺両側に20×12㎝前後の小礫を並べて側壁を形成している。基本的に１段であるが、一部は２段になっている。小礫の壁の内法は幅30㎝前後を測る。ところが小口部分にはこうした小礫は認められなかった。

蓋石は、厚さ10㎝前後の板石が４枚残存していたが本来はもう少し多く用いられていたと考えられる。底面には何も敷かれていなかった。また、枕石と考えられるものも無かった。

内部から遺物は全く出土しなかった。なお、第58図に示した土器№７（高杯片）については第５節Ⅳにおいて記している。

土壙墓

古墳の南西墳丘外において検出された。丘陵斜面部に斜面に平行してつくられている。

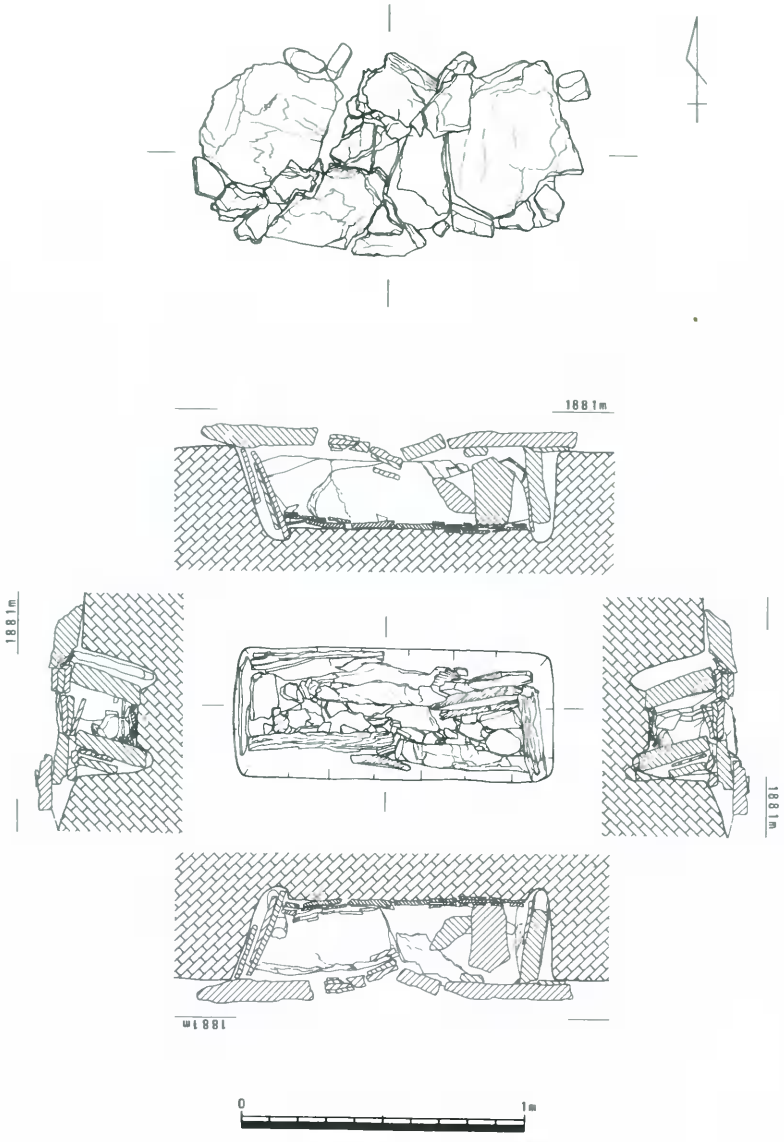
平面形は小口部分が丸味をもつ長方形を呈し、長さ197㎝、幅40㎝、深さ17㎝を測る。底面はほぼ水平で、北東部の小口部分には、10～20㎝の小礫が第59図に示したように裾えられていた。この小礫群は枕石と考えられ、この土壙は土壙墓と考えて良いであろう。

埋土は暗褐灰色土で、少量の炭粒を含んでいた。埋土上面で時期不明の土器小片が出土したが、この土壙墓に伴うかどうかは不明である。他に遺物は全く出土しなかった。

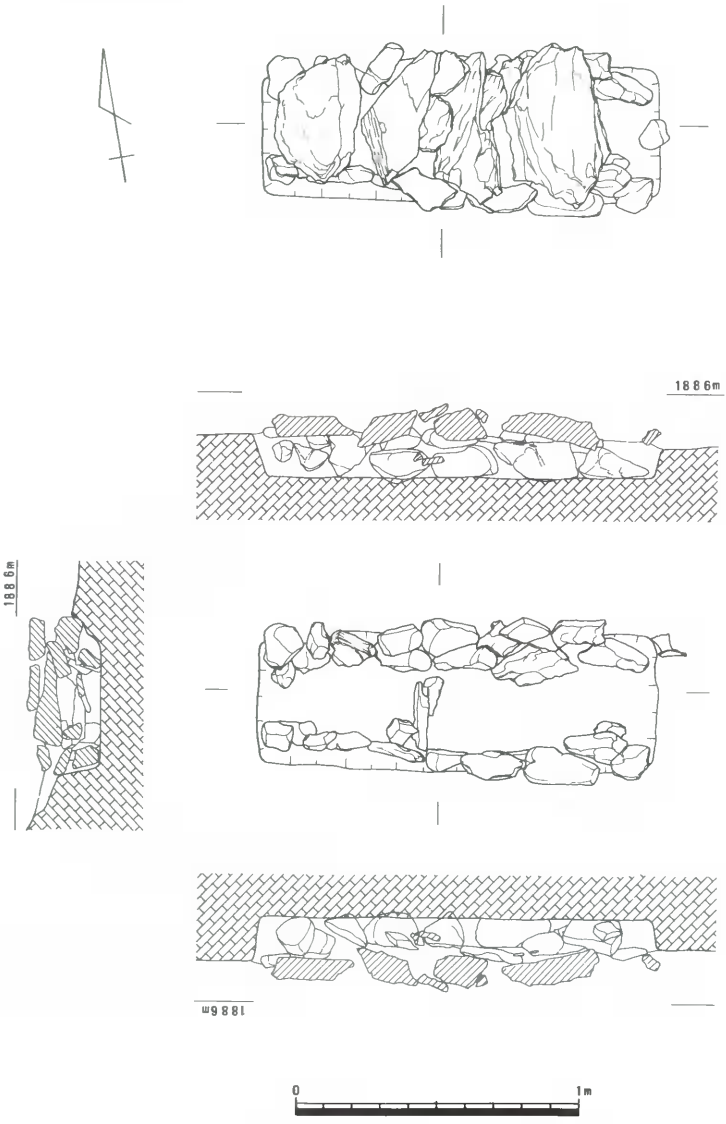
配石土壙墓

古墳の南東墳丘外において検出された。丘陵斜面部に、斜面に平行してつくられている。

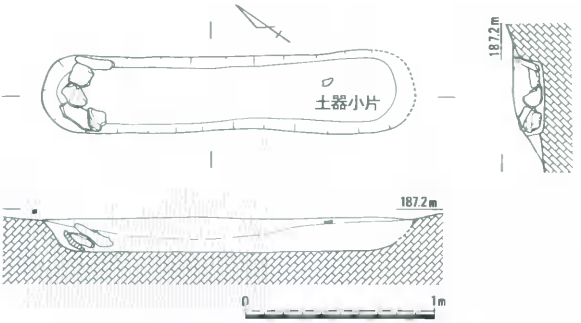
この土壙は、当初地山面検出中に葺石と同じ小礫の密集が認められたもので、周囲の調査を



第57図　２号箱式石棺墓　平・断面図(1/20)



第58図　石蓋土壙墓　平・断面図(1/20)

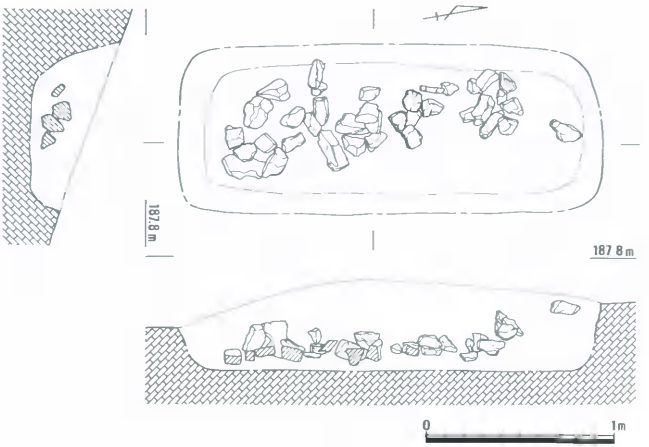


第59図　土壙墓　平・断面図(1/30)

行なったが、掘り方らしき土層の違いを認めることができなかった。その後一部の礫を取り除きながら掘り下げたところ、下層にも礫が存在することが明らかになり、この時点で実測および断面の観察等を行ない、掘り方の検出に努めたが、土層の違いは明確にできなかった。

したがって、平面形や規模は明確ではないが推定で、平面形は隅丸の長方形で、規模は長さ225cm、幅88cm、深さは最大で40cm前後と考えられる。礫以外には遺物は全く出土しなかった。

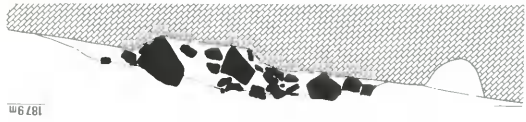
この土壙の性格については、礫の出土状況や推定した形状から、土壙墓の上面に礫を伴う配石土壙墓と考えておきたい。

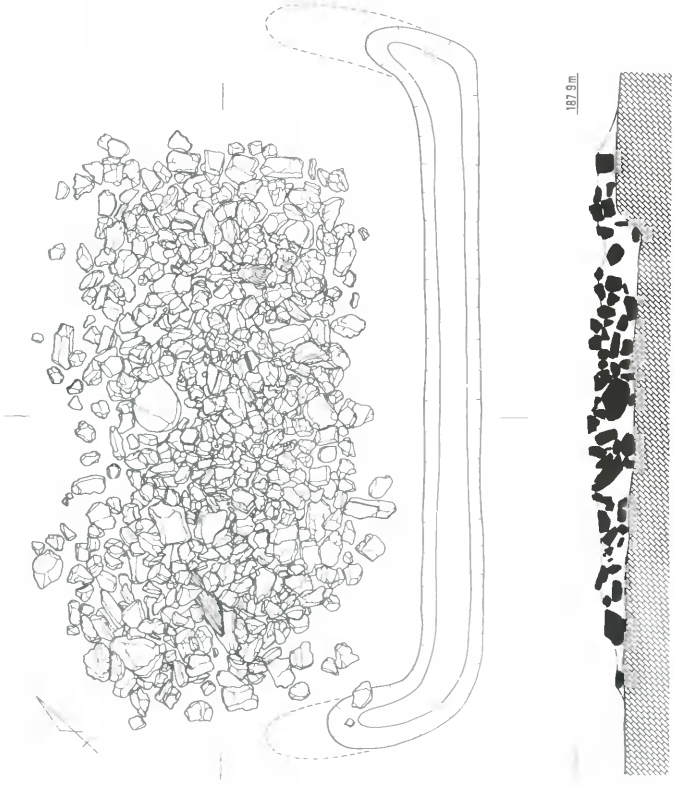


第60図　配石土壙墓　平・断面図(1/30)

第4節　集石遺構

古墳の北西墳丘外において検出された。墳端から約5m離れた緩斜面に築かれている。





第61図　集石遺構　平・断面図(1/40)

集石部分は、15cm前後の大きさの石が多く、葺石に用いられている石と同じ種類である。

石は、長方形を意識して積まれており、長さ400cm、幅200cm前後を測る。検出した状況では、東辺と南辺が直線的に良く残存していた。また、断面の観察によれば、これらの石は面的に積み上げてはおらずかなり雑然と積まれており、小礫では４段まで積まれていた。

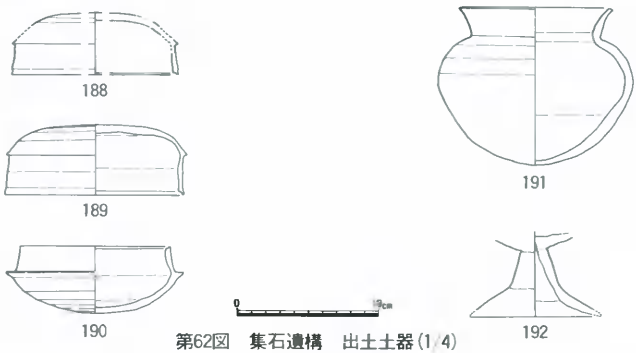
底面は水平ではなく丘陵斜面をそのまま利用しており、わずかの凸凹や段が認められた。また上面も面的にそろえられてはいるが、水平ではなく丘陵斜面にそって傾斜している。

この集石遺構の南東部、丘陵斜面の高い部分において、「コ」字形の溝が検出された。この溝は、集石遺構の長辺に沿って掘られており、短辺側で丘陵斜面の低い部分に向って曲っている。このような溝の位置および形状からこの溝は集石遺構に関連する溝で、集石遺構を丘陵頂部から流れる水から防ぐ排水溝の役割を果していたものと考えたい。

この溝は、集石遺構除去後の遺構検出中に検出したもので、第61図の実線部分は検出時の平面形を、また破線部分は底の深さ等から推定される平面形を示している。検出した溝の幅は40cm前後、深さは25cm前後を測り、埋土は淡褐灰色土が１層のみであった。

この集石遺構からは須恵器・土師器が出土した。出土地点は、集石部の南角付近に集中しており、この部分の集石は少し乱れた状況を示している。須恵器は小片となって集石の間から出土したものと、集石下の地山面に密着して出土したほぼ完形品および小片がある。第62図の杯身190はほぼ完形の状態で地山面から出土したもので、188、189、191はそれぞれ破片となって集石間および地山面から出土した。そのうち189・191は、接合の結果ほぼ完形に復元できた。土師器192は集石の下の地山面から出土した（図版35－２、36－１・２参照）。

集石遺構の下からは埋葬施設は検出できなかった。推測ではあるが、古墳に関連する何らかの祭祀が行なわれた遺構ではなかろうか。



第62図　集石遺構　出土土器(1/4)

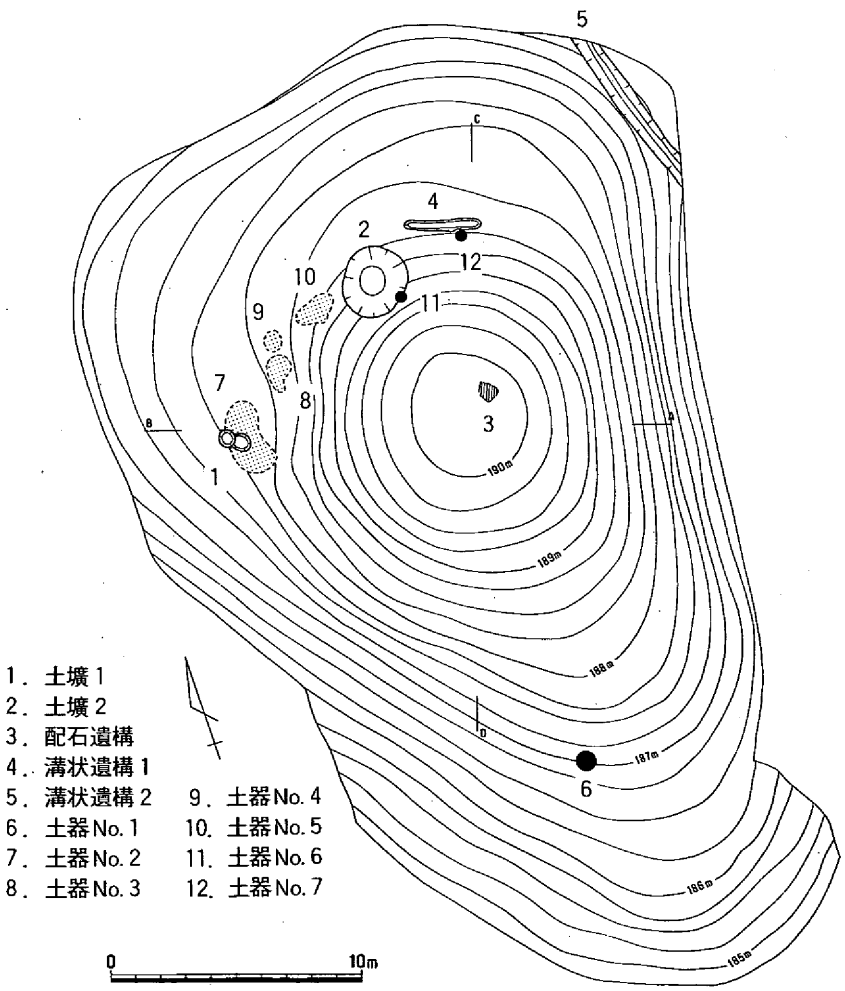
第５節　その他の遺構・遺物

前節までに古墳および古墳に関連する遺構・遺物について述べてきたが、それら以外に古墳に関連するかどうかはっきりしない遺構・遺物および確実に古墳以外と考えられる遺構・遺物が検出されており、以下それらについて記してみたい。

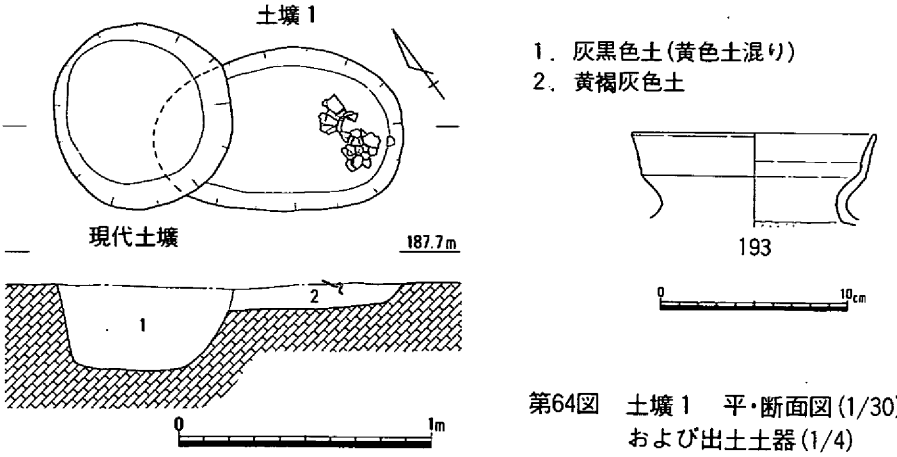
1　土壙

土壙１

古墳の西墳丘外において検出された。墳端部から約３ｍ離れた位置に所在し、ゆるやかな傾斜面につくられている。後に述べる土器散布地である土器№２と重複しており、また、西側は



第63図　その他の遺構・遺物全体図(1/300)



第64図　土壙１　平・断面図（1/30）
および出土土器（1/4）

現代と考えられる土壙によって切られている（第64図）。

平面形および深さは明確ではなかったが、ややいびつな楕円形を呈し、規模は検出面で長径100cm、短径68cm、深さ８cmを測る。

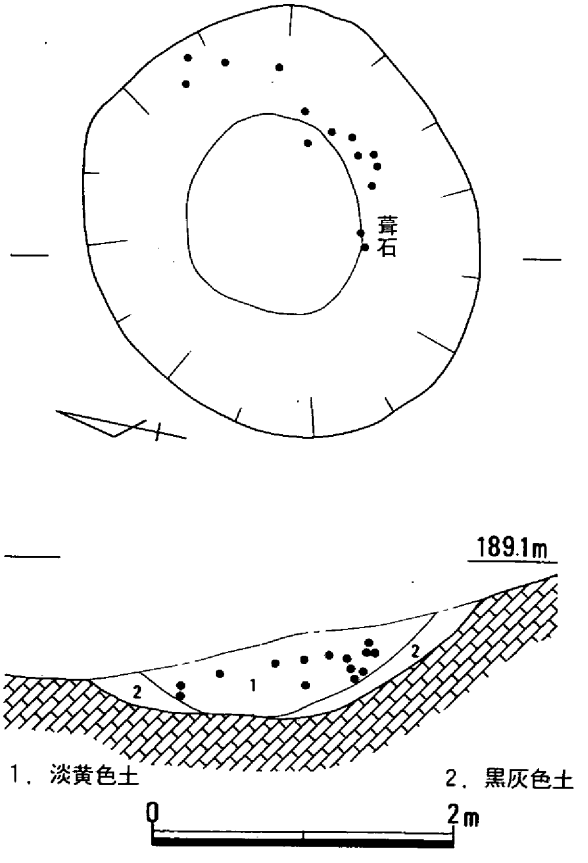
埋土は黄褐灰色土で、その上面付近から土器（土師器の甕）が出土している。

なお、この遺構についてはすでに述べたように平面形、深さとも明確ではなく、土器No.２における凹み状の遺構の可能性もあるが、一応土壙として記しておきたい。

土壙２

古墳の北西墳丘端部付近で検出された土壙である。

この土壙は、葺石を除去し地山面を検出していたところ、葺石が地山面より下にも多く認められることから断面観察等で明らかになったものである。



第65図　土壙２　平・断面図（1/50）

平面形は約280×260cmのややいびつな円形を呈し、深さは最大で約60cmを測る。

断面形は皿状を呈し、埋土は２層認められた。そのうち、葺石は第65図の１層中から多く出土した。

遺物は葺石以外には何も出土しなかった。

ところで、この遺構については時期を明らかにする遺物は出土しなかったが、埋土中に葺石が投げ込まれたような状態で出土することから、古墳築造時より後のものであろう。

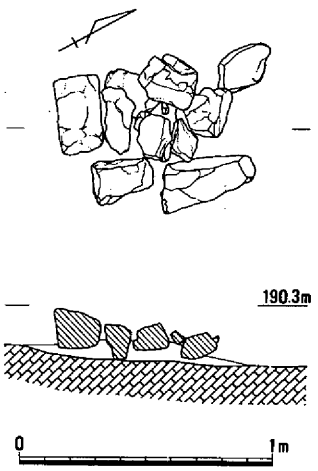
また、この土壙の下層に堆積している黒灰色土については、古墳時代以前の古い遺構の埋土中には認められないものである。さらに、当古墳周辺には、現代土壙と考えられる松根を取った土壙がいくつか存在しており、黒灰色土の埋土はそうした土壙中にも堆積している。

以上のことから、この土壙は現代あるいは現代に近い時期のものと考えておきたい。

Ⅱ　配石遺構

古墳墳頂部に位置する遺構である。

10個余りの主に面を持つ角礫が集中的に設置されている。ただし、集中してはいるが、特に意識して丁寧に敷き並べているという感じはしない。あえて言えば、南と東の３個の角礫がＬ字型に意識して置かれて、内部を囲っている様にみえる。これらの角礫で囲まれた内部の石については、本来は丁寧に置かれていたのかも知れないが、検出時には崩れた状態で、一部は２段になっており、本来の形状はとどめていないと考えられる。



第66図　配石遺構　平・断面図(1/30)

ところで、これらの石は現状では墳丘盛土上面に置かれており、古墳築造時よりは明らかに後のものである。また、調査前においては、殆んどが表土層に覆われていたものの、石の上面がわずかに露出していた。

こうした点から、この遺構は、現代に近い時期のものと考えて良いのではなかろうか。

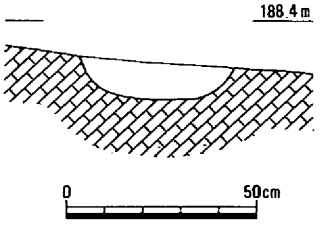
Ⅲ　溝状遺構

溝状遺構１

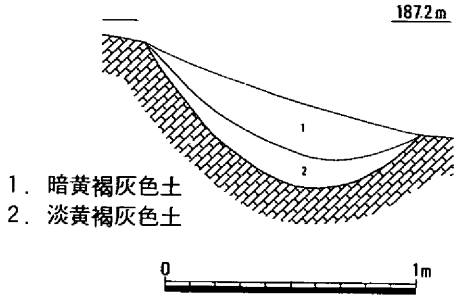
古墳の北墳丘端部付近で検出された溝状遺構である。

この溝状遺構は、墳丘断面観察のための南北トレンチの断面でその存在が想定された。その後、葺石を除去し、地山面を清掃する過程で、ほぼ東西方向に約３ｍの溝状の遺構が存在することが明らかになった。

位置は石蓋土壙墓の北側にほぼ接しており、幅40cm前後、深さ10cm前後が残存していた。



第67図　溝状遺構１　断面図(1/20)



第68図　溝状遺構２　断面図(1/30)

埋土は暗褐色土で、埋土中から遺物は出土しなかった。

この溝状遺構の時期、性格については明らかでない。古墳の北辺を画する掘り切り溝が一部残存したものである可能性もあるが、石蓋土壙墓と接近しすぎている点やこの北側にも２号箱式石棺墓がつくられている点などから、その可能性については否定的に考えておきたい。

溝状遺構２

古墳の北東墳丘外で検出された。調査区の北東隅に所在するため、その一部を検出したにすぎない。

表土層を除去し、地山面を清掃した段階で確認でき、検出面での幅110cm前後、深さ50cm前後を測る。

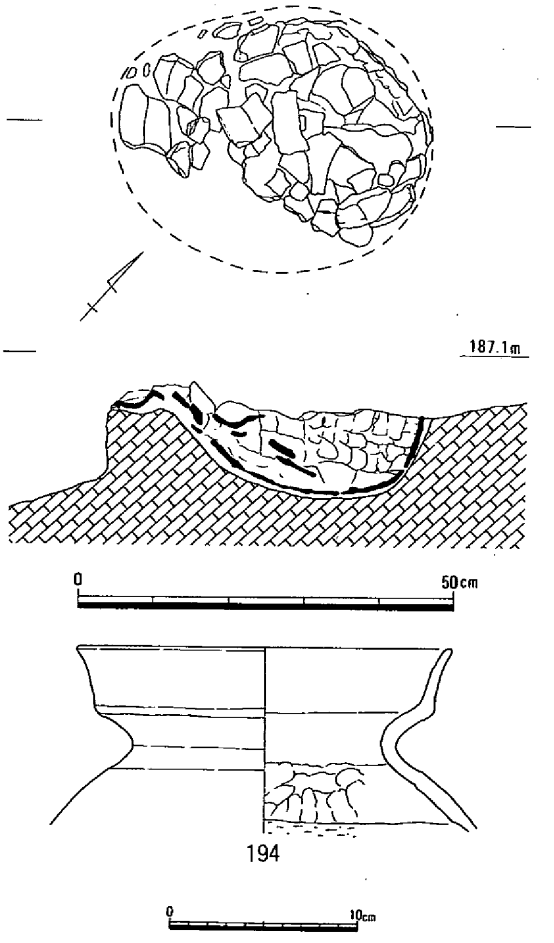
この溝状遺構は、古道の可能性もあるが、時期、性格とも不明としておきたい。

Ⅳ　遺　　物

土器No.１（第69図）

古墳の南墳丘外において検出された。墳端部から約８ｍ離れた丘陵尾根上から少し下がった地点に所在する。

土器は土師器の壺で、１個体が単独で出土した。口縁部を南西方向（丘陵



第69図　土器No.1　出土状態(1/10)
および実測図(1/4)

斜面の低い方向）に向けて横方向に据えられていた。口縁部および体部の一部はつぶれた状態で内側に落ち込んでいた。また、上半部は削平のため一部破損していた。

この土器の設置方法については、土壙等の掘り方が明確に検出できず、土器が入るだけの土壙を掘って設置したのではないかと考えたい。

こうした、土器の形態や出土状態から、この土器は壺棺として用いられた可能性が高いと考えておきたい。

土器No.２（第70図195・200～202）

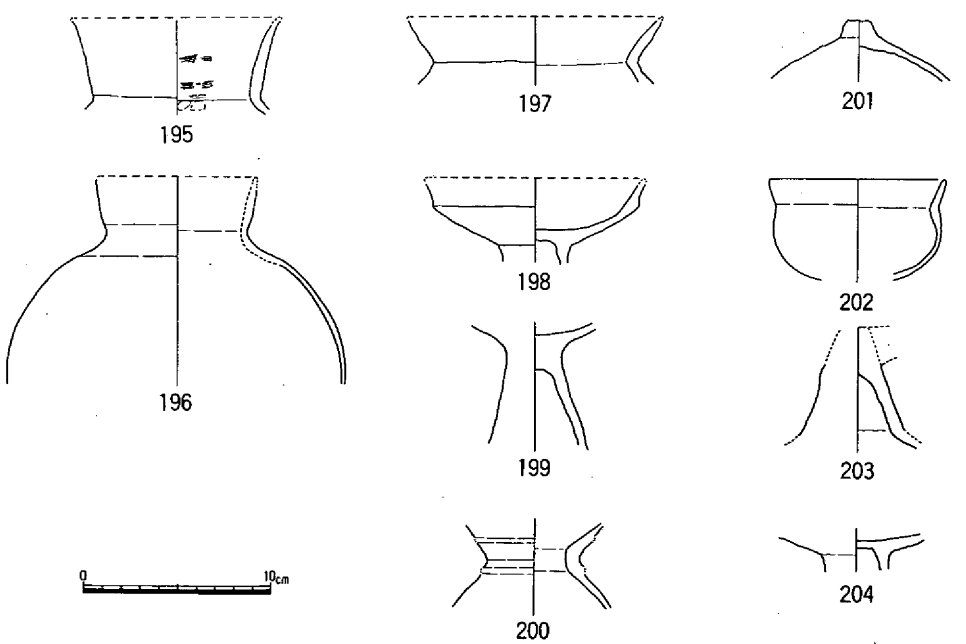
古墳の西墳丘外において検出された土器散布地である。土器小片が転落した葺石の間および下から数点出土した。この地点は丘陵斜面の変換点にあたっており、これらの土器片と転落した葺石との関係や、本来この地点に置かれていたかどうかについても不明である。また、古墳と関連する遺物かどうかも出土状況からははっきりしない。

土器No.３（第70図198）

古墳の北西墳丘外において検出された土器散布地である。土器小片が転落した葺石の間および下から数点出土した。これらの土器片が本来この地点に置かれていたものか、また古墳に関連するかどうかについては、出土状況からは不明である。

土器No.４（第70図196）

古墳の北西墳丘外において検出された土器散布地である。土器No.３の北に接しており、一連



第70図　土器No.2～No.7　実測図(1/4)

のものである可能性がある。土器片は転落した葺石の間や下から数点出土した。これらの土器片が本来この地点に置かれていたものか、また古墳に関連するかどうかについては、出土状況からは不明である。

土器No.5（第70図197）

古墳の北西墳丘外において検出された土器散布地である。古墳墳端に近く、転落した葺石の間および下から土器小片が数点出土した。これらの土器片が本来この地点に置かれていたものか、また古墳に関連するかどうかについては、出土状況からは不明である。

土器No.6（第70図203）

古墳の北西墳丘端部で検出された土器片である。この土器片（高杯）は、墳丘検出中に単独で出土したもので、古墳との関連については、出土状況からは不明である。

土器No.7（第70図199）

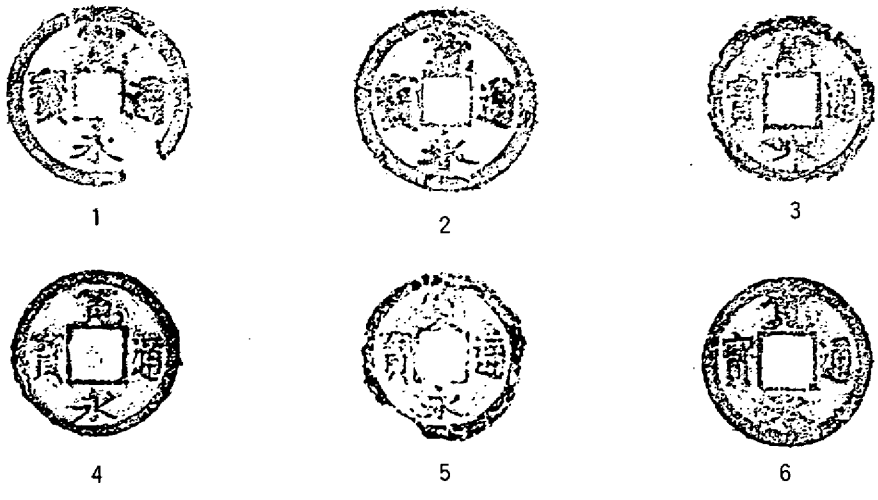
古墳の北墳丘外において検出された土器片である。この土器片は、地山検出中に石蓋土壙墓の北東隅で、また溝状遺構1に接して単独で出土した。しかしながらこれらの遺構および古墳との関連については、出土状況からは明確でない。

古銭（第71図）

古墳の北西墳丘外のやや平坦な地点において、表土層除去中および地山面検出中に5枚の古銭（第71図1～5）が、また古墳の北斜面確認調査トレンチ（第1章参照）から1枚の古銭（第71図6）が出土した。

古銭はいずれも「寛永通宝」で、遺構には伴ってはいなかった。また、古墳の北西墳丘外からは、備前焼の小皿片や磁器片が少量出土している。

こうしたことから、この丘陵上に近世墓が存在していた可能性が考えられる。



第71図　出土古銭(1/1)

第５表　荒神風呂古墳　出土土器観察表

番号	器種	調整の特徴	色調	備考
188	杯蓋	天井部外面ヘラ削り。	灰、7.5Y 5/1	小片を図上復元。
189	〃	天井部外面右方向ヘラ削り。	灰黄、2.5Y 6/2	ほぼ完存。
190	杯身	体部外面右方向ヘラ削り。	灰、N 6/0	〃　。
191	壺	体部下半内外面ナデ。	暗灰、N 3/0	
192	高杯		橙、5YR 6/8	内外面剝離。
193	甕	内外面ヨコナデ。	にぶい橙、7.5YR 6/4	
194	壺	体部内面指頭押え、ヘラ削り。	にぶい橙、7.5YR 7/4	
195	〃	体部内面ハケメ。	明黄褐、10YR 6/6	
196	〃		にぶい黄橙、10YR 6/3	全体に剝落。
197	甕		にぶい黄橙、10YR 7/4	〃　。
198	高杯		橙、7.5YR 6/6	〃　。
199	〃		にぶい橙、5YR 6/4	〃　。
200	鼓形器台		橙、7.5YR 6/6	〃　。
201			浅黄橙、10YR 8/4	〃　。
202	鉢		にぶい黄橙、10YR 6/4	〃　。
203	高杯		浅黄橙、7.5YR 8/4	〃　。
204	〃		橙、7.5YR 7/6	〃　。

第６表　荒神風呂古墳　出土鉄器一覧表

番号	器種	計測最大値（mm）			重量（g）	出土遺構	備考
		長	幅	厚			
6	剣	48	19	3	5.69	墳丘	
7	〃	83	25	6	17.75	〃	木質残存
8		50	17	4	15.37	〃	

第７表　荒神風呂古墳　出土古銭一覧表

番号	径（mm）	厚さ（mm）	孔径（mm）	種類	残存状態	備考
1	24.8	1.3	5.6×5.8	寛永通寶	磨滅	裏面は無文。
2	24.6	1.4	6.1×6.8	〃	良好	〃　。
3	22.8	1.2	6.1×6.4	〃	磨滅	〃　。
4	22.4	0.9	6.8×6.9	〃	〃	〃　。
5	22.1	1.3	6.4×6.7	〃	〃	〃　。縁一部欠。
6	23.0	1.0	6.5×6.9	〃	〃	〃　。

第６節　小　　結

古墳は標高約190ｍの丘陵尾根頂部に築かれていた。

墳形および規模は、径12～13ｍ、現存高約1.2ｍのややいびつな円墳と考えられる。丘陵尾根頂部を利用してつくられており、墳丘裾部を削り、頂部に盛土を施している。盛土は最大で厚さ40cmが残存していた。

墳丘上には葺石が確認できた。葺石はおもに10～20cmの石を用いていた。葺石の多くは転落した状態で検出されたが、築造時には、墳頂部を除いて墳丘裾部全体に２ｍ前後の幅で葺かれていたものと考えられる。

古墳主体部は３基確認された。１号主体部は土壙で、墳頂部中央に位置する。１号主体部は検出が困難で形状・規模は明確ではなかった。底面には２か所に枕石が存在し、複数の埋葬が想定できる。遺物は北東側の枕石周辺から管玉２個などが出土した。

２号主体部は１号主体部の北西に位置する箱式石棺である。完存状態で検出され、底面には小礫を敷きつめ、北東側小口部分に枕石が認められた。内部から遺物は出土しなかった。

３号主体部は２号主体部の北西部に接し、一部２号主体部を壊してつくられている箱式石棺である。完存状態で検出され、規模・構造とも２号主体部に類似している。底面には小礫を敷きつめ、北東側小口部分には枕石が認められた。また、内部から遺物は出土しなかった。

この古墳で注目されるのは、主体部以外に検出された墳丘外の複数の埋葬施設と集石遺構である。

墳丘外の埋葬施設としては、箱式石棺墓２基、石蓋土壙墓１基、土壙墓１基、配石土壙墓１基が検出された。これらは、墳丘を取りまくように配置されている。これらの埋葬施設のうち、２号箱式石棺墓と石蓋土壙墓は小規模で、成人以外の埋葬の可能性が強い。また、出土遺物はいずれの埋葬施設からも認められなかった。

集石遺構は、古墳の北東墳丘外に位置し、古墳の葺石と同じ石が長方形に積まれていた。また、丘陵尾根の高い部分には排水溝と考えられる溝が検出された。この集石遺構の南西隅からは、５世紀後半と考えられる須恵器・土師器が出土しており、古墳に関連する何らかの祭祀をおこなったのではないだろうか。

その他に検出された遺構・遺物のなかでは、土器No.１～No.７が注目される。土器の時期等については第５章で触れたいが、土器No.１については、古墳築造以前につくられた壺棺墓、また、土器No.２～No.７のうちのいくつかは、古墳に関連する時期の遺物の可能性が考えられる。

第5章　ま　と　め

荒神風呂遺跡、荒神風呂古墳ともそれぞれの概要については各章および小結で述べているので、ここではおもな注目点や問題点それに若干の考察を行なってみたい。

Ⅰ荒神風呂遺跡

今回検出された遺構・遺物は大きく以下の3期に区分することができる。

Ⅰ期（弥生時代中期後半）

竪穴住居1と土壙1および溝状遺構内水利施設がこの時期と考えられる。

このうち竪穴住居1は丘陵頂部の平坦面につくられている。径6.7m前後の円形の竪穴住居で、中央穴とともにその周囲に炉址と考えられる焼土面が3か所存在しており注目される。また、この住居内からは緑色片岩製の石器および石器未製品と剝片がかなり出土しており、石器製作を行なっていた可能性が考えられる。こうした例は、当遺跡の南東約500mの丘陵上に所在した旦原遺跡の№11住居址（弥生時代中期後半）でも確認されている（註1）。

Ⅱ期（弥生時代後期後半）

竪穴住居2、竪穴住居3および溝状遺構がこの時期と考えられる。

竪穴住居2は丘陵斜面部につくられている径8m弱のやや大型の竪穴住居である。一方、竪穴住居3は丘陵頂部につくられた径4m前後の小型の竪穴住居である。この住居は火災を被っており、建築部材が一部残存していた。また床面上からは完形の土器が出土し、住居廃棄時の状態の一端を伺うことができた。さらにこの住居には、地形の高い北東部に三ケ月状の遺構が認められ、炭化材の残存状態から住居に伴う遺構であると考えられる。この遺構については、これまで県北の丘陵上につくられた竪穴住居での検出例の多い「段状施設」または「段状遺構」とよばれている遺構と考えておきたい。但し、この住居では「段状施設」から床面までの深さが約25cmと従来知られている例では最も浅くなり、問題点として残る。

以上弥生時代の遺構・遺物は大きく2時期に区分することができたが、時期を確定できないが弥生時代の可能性が高い遺構がいくつか検出されている。

竪穴住居4は削平のため平面形は検出できなかったが、柱穴および中央穴の形状から弥生時代の竪穴住居と考えられる。時期を決定する証拠はない。推測ではあるが、Ⅱ期に竪穴住居が2軒存在すること、およびその位置関係を参考に考えれば、Ⅰ期に属するのかも知れない。

土壙4は形状・性格ともはっきりしない遺構であるが、竪穴住居2に切られており弥生時代の遺構と考えてよいであろう。

土壙3も時期決定の材料はないが、形状などから弥生時代の土壙墓の可能性を考えたい。

Ⅲ期（奈良時代末から平安時代初め）

遺構としては土壙2と溝状遺構が検出されたのみであるが、遺物は溝状遺構および調査区西端部の包含層中から多く出土しており注目される。

遺物は少量の内黒土師器椀などを除いて須恵器が殆んどである。須恵器の多くは杯蓋と杯身で、その他に壺、甕、擂鉢、鉄鉢、硯、稜椀、皿などがある。

これらの遺物で注目される第一の点は、3点確認されたヘラ描き文字の施された須恵器の出土である（第72図）。120は平瓶の底部外面に、151・152は杯蓋天井部内面に記されていた。いずれも鋭い工具で記されており似ている印象を受ける。120は1文字のみで、152も1文字のみの可能性が高いが、151は「大」の下に文字の一部が残存している。これらの文字の意味するところは現状ではわからない。

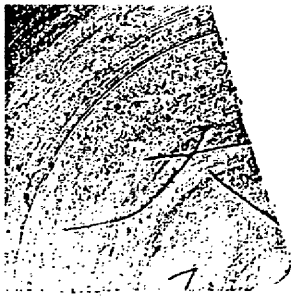
第二の注目点は、硯、稜椀、鉄鉢など特殊な須恵器の出土である。これらは従来の例では官衙跡や寺院跡からの出土が多いもので、当遺跡の性格を考えるうえで興味深い遺物である。

第三の注目点は、68・69・85・105・107～110・170・174・175などにみられる線刻や竹管状のスタンプ文である。これらは窯印の可能性が考えられ、窯跡を追求する手掛りとなるであろう。第2章で述べたように、当遺跡の北約1㎞の場所には同時期の窯跡が確認されており、採集された遺物の器形・胎土などの観察からは、この窯跡から供給された可能性が高い。

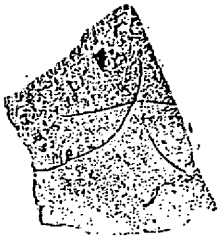
ところが、こうした特徴的な遺物が出土したものの今回の調査区からは建物など明確な遺構は何ら検出できず、遺跡の性格については現状では不明とせざるを得ない。

以上3期に分けて述べてきたが、それら以外に溝状遺構の上層から中世の亀山焼や青磁が少量出土した。しかしながら明確な遺構は存在せず、この時期の実態は不明である。

120



151



152

第72図　荒神風呂遺跡　出土須恵器　ヘラ描き文字(1/1)

Ⅱ荒神風呂古墳

墳形と規模について

古墳は径12～13m、高さ約1.2mの葺石をもつ円墳と考えたいが、若干の疑問点もある。

その一つは墳形に関してで、方墳の可能性があるのではないかということである。その根拠の一つは葺石の残存状態である。多くの葺石は転落した状態を示してはいるが、第50図に示したように方墳とも考えられる検出状況であった。しかしこの点については、南西および北東部分の葺石については地形による転落の可能性が強く、また北東、南東、南西墳丘上に現位置を留めていると考えられるわずかな葺石が、直線状に並んでいないことから円墳と考えた。第二の根拠は地形測量の結果、東・西部分が明らかに直線状を呈する点である。この点については、逆に北・南が明確な直線を呈しないことから、一部直線状を呈する円墳として理解した。

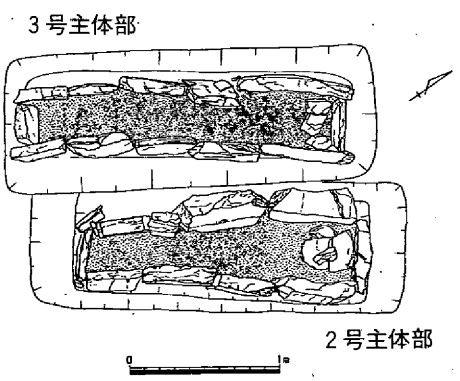
なお、直接墳丘からではないが、主体部および墳丘外の埋葬施設が方墳とした場合の辺を意識してつくられていないことも参考にした。

第二の問題点は規模についてで、墳端をどこで把えるかという点である。この古墳には周溝はなく、また墳丘測量図からも明確にはし難かった。一応標高189m付近を墳端と考えたが、1m前後の誤差は考えられる。

主体部について

1号主体部はすでに述べたように検出が困難で、墓壙については明確でない。また、枕石の検出状況から複数の埋葬が考えられ、時期を異にする埋葬であれば、墳丘検出中に出土した第49図の鉄器が1号主体部に本来副葬されていた可能性が考えられないだろうか。

次に3基の主体部の築造順序についてである。2号・3号主体部については第73図に示したように切り合い関係があり、3号主体部が新しい。また、墳頂部に位置する1号主体部が最初の埋葬である可能性が高い。したがって、1号→2号→3号の順につくられたと考えたい。



第73図　荒神風呂古墳　2・3号主体部 (1/50)

墳丘外埋葬施設について

箱式石棺墓2基、石蓋土壙墓1基、土壙墓1基、配石土壙墓1基を検出した。このうち配石土壙墓は検出が困難で規模等は推定である。

まず、配置をみるとそれぞれの埋葬施設は古墳を取り囲むようにつくられている。そのうち1号箱式石棺墓と石蓋土壙墓は墳丘端部に接してつくられている。次に規模でみると、2号箱式石棺墓と石蓋土壙墓が、主体部も含めて他の埋葬施設より小型である。成人以外の埋葬を考

えるべきであろう。その他、1号箱式石棺墓は規模・形態および枕石や小礫を敷いた底面など2号・3号主体部に類似する。しかしながら墳丘外にあり、意識されたのか、単に墳丘内に葬る場所がなくなったと考えられたのかはよくわからない。また土壙墓や2号箱式石棺墓にも枕石があり、主体部との埋葬方法の共通性が認められ、生前の関係を伺うことができる。

いずれにせよ、こうした墳丘外の複数埋葬については県内でも調査例は多くなく今後検討を加えていきたい。

集石遺構について

古墳に関連する何らかの祭祀場と考えたが、県内では類例もなく、祭祀の実態など不明である。この集石遺構の築かれた時期については集石下で出土した遺物から5世紀後半であることは確かであろう。ただし、これが古墳の築造時か、廃絶時かなどについてははっきりしない。ここでは、墳丘に残存する葺石が多くはなく、この集石遺構が古墳築造後、葺石を転用して築かれた可能性を考えておきたい。この点は次に述べる古墳の時期とも関連してくる。

時期について

1号主体部から管玉が2個出土した。古墳前半期の可能性が高いが、時期は明確でない。集石遺構からは5世紀後半の土器が出土しており、先に述べたように古墳築造後につくられたとすれば、古墳築造はそれ以前と考えられる。

そこで参考にしたいのは、その他の遺構・遺物で記した土器No.1～No.7である。土器No.1は県南の土器編年で言えば（註2）「酒津式」から「下田所式」ぐらいと考えられ、古墳とは直接関係しないと考えたい。ただし、土器No.1は壺棺であろう。土器No.2～7の多くは墳丘西側の墳端部で出土した（第63・70図）。これらのうち、202を除いては、ほぼ「亀川上層式」から「大溝上層式」頃と考えられないだろうか。そこでこれらの土器が古墳築造に関連する遺物と考え、古墳築造をこの時期と考えておきたい。また、先の集石遺構の構築期については古墳の廃絶時に近い時期と考え、この古墳はほぼ「4世紀中頃」（？）から5世紀後半頃まで埋葬が続けられたと考えておきたい。

最後に、周辺の古墳との関連を少し考えてみたい。第2章でも述べたように西河内の平野を望む古墳としては、中山丘陵上に4世紀代と考えられる前方後円墳である横部1号墳を含む30基余りの古墳群がある。一部調査が行なわれているが、多くは6世紀代の円墳である。また、西河内の谷部に所在する摺峪古墳群なども横穴式石室をもつ6～7世紀の円墳である。このように当地域では、横穴式石室導入以前の前半期の古墳の実態は明らかでなく、今回の調査は複数埋葬のあり方等貴重な資料となるものである。

（註1）「旦原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（14）』　岡山県教育委員会　1977年
（註2）「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（16）』　岡山県教育委員会　1977年

1．荒神風呂遺跡・荒神風呂古墳　遠景（南東から）

2．荒神風呂遺跡・荒神風呂古墳　遠景（西から）

図版 2

1．荒神風呂古墳　近景（確認調査実施中）（南西から）

2．荒神風呂遺跡　近景（荒神風呂古墳から）（北西から）

1．荒神風呂古墳　確認調査
西トレンチ（西から）

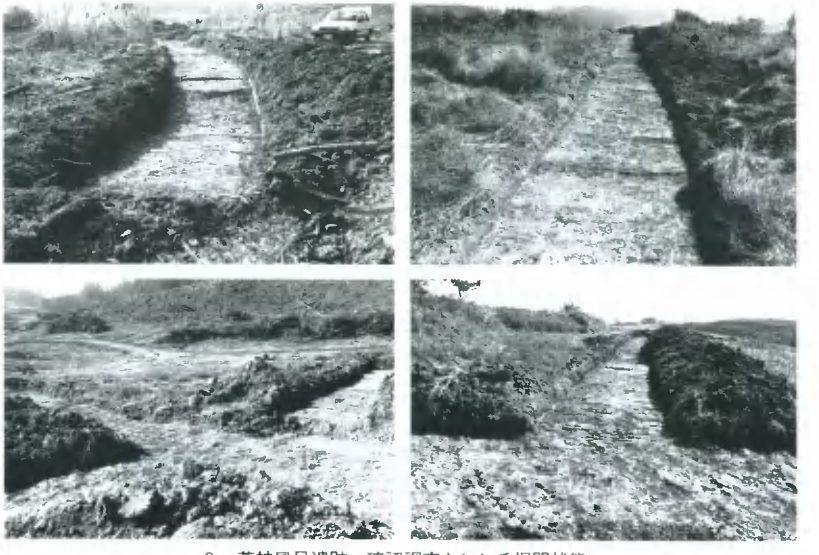
2．同　北トレンチ（北から）

3．同　南トレンチ（南から）

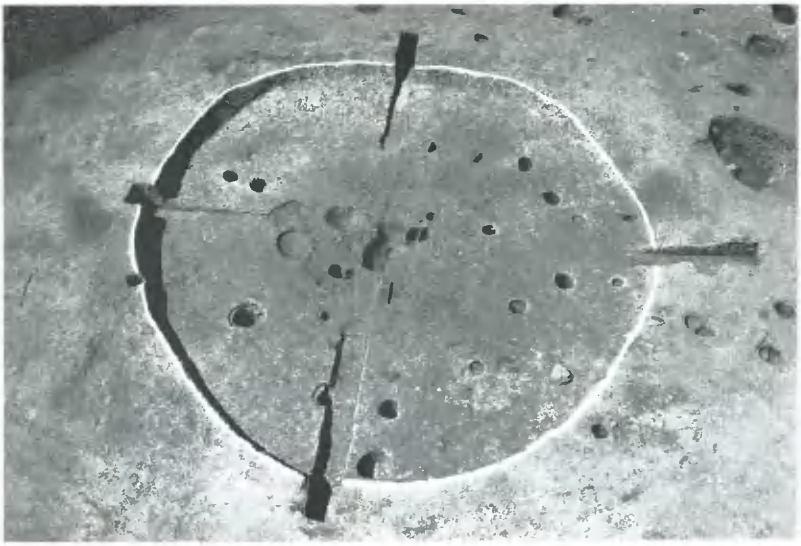
4．同　東トレンチ（南東から）

図版 4

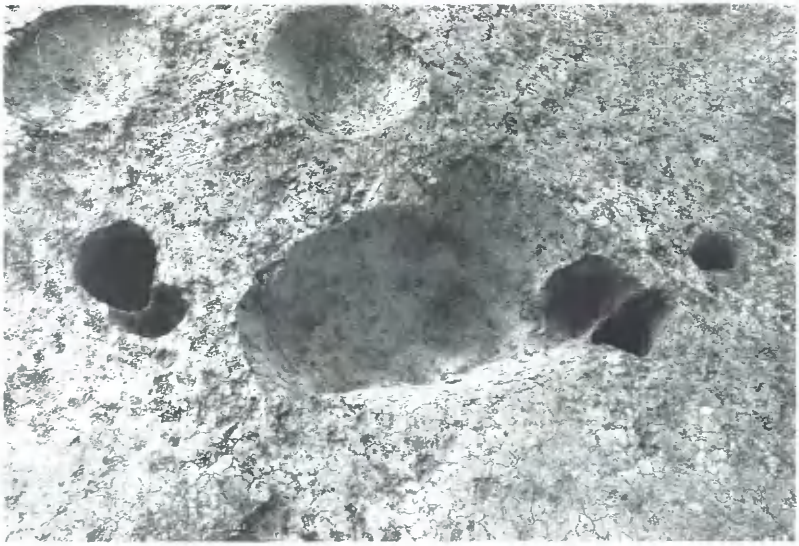
1．荒神風呂遺跡　確認調査トレンチ掘開状態全景（西から）



2．荒神風呂遺跡　確認調査トレンチ掘開状態



1．荒神風呂遺跡　竪穴住居１（南から）



2．荒神風呂遺跡　竪穴住居１　中央穴、炉１・３（南東から）

図版 6

1．荒神風呂遺跡　竪穴住居１　中央穴埋土（南から）

2．荒神風呂遺跡　竪穴住居１　炉１（南から）

1．荒神風呂遺跡　竪穴住居２（南西から）

2．荒神風呂遺跡　竪穴住居２　中央穴（南から）

図版 8

1．荒神風呂遺跡　竪穴住居２　中央穴埋土（南東から）

2．荒神風呂遺跡　竪穴住居３（南西から）

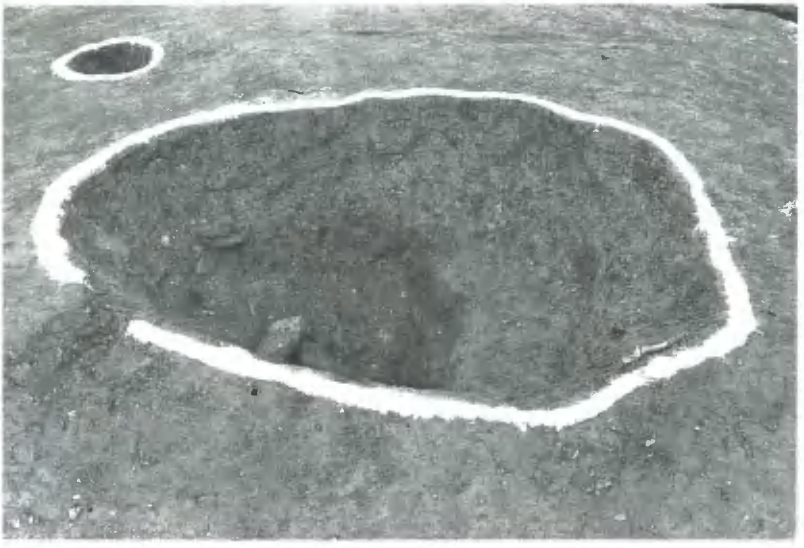
1．荒神風呂遺跡　竪穴住居３（南西から）

2．荒神風呂遺跡　竪穴住居３　遺物出土状態（南西から）

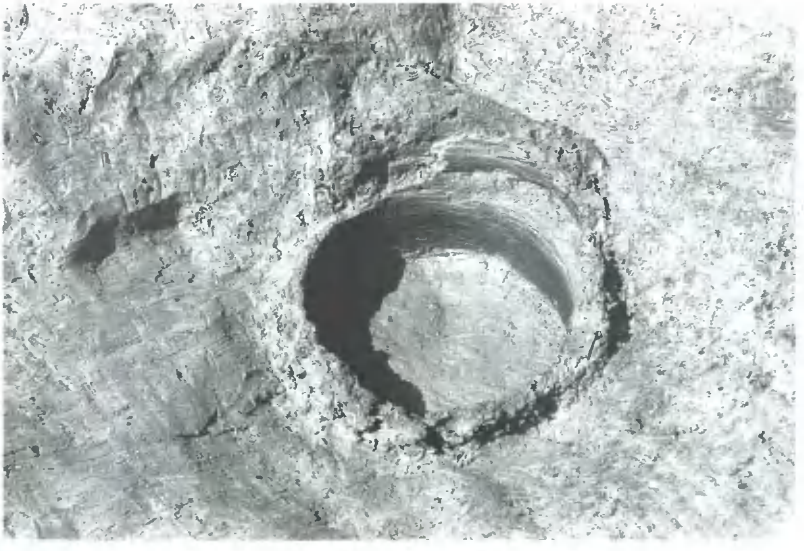
図版10

1．荒神風呂遺跡　竪穴住居３　炭化材

2．荒神風呂遺跡　竪穴住居４（南西から）

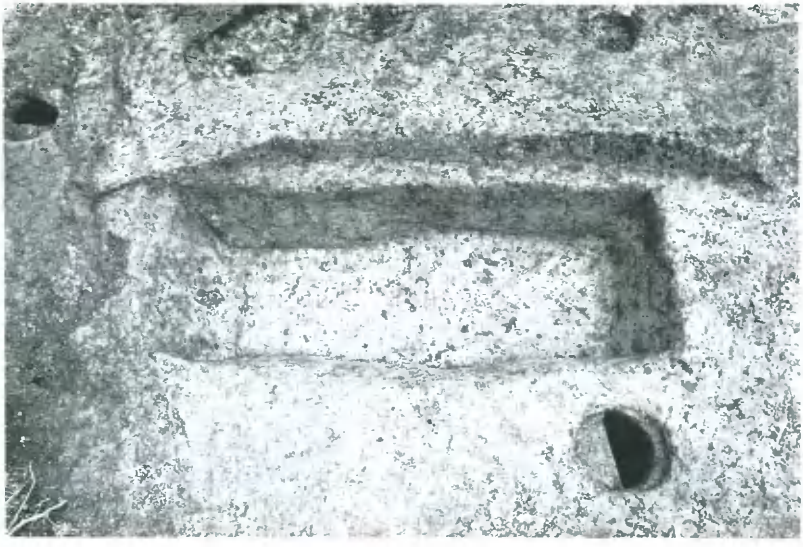


1．荒神風呂遺跡　土壙１（南西から）



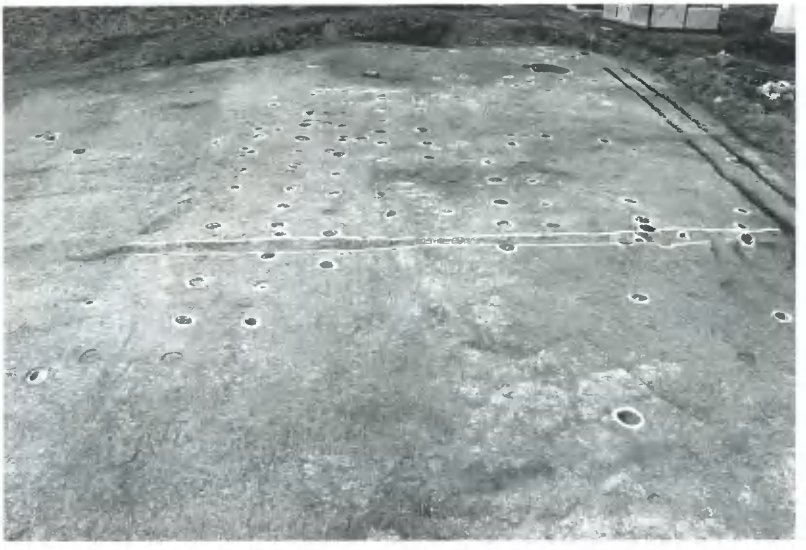
2．荒神風呂遺跡　土壙２（南東から）

図版12



1．荒神風呂遺跡　土壙３（南西から）

2．荒神風呂遺跡　土壙４（南東から）



1．荒神風呂遺跡　柱穴群１（南から）

2．荒神風呂遺跡　柱穴群２（南西から）

図版14

1．荒神風呂遺跡　溝状遺構（南東から）

2．荒神風呂遺跡　溝状遺構内水利施設（南東から）

1．荒神風呂遺跡　溝状遺構内水利施設（南西から）

2．荒神風呂遺跡　溝状遺構内水利施設（南東から）

図版16

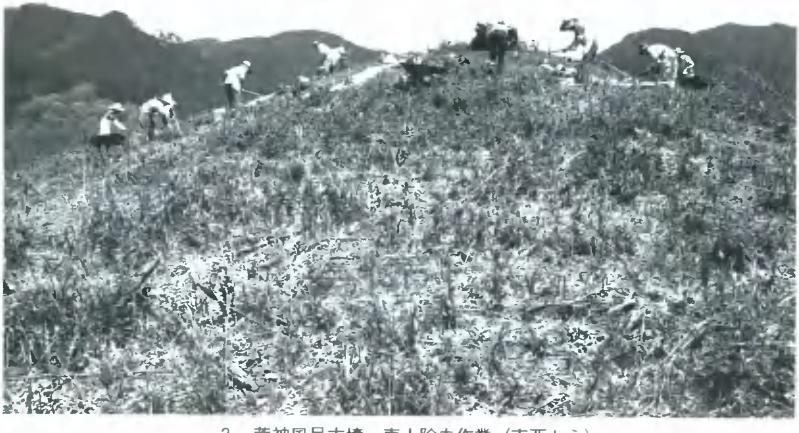
1．荒神風呂遺跡　溝状遺構内水利施設掘上げ状態（南東から）

2．荒神風呂遺跡　溝状遺構内水利施設石包丁出土状態（南東から）

1．荒神風呂遺跡　溝状遺構断面（北から）

2．荒神風呂遺跡　南西端部（北西から）

1．荒神風呂古墳　全面調査前の状態（北から）



2．荒神風呂古墳　表土除去作業（南西から）

1．荒神風呂古墳　全景（南から）

2．荒神風呂古墳　全景（北西から）

図版20

1．荒神風呂古墳　葺石検出状態（南から）

2．荒神風呂古墳　葺石検出状態（南から）

1．荒神風呂古墳　葺石検出状態（南から）

2．荒神風呂古墳　墳丘断面（西から）

図版22

1．荒神風呂古墳　1号主体部（南東から）

2．荒神風呂古墳　1号主体部　管玉出土状態（南東から）

1．荒神風呂古墳　2号・3号主体部（北西から）

2．荒神風呂古墳　2号・3号主体部（北から）

図版24

1．荒神風呂古墳　2号・3号主体部（南西から）

2．荒神風呂古墳　2号・3号主体部（蓋石除去後）（北西から）

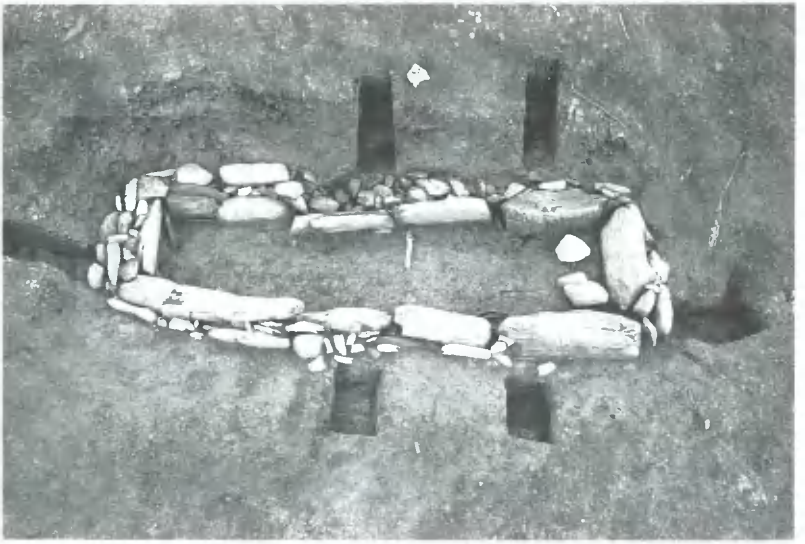
1．荒神風呂古墳　2号・3号主体部（蓋石除去後）（北から）

2．荒神風呂古墳　2号・3号主体部（蓋石除去後）（南西から）

1．荒神風呂古墳　2号・3号主体部　枕石検出状態（南西から）

2．荒神風呂古墳　2号・3号主体部　石材除去後の状態（北西から）

1．荒神風呂古墳　1号箱式石棺墓（南東から）



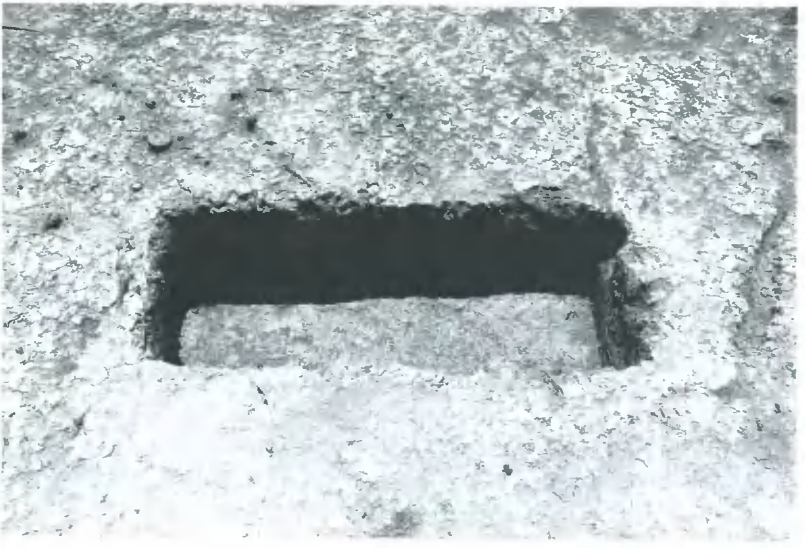
2．荒神風呂古墳　1号箱式石棺墓（蓋石除去後）（南東から）

1．荒神風呂古墳　1号箱式石棺墓　枕石検出状態（南東から）

2．荒神風呂古墳　1号箱式石棺墓　調査風景（南から）

1．荒神風呂古墳　２号箱式石棺墓（北から）

2．荒神風呂古墳　２号箱式石棺墓（蓋石除去後）（北から）



1．荒神風呂古墳　2号箱式石棺墓　石材除去後の状態（北から）

2．荒神風呂古墳　石蓋土壙墓（南から）

1．荒神風呂古墳　石蓋土壙墓（蓋石除去後）（南から）

2．荒神風呂古墳　石蓋土壙墓　石材除去後の状態（南から）

1．荒神風呂古墳　土壙墓（南西から）

2．荒神風呂古墳　土壙墓　枕石検出状態（南東から）

1．荒神風呂古墳　配石土壙墓（南から）

2．荒神風呂古墳　集石遺構（南東から）

図版34

1．荒神風呂古墳　集石遺構（北から）

2．荒神風呂古墳　集石遺構（南西から）

1．荒神風呂古墳　集石遺構（南東から）

2．荒神風呂古墳　集石遺構　遺物出土状態（南東から）

1．荒神風呂古墳　集石遺構　遺物出土状態（南西から）

2．荒神風呂古墳　集石遺構　遺物出土状態（北東から）

1．荒神風呂古墳　集石遺構　集石除去後の状態（北から）

2．荒神風呂古墳　土器 No. 1（南東から）

1．荒神風呂遺跡　竪穴住居３　調査風景（東から）

2．荒神風呂古墳　２号・３号主体部　調査風景（西から）

20

181

181

120

129

172

129

荒神風呂遺跡　出土土器

図版40

56

79

63

90

59

88

62

85

101

158

99

160

荒神風呂遺跡　出土土器

111

117

103

162

122

25

119

11

148

荒神風呂遺跡　出土土器

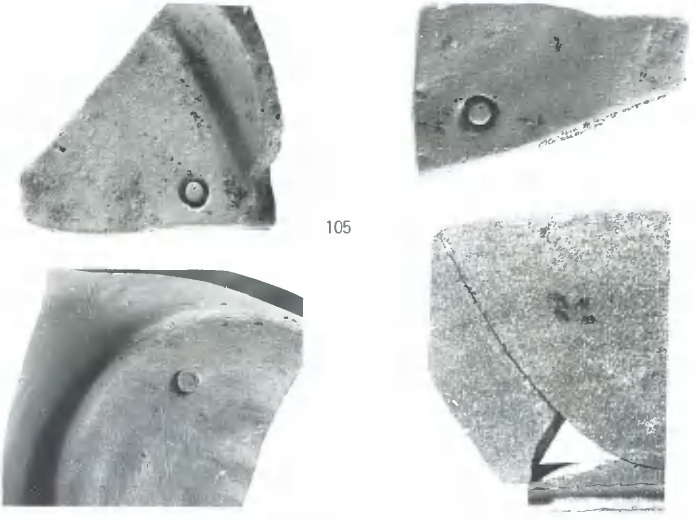
151

152

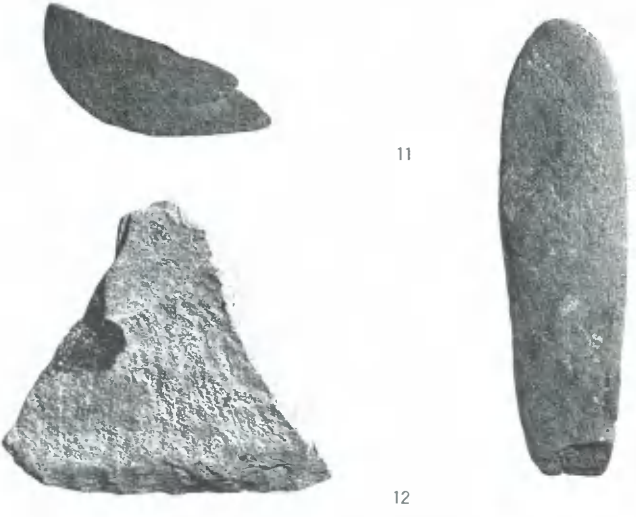
120

85

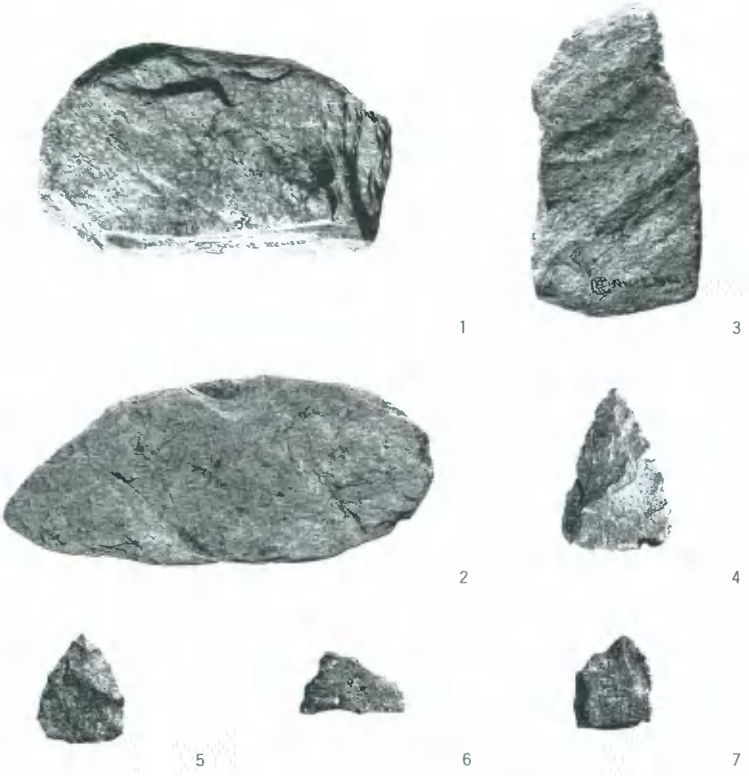
荒神風呂遺跡　出土ヘラ描き須恵器



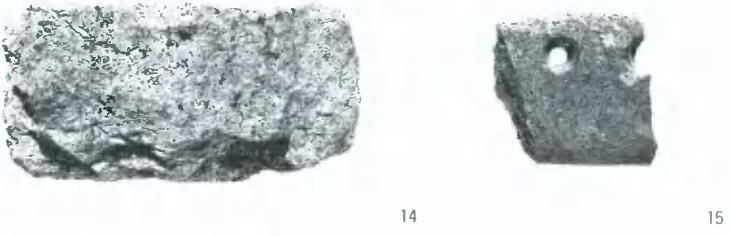
1．荒神風呂遺跡　出土土器



2．荒神風呂遺跡　溝状遺構　出土石器



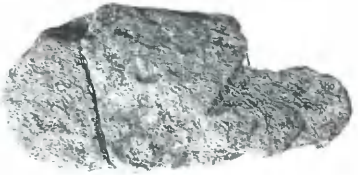
1．荒神風呂遺跡　竪穴住居1　出土石器



2．荒神風呂遺跡　柱穴群2周辺　出土石器

10

8



9

16

1．荒神風呂遺跡　出土石器

2．荒神風呂遺跡　竪穴住居１　出土石片

189

191

190

192

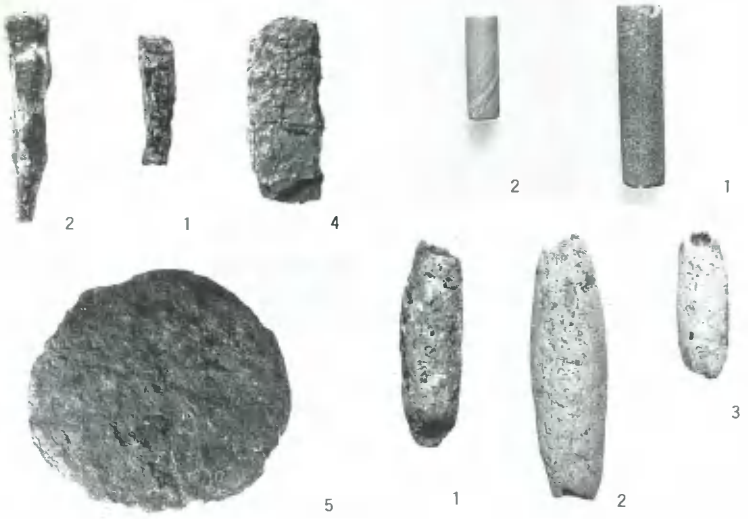
1．荒神風呂古墳　集石遺構　出土土器

6

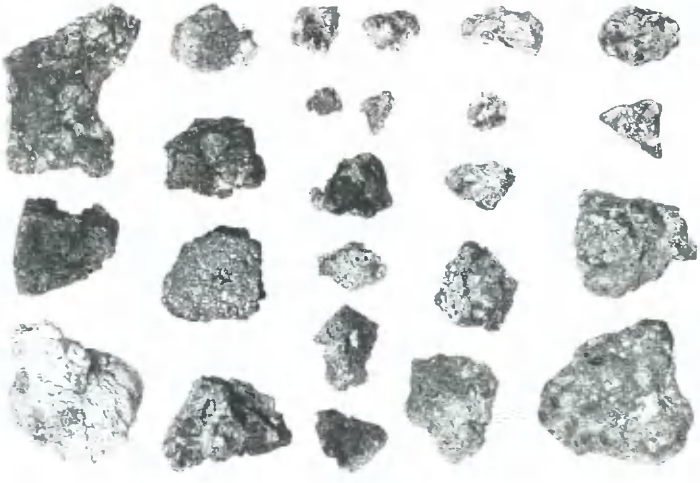
7

8

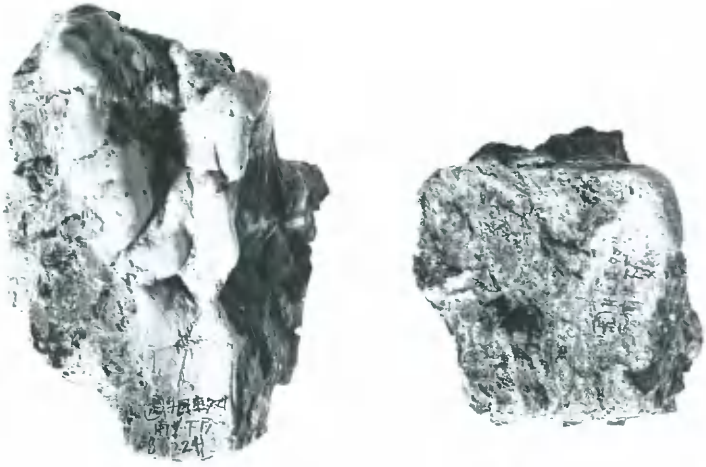
2．荒神風呂古墳　墳丘検出中　出土鉄器



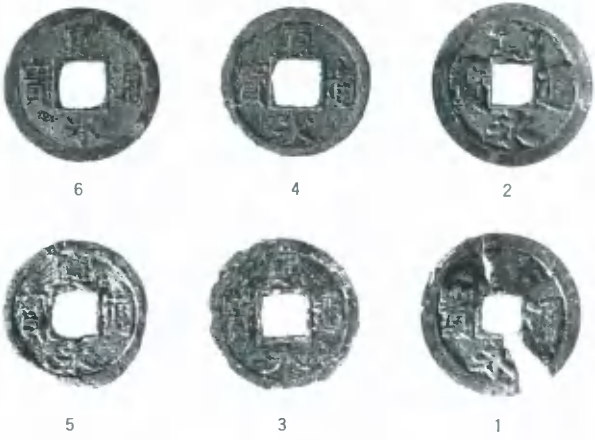
1．荒神風呂遺跡　出土鉄器・土錘、荒神風呂古墳　1号主体部　出土管玉



2．荒神風呂遺跡　溝状遺構　出土鉄滓



1．荒神風呂遺跡　溝状遺構　出土羽口



2．荒神風呂古墳　出土古銭(寛永通宝)

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告76

荒神風呂遺跡
荒神風呂古墳

1990年3月20日印刷
1990年3月30日発行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
発行　岡山県教育委員会
印刷　西日本法規出版株式会社